安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター

2017年度 事業報告書

Asama Yatsugatake Panorama Trail
Nenbo Rock

「自然体験活動は、

子どもたちの創造力やチャレンジ精神を育む」

公益財団法人 安藤スポーツ･食文化振興財団

理事長　安藤 宏基

安藤スポーツ･食文化振興財団は、日清食品創業者 安藤百福が掲げた「食とスポーツは健康を支える両輪である」の理念の下に、青少年の健全育成と食文化向上のための公益事業を行っています。陸上競技の支援事業、新しい食品の開発に貢献する独創的な研究を支援する食創会「安藤百福賞」表彰事業、安藤百福発明記念館（愛称：カップヌードルミュージアム）の運営（大阪池田と横浜の 2 ヶ所）のほか、1983 年の財団設立当初から、自然体験活動の普及に取り組んでいます。

2002 年からスタートした「トム･ソーヤースクール企画コンテスト」では、「自然体験は子どもたちの体力、創造力、チャレンジ精神を育む」との考えに基づき、全国の学校や団体から自然体験活動の企画案を公募し、創造性に富んだ企画を立案した 50 団体を支援し、活動報告を基に優秀団体を表彰しています。また、2010 年 5 月に、長野県小諸市に自然体験活動を推進するための人材育成や、アウトドア活動の普及を目的として、「安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター」（略称：安藤百福センター）を設立しました。安藤財団では、この 2 つの事業に加え、自然体験活動は山、川、海など、どのフィールドでも「歩く」ことが基本であると考え、「歩く文化」の醸成を図るため、ロングトレイルの普及・振興に取り組んでいます。そして、新たに 2018 年度より日本列島の北端から南端まで、列島を貫く一本道の「JAPAN TRAIL プロジェクト」を立ち上げます。

2016 年から、新たな国民の祝日として「山の日」（8 月 11 日）が制定･施行されました。私も微力ながら「全国山の日協議会」（谷垣禎一会長）の副会長として活動に参加させていただいておりますが、「山の日」の施行が自然体験活動やロングトレイルのより一層の普及・振興に繋がることを期待しています。

今後とも引き続きご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

安藤百福記念
自然体験活動指導者養成センター

2017 年度　事業報告書

MOMOFUKU
ANDO
CENTER
安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター

2017 年度 事業報告書

CONTENTS

JAPAN TRAIL へ	中村 達	4
道を歩く愉しみ、道を探す悦び	節田 重節	12
ヒマラヤ・トレッキングの楽しさとロングトレイル	神長 幹雄	22
ハイカーから見たロングトレイル	根津 貴央	27
第 5 回ロングトレイルシンポジウム		
ご挨拶	安藤 宏基	33
Why Long Distance Trails are Important to the World	Galeo Saintz	36
オリンピックレガシー	水野 正人	47
観光先進国への取組～スポーツツーリズムを中心に	斉藤 永	53
パネルディスカッション「ロングトレイルにおけるインバウンドへの課題」		62
ルーカス B.B、近藤 謙司、高野 賢一、節田 重節		
コーディネーター	中村 達	
日本ロングトレイル協会新加入団体紹介		
岩手山・八幡平・安比高原 50km トレイル		82
びわ湖比良比叡トレイル		85
伯耆国ロングトレイル（仮称）		88
大江山連峰トレイル		92
石鎚山系ロングトレイル		95
トレイル道標 統一整備プロジェクトについて	荒金 善一	98
小諸絶滅危惧種ビオトープ プロジェクト		104

事業報告

ロングトレイルのつくり方講座 108
ロングトレイルハイカー入門講座 113
大人のトレイル歩き旅講座 122
千曲川コースオープニングイベント 128
みんなでダイヤモンド浅間を見に行こう！ 130
みんなでパール浅間を見に行こう！ 131
第 10 回橋谷晃さんと歩くトレッキング講座 133
自然ガイドのための安全管理技術研修 135

安藤百福センター事務局スタッフ近況 140

巻末資料

新聞掲載記事 142
安藤百福センター運営組織 146
2017 年度実施事業 147
2017 年度研修利用状況表 148

編集後記 151

JAPAN TRAIL へ

中村　達（安藤百福センター センター長）

イタリア北部のドロミテ山塊で、中学校の集団ハイキングに出会った。どの山群でも学校のハイキング姿があった。また、山塊を巡るトレイルでは、家族連れや乳飲み子を背負ったハイカーを数多く見かけた。「歩く」ことが日常的な光景で、人々のライフスタイルになっているようだ。

子どもたちの服装を見ていると面白い。炎天下にもかかわらず、大半の子どもたちはサングラスを掛けてはいるが、帽子は被らず、T シャツに半ズボン、トレッキングシューズというスタイルだ。日本では考えられないハイキング・スタイルで、熱中症になろうものなら引率者は責任を問われるに違いない。是非は分からないが、民族的なものか、人種による違いなのか、あるいは習慣なのか。山に向かう、山を歩くという生活文化の違いを見せられた気がした。

学校の集団ハイキング（イタリア　ドロミテ）

ドロミテ山塊やその周辺にはトレイルが無数にあり、それらを繋ぐとロングトレイルとなり、それはオーストリアやアルプスを越えてスイス、さらにはフランスやドイツにも繋がっている。これはイタリアに限らず、スイスやフランスなどヨーロッパ・アルプス周辺の国々でも同じような情景が見られる。

アウトドアズはハードな登山からライフスタイル型へ

2017 年度のアウトドアズの市場規模は堅調で、およそ 4,200 億円と推計されている（矢野経済研究所）。最近ではアウトドア・ウェアの日常化が進んで、ファッションとして利用され、市場規模が拡大している。これを「ライフスタイル市場」とアウトドア業界では呼んでいる。一方で、ハードな山登りやクライミングは低調である。旧来の登山は、雪山での遭難事故などが相次ぎ、やや敬遠されている気配だ。

高島トレイル（滋賀県）

そんな中で、従来型の「健康ウォーキング」だけでなく、山や自然の中を歩く旅が、特に若者たちの間で静かなブームになってきたようだ。中高年の「健康ウォーキング」や「山歩き」とは異なり、群れることを好まず、ファッショナブルにアウトドア・ウェアを着こなして、旅を楽しむスタイルが見られるようになった。彼らがロングトレイルやウォーキングに興味を持ち始めたのも、自然の成り行きかもしれない。かつてのバックパッキングの再現に似た雰囲気とも言える。ただ、1970 年代のブームと異なる点は、アメリカン・アウトドアライフへの憧れだけではなく、自然志向や環境問題への意識の高まりなど、ライフスタイルに根ざしたもののように見受けられる。具体的には「山旅」のような型であろうか。この山旅が、ロングトレイルとその延長線状にある JAPAN TRAIL ※商標権申請中 が目指すものと考えたい。

各地に誕生するロングトレイル

登山は 1 つのピーク、またはせいぜい複数のピークを登るというのが、ほぼ一般的な認識だ。しかし、ロングトレイルはピーク・ハンティングで目的を達成するものではない。ピークからピークへ、峠から峠へと続いて、連なって、ようやく帰結する。例えば、里山から山頂へ、さらに里山を歩き、峠から新たなピークを越えて麓の集落に着く。そして、最寄りのバス停から帰るというように、そのルートが長く続くのがロングトレイルである。

特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会は、任意団体としての活動期を含めて 7 年が経過した。そして、特定非営利活動法人として認証され、安藤百福センターに事務局を設置して 3 年である。

設立当初は 5 つのロングトレイルでスタートしたが、その後加入トレイルが増え、2018 年 3 月末には石鎚山系ロングトレイルが加入し、23 運営団体となっている。2018 年度も数トレイルが加入の見込みで、今後さらに増えていくものと思われる。

日本ロングトレイル協会会員トレイル（2018 年 3 月末現在）

ロングトレイルの整備は、地域や地域観光の活性化が主要な目的の 1 つである。一方で国民のニーズは「見て」「食べて」「寝る」の観光だけでなく、健康や自己啓発、さらには自然環境保全への関心が高まり、自然を「歩く」ことが大きなムーブメントとして台頭してきた。これは国内だけの状況ではなく、世界各国でも「歩く」ことの機運が高まって、それがロングトレイルの整備に繋がり、米国はもとより、中南米、アジア、アフリカ、中東、ヨーロッパなどの諸国でも新たなトレイルが整備されつつある。

このように、世界中で老若男女を問わず、バックパックを背にした多くのハイカーやバックパッカーの姿が見られるようになったし、今後も増え続けることだろう。

浅間･八ヶ岳パノラマトレイル（長野県）

コラム『イギリスからのメール』

節田　紫乃

「最近、私にはある仮説があります。バブル時代を知らない若者、ゆとり世代、さとり世代と言われている人たちは、実はトレイル歩きを一番理解できる年代なのではないかと感じています。私を含めたバブルを知っている世代は、今の若者は欲がない、野心がない、夢がないと批判しがちですが、逆に質素で倹約家の彼らの方が、松尾芭蕉のように、あてもなくひたすら歩く放浪の旅（トレイル・ウォーク）に向いているように感じます。現に日本でも、そして英国を含む欧州でも、巡礼の旅が若者たちの間で静かなブームになっています……。」

節田　紫乃（せつだ　しの）　英国在住、フットパス研究家。ファルマス大学大学院広告学科卒。現在エセックス州の片田舎に、ヴァイオリン職人の夫、愛犬とともに暮らす。ガーデナーとして活躍するかたわら、英国をさらに理解するために、ウォーキング文化をリサーチし続けている。http://rambleraruki.com/

日本列島を貫く一本道「JAPAN TRAIL」

日本の北から南までを貫く一本の道。それも海岸線に沿ってだけではなく、山間部を通る道を「JAPAN TRAIL」とした。日本を貫くトレイルは、けっして私たち独自のアイデアではなく、これまで多くの人たちが構想を練り、思い描いていたのでは、と想像する。

中でも登山・山岳界では、例えば日本列島の中央分水嶺を繋ぐであるとか、日本百名山を連鎖する道など、数多くの構想があったと思われる。ただ、これらの構想は様々な課題や障害があって、いまだ具現化はされていないようだ。少なくとも広く社会的に認められ、誰もが知るようなトレイルには至っていないと思われる。

日本列島の地図上で、歩いてみたい道や理想のトレイル・ラインを引くことは、さほど難しくはない。また、労力と日数は要するが、発案者が個人として独自に歩いてトレースすることに、大きな障害や問題はない。

しかし、実際にトレイルとして周知させ、内外の多くのハイカーやアドベンチャラーが歩くまでには、気の遠くなるような膨大な作業と、相応の年月が必要とされる。

その点、私たちが行ってきたロングトレイルを整備するスキームは、すでに日本ロングトレイル協会として全国で 23 のトレイル（2018 年 3 月末）がメンバーとなり、総距離はおよそ 2,300km である。JAPAN TRAIL は、原則としてこれらのロングトレイルをコネクトする構想である。その点がアドバンテージと考えているが、もちろん容易ではない。

また、1878 年（明治 11 年）に東京から北海道の日高まで歩いて旅をし、日本の自然と人々を絶賛した英国人旅行作家イザベラ・バード。松尾芭蕉の奥の細道、さらには間宮林蔵、松浦武四郎らが歩いたとされる探検路なども、JAPAN TRAIL のルート設定の参考に

なると考えている。

ムーブメントの背景

地球規模で考えると、日本は小さな島国である。しかし、日本列島を俯瞰して、地域が連鎖するような視覚が意外に少ないような気がする。例を挙げるなら、JR が民営化され、地域ブロックごとに分割された。そのため、東海道新幹線が九州まで繋がっているようなイメージが私には希薄に思える。また、京都から北海道まで繋がっていると、あまり考えないのではないか。東京までが一区切りで、そのあとは青森まで。北海道は北海道だけで、イメージが帰結している。この分割化によって、連続性がより想像できなくなったような気がする。高速道路も同様だ。

シルクロードは何千 km もの距離があり、連綿と繋がる交易の道であった。天山山脈やゴビ砂漠、あるいはカラコルムやヒンドゥ・クシュ山脈などを越えて、どこまでも続いた。シルクロードと聞くと、心ときめくのは私だけではないはずだ。

20 歳のとき、西アジアの砂漠の上に立った。そこはまさにシルクロードで、東は中国へ、西はヨーロッパに続いていると思うと、灼熱の暑さも忘れて、ただただ感動して立ちつくしたのを鮮明に憶えている。

一方、東海道や中山道は、歴史と文化に彩られた非常に魅力的な古道であり、現在も基幹の幹線道路が走っている。が、イメージは車が往来する国道や県道などで完結するように思われる。東海道が山陽道に連続しているというイメージが、私には湧いてこないのだ。

北アルプス　双六岳付近

私たち日本人は、このコネクトという概念が希薄ではないかと、安藤財団の理事長に説明すると、それは我々の世代だけで、若い人たちにとってコネクトは、時代のキーワードだと指摘された。確かに指摘のとおりだった。

そこでふと気がついた。だとすれば、若者たちにとって日本列島を縦断するトレイルはイメージしやすいし、コンセプトも伝わりやすいのではないだろうか。

一方、私たちの世代や、それに続く世代が、日本列島が頭の中で一本道で繋がれば、ロ

マンも膨らみ、少しは歩いてみたいと思うかもしれない。

少なくとも「歩く一本道」ができれば、日本列島が北から南まで、連続性のあるイメージデザインで形作られるかもしれない。それは、インバウンドで訪れる外国人にとっても分かりやすく、魅力的に映り、歩いてみたいと思うのでは、と想像する。

JAPAN TRAIL プロジェクト

JAPAN TRAIL は、プロジェクトとして安藤百福センター内に、JAPAN TRAIL 制作委員会と事務局を設置し、活動する予定である。安藤財団のサポートを受け、日本ロングトレイル協会とは密接な協力関係を予定している。ただ、現時点では日本ロングトレイル協会とは別組織であり、異なるスキームとしたい。なぜなら、想定されるルート上には協会会員のトレイルばかりではなく、旧来の古道や街道、山道など、管理者や運営者の性格が異なる場合が数多く存在すると予想されるからだ。つまり、協会がすべてをカバーできるわけはなく、コミットでき得るような立ち位置には至っていないと考える。

また、JAPAN TRAIL は、原則として協会加盟のトレイルを通過することにしているが、協会会員が制作委員となり、組織員として構成するには利益相反との指摘もあるので、現状では別のスキームとしたい。

JAPAN TRAIL ルート設定の考え方

JAPAN TRAIL は、何よりも「歩いてみたい」と思えるような魅力的なものでなければならない。自然が豊かで、さまざまな地勢や多様な文化に巡り合え、達成感と満足感に満ち満ちているようなロングトレイルでなければならない。

四季ごとに彩られる多彩な自然と、歴史に育まれた文化が息づく道は魅力的だ。日本の原風景とも言える里山や、海岸沿いの松林も JAPAN TRAIL の候補だろう。

想定されるルートの条件など。

① 総距離　およそ 10,000km
② 地球規模（基準）で考える（国内基準ではなく海外のトレイルも参考にする）
　例えば、 アルプスの縦走路の大半はハイキング・ルート
③ 可能な限り四季を通して歩けるルート
④ 一本道を原則とする（既存のトレイルを選定）
⑤ 自然豊かな地域のルートを設定（ただし、エスケープルートも設定）
⑥ 日本ロングトレイル協会および協力メンバーのトレイルをできる限り通る（佐渡島、淡路島、房総半島などはバリエーション・ルートとして紹介する）
⑦ ロングトレイルの活性化
⑧ 自然愛好家や登山愛好家、ハイカーなどが「歩いてみたい」と思えるようなルート、山域を通過する

⑨ 日本の地勢・歴史・文化などが、より理解できるルート

⑩ インバウンドの新たなフィールド（外国人ハイカーが歩いてみたいと思えるルート）

ほか

※これはイメージで、確定したルートではありません。

安藤百福センターの事業コンセプトとの相関

青少年の自然体験は、歩くことから始まると考える。運動の基本は歩くことであり、歩くことで発見や感動が生まれるきっかけになる。日本列島は亜熱帯から亜寒帯までの気候分布が見られ、生息する動植物は多種多様であり、非常に豊かである。また、四季の変化が明瞭で、古くから歌や俳句などにも詠まれてきた。

安藤百福センターの設立目的は、自然体験活動の普及・振興である。そのためには、まずは人材の養成が重要であるとして、指導者の育成に力を注いできた。この方向性にはいささかの変更もない。ただ、そのアクティビティを世界的なトレンドである「歩く」ことに主眼をおき、指導者が活動するフィールドをトレイル、さらにはロングトレイルにシフトすることになった。

イタリア　ドロミテのトレイル

「歩く」ことは、健康だけでなく、教育的要素が非常に多く存在する。青少年にとって歩くことはあらゆる運動の基本であり、感じ、見て、汗を流し、そして、考えるための時間的空間は、分け隔てなく与えられると信じる。それにはまず、子どもから大人までが、安心して歩くことができるフィールドの整備と道程が重要だと考える。

そのフィールド基盤がロングトレイルであるとし、そのために安藤百福センターは日本ロングトレイル協会と連携・協力しながらその普及活動を行っている。

そして、ロングトレイルが日本列島を縦断する JAPAN TRAIL へとさらに続けば、この国の新たな地理的イメージデザインを形成する助けとなるのでは、と期待する。

JAPAN TRAIL のどの地点に立っても、東北東の方向には北海道へ続き、西、ときには西南西に進路をとれば沖縄へ至る、というイメージが広がるはずである。

トレイルが繋がる、つまり「Connect」できることは、これからの時代に極めて重要な要素であり、そのイメージデザインは、この国の未来にとって大きな意味を持つと考える。

JAPAN TRAIL はエンドレスの作業になるであろう。時代や世代によって、利用の方法やスタイル、またルートも変化するものと思われるが、JAPAN TRAIL は、未来に続く資産として受け継がれるものと信じている。

中村　達（なかむら　とおる）

安藤百福センター センター長、特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会代表理事
一般財団法人全国山の日協議会常務理事ほか。

道を歩く愉しみ、道を探す悦び

節田　重節（日本ロングトレイル協会会長）

近年、自然志向や健康志向の高まりとともに「歩く」楽しみが見直され、ウォーキングが盛んになっている。とりわけロングトレイル・ウォーキングが大きなムーブメントとなっているが、「トレイル」とは「道」である。人々がヒトの行動の原点に立ち還って、道を歩くというプリミティブな行動に、忘れていた喜びを見出したということであろう。
「道」とは「人や家畜、獣、そして車などの往来する場所」であるが、しばしば哲学的に解釈されたり、道理・道徳として説かれたり、スポーツや文化面でも教義的に捉えられることがある。それだけ「道」に対する人々の想いは奥が深く、単に歩くためのフィールドとしてだけでなく、百人百様、様々な感慨をもって記憶されていることだろう。
ここでは、「歩く」という行為における「道」の存在の意味を改めて問い直すため、長年にわたる国内外での自分の経験からエピソードを拾い出し、時系列に沿って、極私的に綴ってみたいと思う。

「道」の奥深さを教えてくれた１枚の画

それは何の衒(てら)いもない、平凡にすら見える一枚の画だった。縦長の画面中央に大きく一本の道を配し、その先は緩く右にカーブしている。道の両サイドと奥は緑の草原で、全体がこの画家の特徴である白っぽい色調でソフト・フォーカスされている。シンプルだけど、実にストレートで力強い画に感動した。
東山魁夷の初期の傑作、「道」（1950〈昭和 25〉年）である。今となってはどの本で見たのか思い出せないが、最初に見たのは多分、新潮選書『風景との対話』（1967 年、新潮社）だったのではないかと思う。

「ひとすじの道が、私の心に在った。夏の早朝の、野の道である。青森県種差(たねさし)海岸の、牧場のスケッチを見ている時、その道が浮かんできたのである。正面の丘に灯台の見える牧場のスケッチ。その柵や、放牧の馬や、灯台をとり去って、道だけを描いてみたら――と思いついた時から、ひとすじの道の姿が心から離れなくなった。」

（東山魁夷画文集『私の風景』〈1999 年、求龍堂〉より）

この作品「道」は、一見するとなんの変哲もない土の道のように見えるが、敗戦後間もない逆境の時代に希望を抱き、未来に向かって一歩を踏み出そうとする、東山自身の意思表示と思われる。そして、見る人によってそれぞれ受ける印象が異なり、一人ひとり様々な感慨を抱くことだろう。その種差海岸が、東日本大震災からの復興を願う「みちのく潮風トレイル」の出発点となっているのは、大変意味深いと感じている。

この画との邂逅以前も、またその後の長い時間も、心の片隅にいつも「道」に対するこだわりがあったように思うが、この出来事こそ、まさに象徴的な出会いであった。

「地図オタク」と「道マニア」

私が生まれたのは、日本海に浮かぶ佐渡島である。海・山・川が適度なスケールで配置され、食糧を完全自給できる日本一大きな島である（沖縄本島を除く）。このように立体的な、恵まれた自然環境に育ったから、子どもたちは遊ぶのが仕事だった。海で泳ぎ、川を遡り、里山に自分たちの道を見付け、自在に歩き回る。さらに私は本と地図が大好きだった。様々な冒険記・探検記を読み、世界地図帳はボロボロになるまで見返されていた。

確か中学 2 年生のときだったと思う。1956（昭和 31）年、日本山岳会の登山隊がネパール・ヒマラヤのマナスル（8163m、当時は 8125m）に初登頂したのだ。そのときの記録映画『マナスルに立つ』が、佐渡の中学校にも巡ってきたのだった。広い体育館に暗幕を張って上映されたその映画は、登山という遊びやヒマラヤを知らない少年に鮮烈なインパクトを与えた。当然、登頂シーンがクライマックスだったと思うのだが、なぜか強く心に残っているのは、豪快なブリ・ガンダキ（ガンダキは河の意）峡谷の岩壁に刻まれた道と、そこを行く長大なキャラバンの隊列だった。その大峡谷の道を、約 20 年後に自分自身の脚で歩くとは、もちろん知る由もなかった。

高校は新潟市内に入った。これまた高校 2 年生のときだったと思うが、『處女峰アンナプルナ』（1953 年、白水社）という 1 冊の山の本と出会ったのだ。市内の老舗書店の確かフ

ランス文学などの棚から、山を知らない高校生の私がどういうきっかけで選び出し、読んでみる気になったのか、自分自身いまだに理由を思い出せないでいる。

1950 年、人類初の 8000m峰登頂をドラマチックに綴ったこの山の名著を、興奮しながら一気に読んだ。そしてそれ以降、私は次々と山の本や雑誌を買い込んでは、受験勉強そっちのけで片っ端から読み漁った。もちろん、その中に月刊誌『山と溪谷』があったが、後年その出版社に入社し、しかもその雑誌の編集長になるとは、これまた想像することすらできなかった。

かくして、1 本の映画と 1 冊の本によって、その後の「私の歩むべき道」が決まった、といっても過言ではない。

道のない山歩き①　南アルプス・赤石沢遡行

山の本を手放せなくなった熱病は重篤になり、大学入学（1961 年）と同時に山岳部入部という形で慢性化していった。個人山行を含めると年間 120 日、つまり年の 3 分の 1 は山漬けの 4 年間を過ごし、四季を通じてオールラウンドな登山をみっちりと仕込まれた。「地図オタク」で「道マニア」だけに、得意だったのは沢登りと道のない山歩きだった。

新入部員のころから、5 万分の 1 地形図（そのころ 2 万 5000 分の 1 地形図は未刊行）さえあれば大体の地形がイメージできたので、ルート・ファインディング（雪に覆われた地形や登山道のない地形で、進むべきルートを見付けること）が得意だったため、「おい節田、この先のルートを探してこい」とよくリーダーから声が掛かったものだった。そんなことから、「ルートの重（私の名前）」というニックネームを付けられたこともあった。

日本の登山には、「沢登り」という独特のジャンルがある。読図や地形判断、岩登り、徒渉（沢を渡る技術）、体力など、総合的なスキルが求められる登山形態だが、それだけに面白さも格別と言える。大学 3 年（1963 年）の夏、南アルプス・赤石岳の南面に位置する赤石沢の遡行に挑戦した。戦前と戦後に各 1 件の記録があるだけの、ほぼ未知に近い険谷である。もちろん登山道は全くない。5 万分の 1 地形図を片手に大井川から聖岳頂上まで、6 日間をかけてじっくり完全遡行できた。「沢登りの楽しさは発見の喜び」と言われるが、次に何が現れてくるか分からない、まさに未知と発見の連続だった。

この山行は、毎日毎日ルートを発見していく喜びとともに、「遡行図」作りもやり甲斐があった。沢登りの記録に欠かせないのが、この遡行図である。左右からどんな沢が合流したか、どこに滝や廊下、瀞（沢いっぱいに水が淀んでいる所）があるか、その落差や大きさは、高巻き（沢から離れ迂回すること）の所要時間は――と歩きながら克明に記録していくのだが、「地図オタク」にとっては、苦しいながらも楽しい時間であった。

その記録を『山と溪谷』（1965 年 9 月号）に発表することができた。中でも遡行図はまるまる 1 ページを使って掲載されたが、長大な沢なので固有名詞が少ないから、所々自分なりに名前を付け、「門ノ滝（仮称）」や「扇ノ淵（仮称）」などと書き込んだ。

ところが後年、ある著名な山岳写真家がこの赤石沢を遡行して、その記録を別の山岳雑

誌に発表したのだ。私が付けた仮の地名も採用して遡行図を作ってくれたのは嬉しいが、10 ヶ所もある「(仮称)」の文字がすべて削られているではないか。かくして私が歩きながら適当に付けた地名が、恥ずかしながら日本を代表する沢に残ってしまったのである。

初めての海外合宿でニュージーランドへ

大学 4 年（1964 年）の秋には、私の人生において特筆すべきイベントがあった。ＯＢ2 人、学生 2 人の小登山隊で、ニュージーランドで海外合宿をしたのである。時代は高度経済成長期。外貨自由化元年で、1 ドル 360 円の固定相場制。持ち出し外貨の制限枠は 500 ドル（18 万円）まで。行きは客船で 24 日、帰りは貨物船で 14 日、ニュージーランド滞在 1 ヶ月半、都合 3 ヶ月近くの大旅行で、出発したのは、まさに東京オリンピックの閉会式の夜だった。

初めての海外旅行だけに見るもの聞くもの全てが刺激的で、これほどいろいろなことを学んだ旅は、最初にして最後だろう。今にして思えば、あらゆる意味で真に贅沢な旅だった。

面白かったのは、南島西海岸のフランツ・ジョセフ氷河を遡ったときのことである。動きの激しい氷河で、ずたずたに切れたクレバス（氷河の割れ目）や林立するセラック（氷塔）を縫ってルートを探す訳だが、地元の登山者が迷っていた。

日本でも道のない山では、地図を片手にヤブをこいだり、残雪を繋いで歩いたり、ときには木に登ったり、いろいろな障害を乗り越え、ルートを探しながら歩くことが多い。そこでトップに立ったのが「ルートの重」こと私だ。相手は変われど障害物を避け、効率的な最短ルートを選んで進むことができた。基本は日本の残雪期の山歩きと一緒だったのである。

それからちょうど 30 年後、今度はトレイルを歩くためにニュージーランドを訪れた。そこで知ったのが「トランピング Tramping」という言葉で、実に新鮮な響きを持って記憶に残った。「トランプ Tramp」とは「どしんどしん歩く、重い足取りで歩く」という意味で、カードのトランプは「Trump」（本来は切り札のこと）と綴る。また、ニュージーランドでは、トランピングのコースのことを「トラック Track」と言う。

2 回目の旅では「世界一美しい散歩道」として知られる「ミルフォード・トラック」や「ルートバーン・トラック」の一部を“つまみ食い”してきたが、その運営システムにも感心させられた。ところで 2011 年には、北島北端のケープ・レインガから南島南端のブラフまで、総延長 3000km に及ぶ「テアラロア」という、国土を縦断するトレイルが開通していると言う。日本も負けていられないではないか。

「東海自然歩道」の誕生――我がロングトレイル事始め

山漬けの大学 4 年間が終わると、1966 年、縁あって出版社に勤めることになった。それも山の本を専門とする山と溪谷社である。最終の役員面接では、「君は明大山岳部出身だか

ら、山の知識は問題ないな。ところで君は、酒は呑めるかね？」と創業社長に聞かれた。「はい、人並みには――」と答えたが（「人並み以上」とは言わなかった）、それで採用である。

最初の 3 年間は『山と溪谷』の兄弟誌で、『ＨＩＫＥＲ』というハイキングと歩く旅をメインテーマとする月刊誌の編集部に配属され、徹底的に雑誌作りを叩き込まれた。編集部在籍中の 1969 年、エポック・メイキングな出来事があった。厚生省国立公園部（当時）が「東海自然歩道」の計画を発表したのである（開通は 1974 年）。米国東部のアパラチアン・トレイルを参考に、国立公園部に在籍されていた大井道夫さんという方が構想された「長距離自然歩道」で、もちろん当時は、「ロングトレイル」という言葉は影も形もなかった。

この構想に「道マニア」である私は飛び付いた。まだ構想段階の予定ルートをスタッフで分担して徹底調査し、自然歩道がどんな環境を通るのかを誌上でレポートしたのである。私の担当は三重、奈良、滋賀の 3 県にまたがる区間だった。鈴鹿峠からスタートし、青山高原―室生山地―長谷寺―山の辺の道―柳生街道―笠置山―鷲峰山（じゅぶせん）と歩き、瀬田唐橋をゴールとした。歴史的な見所も多く、変化に富んだ楽しめる区間だった。中でも「日本最古の道」と言われる「山の辺の道」の沿線には『万葉集』の歌枕がそこここにあり、三輪山を間近に仰ぎ、南に大和三山（天の香具山、耳成山、畝傍山）、西に二上山などを眺めながらのウォーキングは、この区間のハイライトだった。1000 年以上も昔の旅人と同じ道を踏み締め、高校生のころから親しんできた『万葉集』の名歌を思い出しながら歩く時間は、長い旅の疲れを忘れさせてくれたのだった。

この「東海自然歩道」との出会いが、私の心の中に熾火（おきび）のようにいつまでも残っており、約 30 年後の信越トレイルや高島トレイルの誕生とともに再点火したのである。

道のない山歩き②　奥只見から尾瀬へ

その後、高校時代にむさぼり読んでいた『山と溪谷』編集部に異動となったが、あるとき、「道のない山歩き」という特集を組むことになった。編集部員の何人かが自分でコースを選び、それぞれ取材した訳だが、「地図オタク」の私にとっては待望の企画だった。選んだ登山コースは、奥只見湖・銀山平―荒沢岳―灰ノ又山―大水上山―平ヶ岳―大白沢山―景鶴山―尾瀬ヶ原。ほぼ道がないコースだけに、残雪がヤブを覆っている 6 月上旬に出かけた。

荒沢岳までは登山道があるが、それから先はヤブこぎの始まりである。5 万分の 1 地形図を片手に、ときには得意の木登りを交えて地形を読みながら残雪の稜線を進む。道を探しながら歩く楽しみの前には、ヤブこぎも苦にならなかった。しかし、利根川の水源である大水上山から平ヶ岳に至る区間は、残雪が切れ切れのため大変きつかった。日本百名山の平ヶ岳は、名前のとおり巨大な饅頭（まんじゅう）型の山で、残雪でべったりと覆われた山頂にたどり着いたとき、やっとヤブこぎから解放されて、心底ほっとした。

その心の緩みが落とし穴だった。山頂から大白沢山へのルートを探していると、残雪のスロープの先に踏み跡があるではないか。「やれやれ助かった」と、南に進むべきなのに方

位も確認せず、つい無意識のうちに駆け下っていた。ところが、だんだん立派な登山道になってきたではないか。「これはおかしい！」と、やっと気づく。東側の鷹ノ巣登山口への道だったのだ。慌てて再び「道のない」ルートに戻る。
「道のない山歩き」を選んでここへ来たのに、道があることによって「道に迷ってしまった」というお粗末な一幕。その日はひとまず平ヶ岳直下で幕営し、翌日からまた真剣に地図読みをし、尾瀬ヶ原に向かったのであった。

奥岳直下のヤブをこいで大水上山を目指す。左後方は荒沢岳

ネパール初見参とトレッキング

1974 年、30 歳の年、怖いもの知らずの若者が、あろうことか『山と溪谷』誌の編集長になってしまった。しかも 76 年秋、現役の月刊誌編集長でありながら、1 ヶ月半もネパールに出かけたのである。母校のヒマラヤ登山隊の偵察隊長としてヒマルチュリ（7893m）東面を踏査したのだが、そのキャラバン・ルート（ベースキャンプまでの道筋）は、中学 2 年のとき見た映画『マナスルに立つ』とほぼ同じである。

カトマンズから車と徒歩でアルガート・バザールに至り、いよいよブリ・ガンダキのキャラバンをスタートさせた。映画を見て芽生えた少年の夢が、約 20 年ぶりに叶った瞬間だった。大峡谷の右岸を縫うように刻まれた道も、隊員たちが「上高地」と呼んだ河原も、映画のとおりだった。そして、何よりも刺激的だったのは、ルート沿いに暮らす人々の暮らしぶりだった。日本の江戸時代の農村が、こんな感じだったのではないかと想像したが、これがカルチャー・ショックというものだったのだろう。

ネパールでは、日本のようにいわゆる登山道というものはなく、したがって指導標もない。キャラバンで歩くルートは彼らの生活の道であり、幹線ルートはいわば国道である。ヒマラヤ登山のように登頂を主目的とするものではなく、このように山麓の道を繋いで行く徒歩旅行を「トレッキング Trekking」という。主にヒマラヤで使われているが、「トレック Trek」という言葉は、ボーア人（南アフリカのオランダ系白人）の古語で、本来は「牛車（ぎっしゃ）で旅をする」という意味だったのだが、「のろのろ旅をする、骨の折れる旅をする」に変化

したものと言う。転じて現在では「辺境や山岳地帯の徒歩旅行」という使い方が一般的になっている。

ネパール初見参以来、6回トレッキングで訪れている。舞台は同じヒマラヤだが、登山とはまた違った面白さがそこにはある。

「サーブ（旦那さん）、モーニングティー、プリーズ）というシェルパ（主にシェルパ族が生業（なりわい）とする登山＆トレッキング・ガイド）の声で目覚めると、目の前には「神々の御座」ヒマラヤ（サンスクリット語でヒマ・アラヤ〈雪の住処（すみか）〉）が高々とそびえている。通り過ぎる村々の中心には、決まって大きな菩提樹の根元に、きれいな石積みのチョータラ（休み場）が設けられ、そばにはバッティ（茶店）がある。ときにはバッティでチャン（どぶろく）やロキシー（焼酎）を一杯引っ掛けながら、また歩き出す。ドッコ（荷物を運ぶ竹籠）を背負った村人や、歩いて学校に向かう子どもたち、岩塩を運ぶロバのキャラバンが「ガランガラン」と鈴を鳴らしながらすれ違う――。

トレッキングの一日は、こんな感じで過ぎていく。我々旅人にとっては「非日常」だが、雄大な自然の中で、厳しいながらも心豊かに暮らしている彼らの生活の道を歩くことによって、その「日常」を垣間見ることができる。そんな体験や出会いがあることが、トレッキングの魅力と言えるだろう。

冬のネパール・ランタン谷をトレッキング。山はランタン・リルン

フットパスに見る英国の「歩く文化」

英国に「フットパス」という「歩く権利を保証された歩道」があることは、近年、大分知られてきた。この歩く権利のことを「Public Right of Way」と言い、1949年に施行されている。このお陰で、イングランドとウェールズを併せて22.5万km、スコットランドはまだ登録作業中だが、約2万km弱のフットパスが整備されていると言う。英国人にとっては、ウォーキングに出かけることがライフスタイルの一部となっており、ウォーキング・ツーリズムによる経済効果もまた、莫大なものになっている。

これらのフットパスを繋ぎ合わせた長距離トレイルを「レクリエーショナル・トレイル」と呼び、さらにその中の代表的なトレイルをイングランドとウェールズでは「ナショナル・トレイル」と称し、スコットランドでは「スコットランド・グレート・トレイル」と呼称している。いわば「英国のロングトレイル」である。米国のようなワイルドで長大なトレイルは日本には似合わないので、日本にとっては、これら英国のトレイル・システムの方が参考になると思われる。

ロンドン郊外とスコットランドで、少しだけフットパス体験をしたが、「歩く権利」がしっかり根付いていることを実感した。フットパスは国土の至る所で丘を越え、川に沿い、畑や牧場を横切り、ときには人家の裏庭を抜けて続いている。ただし、「ここは私有地です。出るときは必ず掛け金を掛けてね」ときっちり表示してあるあたりが、いかにも英国的だった。

ゴルフ場でもびっくりさせられた。我々はグリーンに向かってプレーしながらコースを縦断していたのだが、中ほどをゴルファーらしくない集団が横切って行くではないか。なんと、ゴルフコースの中をフットパスが横断しているのだった。遊びに懸ける英国人の執念には恐れ入った次第。

ちょっと時間があったら、紅茶とサンドイッチを持って気軽にウォーキングに出かける。そんなことがごく当たり前で、彼らにとっては「ケ（日常）」となっており、その姿勢がなんとも羨ましい限りだ。日本人はどうしても「遊びに出かける」「旅に出かける」となると「ハレ（非日常）」と受け止め、構えることが多いが、ぜひ近いうちに、「歩く文化」がライフスタイルの一部となるよう、その定着を目指したいものである。

なお、英国ではフットパスを歩くことを「ランブリング Rambling」（ぶらぶら歩く、そぞろ歩きする）と言い、歩く人を「ランブラーRambler」と言う。フットパスを管理・運営している団体は、「ランブラーズ協会」である。

簡単な矢印がパブリック・フットパスの方向を示している（エセックス州）

アラスカのウィルダネス――人が歩いても道ができないように

数年前、アラスカのデナリ（マッキンリー）国立公園で遊んだことがある。かねてから熱望していた「キャンプ・デナリ」の予約が取れ、4 泊 5 日滞在することができたのだ。このホテルは、国立公園内を走るたった 1 本の道、パークロードのどん詰まりに位置し、ムース（ヘラジカ）も遊びに来るようなウィルダネス（原生自然）の真っただ中に建つキャビン型の宿泊施設。滞在費は少々値が張るが、毎日ガイド・ウォークがあり、ワイルド・フラワーを見るハイキングやカリブー（トナカイ）などのアニマル・ウォッチングに案内してくれる。

ある日、近くのワンダー・レイクという氷河湖へ案内してくれた。スウェン・ヘディンの「さまよえる湖」ロプノールを想起させる、この神秘的な湖のそばに、素晴らしい「逆さデナリ」が映る池があると女性ガイドが言う。車道からブッシュに入り、広大な湿原に足を踏み入れて、その「リフレクション・ポンド（反射する池）」を目指す。厚い緑のカーペットのような湿原を傷めないようにと、日本人の団体はつい一列になってしまう。ところが、「1 列にならないで！　全員バラバラに歩いて、前の人の足跡は踏まないで！」とガイドが叫ぶ。

同じ足跡を複数の人がなぞると踏圧で湿原が傷み、小径ができ上がってしまうからだ。1 人ぐらいなら元に戻ると言うのである。なるほど、これがアラスカのウィルダネスの復元力か。「人が歩けば道ができる」と、つい肯定的に考えがちだが、原生自然を守るためには、道そのものを残してはいけないという考え方もあるのだ。池に倒影するデナリ（ネイティブ・アメリカンの言葉で「偉大なるもの」の意）の雄姿とともに、我々は大切なものを学んだのであった。

リフレクション・ポンドに倒影するデナリ（アラスカ・デナリ国立公園）

再認識したい「歩く」ことの大切さ

ここ 20 年ほど、一部の日本人の旅のスタイルが変わってきたように思う。相変わらず観光地てんこ盛りのパック旅行が中心だが、これらの旅は名所旧跡を「点」として捉え、移

動手段はすべて効率重視で、ひたすら「点」の数をアピールしている。これでは旅という移動の中で「線」や「面」を楽しむ要素もゆとりもないではないか。旅とは「点と線と面」を総合的に楽しんでこそ旅である。ところが、このような状況に飽き足らない、一部の心ある人々が体験型や滞在型の旅にシフトし、「歩く」要素などを取り入れ、少しずつ旅の目的や個性がはっきりしてきたように見受けられる。

「歩く旅」では、時間がゆっくり流れている。「点」は点でじっくり味わい、歩きながら「線」そのものも楽しむ。そして、点や線の周辺や背景も「面」として捉え、それらを総合して自分なりに感動を得ることが「旅」の醍醐味ではないか、と私は考えている。例えば、私の大好きな「山の辺の道」などは、その好例であり、身びいきながら、ロングトレイル・ウォークにこそ、それがあると思う。

よく新幹線に乗るが、ＪＲ東日本の車内誌『トランヴェール』を読むのが楽しみだ。中でも『深夜特急』3 部作以来のファンである作家・沢木耕太郎さんの巻頭エッセイ「旅のつばくろ（ツバメの異称）」を真っ先に読むのだが、2017 年 12 月号のタイトルは「点と線と面」とあるではないか。正直びっくりした。まさに我が意を得たり、である。

沢木さんは「人生のうちで、面として知っている土地をいくつくらい持っているか。それは人生の豊かさということに直結しているような気がする。」と書いている。さて、私たちは「面」として知っている土地を、どれだけ持っているだろうか。

古来、「人生は旅である」とよく言われる。西行法師や松尾芭蕉、菅江真澄、松浦武四郎、若山牧水、そしてイザベラ・バード――。彼らは皆「日々旅にして旅を栖（すみか）とす」。旅には発見があり、感動があり、学びがある。それも「歩く旅」がふさわしい。かくして、人々は「自分自身の道」を求めて、ひたすら旅を続けているのであろう。

「道」というテーマを中心に、自分が歩いてきた道程を点綴してきたが、佐渡島での自然体験が登山に繋がり、歩くという行動の積み重ねからロングトレイルに行き着いた。いろいろ寄り道、回り道もしてきたが、大きく捉えると「一本の道」であり、まさに「私のロングトレイル」と言えるだろう。

「道」に心から感謝である。

節田 重節（せつだ じゅうせつ）

明治大学法学部卒、同大学山岳部ＯＢ、公益社団法人日本山岳会元副会長、株式会社山と溪谷社元取締役編集本部長、公益財団法人植村記念財団、特定非営利活動法人浅間山麓国際自然学校理事など

ヒマラヤ・トレッキングの楽しさとロングトレイル

神長 幹雄（山と溪谷社編集者）

長い時間をかけて長距離を歩いて移動するロングトレイルが、話題を呼んでいる。ここ数年のうちに、八幡平など、全国各地に新しく創設されるトレイルがいくつもあるという。

世界的に著名なロングトレイルを概観しただけでも、アメリカのアパラチアン・トレイルやジョン・ミューア・トレイル、イギリスのフットパス、スペインの巡礼の道、アルプスのツール・ド・モンブランやニュージーランドのミルフォード・トラックなど、挙げていけばキリがないほどだ。歴史の古いものや由緒あるもの、景観の素晴らしいものなど多彩である。もちろん日本にも「四国八十八ヶ所」や熊野古道など、古典的なロングトレイルがある。

こうしたロングトレイルに共通した文化的背景には「もてなしの心」があると思う。サービスを提供する側と受ける側とでは、様相は少し異なるかもしれないが、双方に心を込めた交流をしたいという思いがあるからだろう。ロングトレイルを歩き通した人には、ひとつの目的をやりとげたという達成感が生まれるだろうし、サービスを提供した人には、喜んでもらえたという二次的な満足感が得られるはずである。そして、そこに人と人との交流が、重要な要素として潜在しているはずである。

やや乱暴な言い方になってしまうが、それぞれのロングトレイルには、歴史の深浅によってトレイル・ウォーカーの感じ方も変わってくると思われる。歴史が古ければ古いほど、やはり「もてなしの心」は洗練されたものになるだろうし、逆に歴史が浅いと、それだけ発展途上にあるということで、今後に期する部分があるかもしれない。

いずれにしても、ロングトレイルには各国独自の歴史があり、変遷し、深められてきたはずである。それが総じて「歩く文化」ということであり、今後も大きな期待を寄せられる所以ではないだろうか。

昨年の 10 月、私は本当に久しぶりにヒマラヤ山麓のトレッキングを楽しんできた。

ヒマラヤ・トレッキングもまた、世界的に著名なロングトレイルのひとつであろう。そのネパール・ヒマラヤへ、中央部のマナスル山群のベースキャンプを訪ねるトレッキングを企画した。10 日間ほどの短い期間ではあったが、久しぶりに山麓を歩けた喜びは大きかった。

ネパール・ヒマラヤには、世界の最高峰エベレスト（8848m）をはじめ 8000m 以上の高峰が 8 座あり、東西約 800km、南北 150～200km の規模で、東のカンチェンジュンガ山群から西ネパールまで 9 つの山群に分かれて屹立している。そのネパール・ヒマラヤへの登山は、戦前の 1920 年代ごろから試みられ、ネパールが開国した 1950 年、アンナプルナが

登られたことで「初登頂時代」の幕が開かれた。とはいえ、ネパールやチベット住民による日常の交易は、かなり古くから続けられていたと思われる。

それでも、欧米のトレッカーによるネパール・トレッキングが脚光を浴びだしたのは、そう古い時代ではなく、1960 年代に入ってからのことであろう。

私自身は、1980 年にランタン谷へ、86 年には「エベレスト街道」のベースキャンプまでトレッキングした経験がある。以来 30 年ぶりのネパール・トレッキングということになる。

マナスルといえば、1956 年、日本山岳会隊によって初登頂された「日本人ゆかりの山」である。また、1954 年の第 2 次隊では、宗教上の理由から入山を拒否されたこともある。登山隊の拠点となったサマという集落に興味があったし、現在、公募登山隊でエベレストとともに人気を二分している感のあるマナスルのベースキャンプにも関心があった。

できればゆっくり回りたかったが、仕事の関係もあって、片道はヘリコプターを使い、5 日間ほどサマに滞在、帰路を自動車が走るソティ・コーラまで、5 泊 6 日のスケジュールを組んだ。

サマは予想していたとおり、のどかで、静かで、平和な村だった。街道沿いにロッジが十数軒建ち並び、トレッカーや登山隊を迎え入れていた。最奥にはサマ・ゴンパという立派な寺院が建ち、村人は働き者で、暗いうちからジャガイモやトウモロコシの畑に出て農作業に励んでいた。第 2 次隊とのトラブルはすでに 60 年以上も前のことで、誰に聞いても分からなかった。

翌朝、私たちはサマから下流へ 30 分ほど下り、右手の道に入って、プンギェン・ゴンパを目指すことにした。村の小学校の先生でもあるチベット人に案内してもらう。急な細い道が続くが、ルートはしっかりしている。登り切ると、やがて広々とした草原が現われた。そこにはいくつかのカルカ（夏小屋）が点在する。しかも正面にはマナスルの鋭峰が、左手にはピーク 29 が、氷河を戴いて屹立している。素晴らしい景観が目の前に広がっていた。「カラン、カラン」ヤクのカウベルがこれほど気持ちを豊かにしてくれるとは思わなかった。別天地のような草原の広がりに、乾いた風が実に気持ちいい。

2 時間ほどかけて登ってきた草原の最奥に、プンギェン・ゴンパは岩に張り付くように建っていた。700 年前の建立だという。せっかく訪ねてきたのだが、あいにく僧侶は留守で、ゴンパの周辺は閑散としていた。

「あと 10 分だけ登ってみましょう。『仏の石』があるんです」

チベット人に誘われて、もう少し登ってみることにした。まず現われたのが「タテ・デヴィ」という女の神様。周辺には 108 ヶ所の祈祷の場所があり、その鍵が「タテ・デヴィ」にあると伝えられている。「グルサン・プチェ」が男の神様で、直径 30cm ほどの石は水が涸れることがないという。そして、その少し上部に、いくつもの石が円形に取り囲んでいる「パルドラ」という神がいて、あたりを霊がさまよっているというのだ。

多くの霊がさまよっているというが、カルカの点在する明るい草原といい、蒼い空に映

えるマナスルの尖峰といい、ヤクの鳴き声とカウベルといい、すべてがのどかで、安らぎを与えてくれる所だった。信心深いチベット人の話とともに、時空を超えたようなひとときだった。

その 2 日後、サマの集落からお花畑で有名なケルモ・カルカを抜けて、ベースキャンプを目指すことにした。

1 日歩き通せるだろうか、高度に対しての順応はできているだろうか。サマの集落は標高 3520m、ベースキャンプは 4400m、標高差は 800m 以上になる。体力と高度への不安はあるものの、やはりベースキャンプまでは行ってみよう。

サマの集落からブリ・ガンダキ沿いに、上流のサムドを目指して出発した。河原を歩き、サムドへの分岐点を左手に入っていく。まるで北八ヶ岳の森の中を歩いているような緩やかな登りが続くと、やがて広々とした草原に出た。朽ち果て、壊れかけたカルカがいくつもある。ケルモ・カルカだ。ちょうどベースキャンプから荷下げするのだろう、馬使いが数頭のウマを放して牧草を食わせていた。

「このあたりは、カルカとしての役割を終えているんです。だから荒れているんでしょう」

ガイドが説明してくれた。花が咲き乱れていないのは仕方ないにしても、小屋の手入れもされず、荒れるに任せて放置されていたのは、やはり淋しい思いがする。しかし、気を取り直して考えてみれば、今は雑草ばかりの草原かもしれないが、花の盛りを想像してみると、誰もが賛美するような別天地に違いない。ぽっかりと開けた草原は空が大きく、この地の素晴らしさを物語っていた。

ケルモ・カルカからは高度を一気に上げていく。左手のエメラルド色の美しい氷河湖がだんだん下に見えるようになると、ベースキャンプから大きな荷を背負った大勢のポーターが荷下げに下りてきた。男も女も 30～40kg の荷物を背負っている。すべて各国から来た公募登山隊の隊荷である。登頂シーズンも終わり、隊員は先に下り、荷物だけが地元のポーターたちに担ぎ下ろされてくる。中にはレンジのような大きな電化製品を背負うポーターもいた。すべてにシステム化された公募登山隊に、手作りのヒマラヤ登山の良さは期待できない。

左手、氷河をトラバースするようにして登り切ると、やっとベースキャンプだった。4 時間半もあれば着くと思っていたが、6 時間もかかってしまった。氷河の風は冷たく、ガスが出てあまり視界がない。それでも到着したベースキャンプは、巨大な円形劇場を思わせる壮大な広がりがあった。北アルプスの涸沢を何倍も大きくしたような巨大な円形劇場。そこで音楽が奏でられるとしたら、どれほど深い音色になるのだろうか。

韓国隊のキッチンテントに寄せてもらう。砂糖入りのコーヒーがなによりもおいしい。きっと高度の影響で少し脱水症状を起こしているのだろう。2 杯お代わりして、ベースキャンプを後にした。大きな登山隊が 10 ヶ所はテントを張れるような、大きなベースキャンプだった。いくつか回って、その大きさを実感したかったが、疲れと喉の渇きがそれを許してくれなかった。

翌日はいよいよサマに別れを告げて、5 泊 6 日、ソティ・コーラへ向けてトレッキングが始まる。早朝 4 時半、未明から何度も目が覚めてしまうが、ロッジの部屋から上空を仰ぎ見ると、なんと満天の星が輝いているではないか。北斗七星がひときわ鮮やかに光を放っている。こんな星空を見るのは何年ぶりだろう。すぐにカメラとヘッドランプ、防寒具をザックに入れて、マナスルの展望台と言われる地点を目指すことにした。

マナスルの一角がスポットライトを浴びたように光り始める。ほんの 1 点が鮮やかに金色に染まり始めると、やがてゆっくりと周囲の色が変わっていった。赤く光り出し、黄色へと色が変わる。まるで荘厳な「太陽の儀式」のようだ。雲ひとつない上空にマナスルが一段と鮮やかな輝きを放っていた。

やはり来て良かった。それから毎日 6 時間から 7 時間、村から村へ訪ね歩く 6 日間は、村人との交流や景観の変化に心躍らせられるトレッキングの楽しさを、十分味わうことができた。

ヒマラヤ・トレッキングの楽しさはどこにあるのだろうか。以下に 5 点ほど、その楽しみを考えてみた。

１.「歩く楽しみ」体を動かして汗をかく爽快感がある。

２.「訪ねる楽しみ」住民との交流、異文化を体験できる。

３.「見る楽しみ」氷河を戴いたヒマラヤの高峰、その神秘性に接することができる。

４.「食べる楽しみ」食文化の違いを体験できる。

５.「泊まる楽しみ」インフラが整備され、清潔なトイレ、ロッジが増えて、体を休めることができる。

かつて、ヒマラヤのトレッキングといえば、ガイドやポーターに引き連れられた集団旅行が主流のようだったが、最近は個人や 2～3 人連れのトレッカーが増えてきた。それでも 30 年前のトレッキングと比べてみても、形態はそれほど変化していないようだ。人気のエベレスト街道の変貌ぶりは激しいというが、マナスル山群ではほとんど変わっていないと思われる。ロングトレイルとしてのヒマラヤ・トレッキングの魅力は、なんといってもロッジやバッティ（茶屋）が適度な距離間隔で存在していることと、ホスピタリティに富んだ「もてなしの心」で出迎えてくれる点にある。変わったことといえば、だれもが携帯電話でやりとりしていることと、ロッジやトイレが格段に清潔になったことだろう。

ただしトレッカーは、寺院やチョルテン（仏塔）など宗教上のしきたりや、高所に対する知識、高山病へのリスクマネジメントだけはしっかり配慮しておく必要があるだろう。

以下の原稿は、今から 30 年前、エベレスト街道をベースキャンプまで歩いたときの記述である。ほとんど何も変わっていないことに驚かされた。それが時空を超えた、それがヒマラヤ・トレッキングの魅力かもしれない。

「ふと、歩くこと自体を楽しんでいる自分に気がついた。逆に、しばらくこんなに楽しみながら歩いたことがなかったことに愕然とした。一体いつから、私たちは歩く楽しみを放

棄してしまったのだろう。今は、一歩一歩を、ゾクゾクするほど楽しんで歩いているというのに……」

「『ナマスティ』すれ違いざま、挨拶をかわす。やさしそうな目が笑いかけてくる。立ち止まって話をする村人たち。いわゆる口コミ、その情報交換の正確さ、速さは驚くばかりだった。人間の歩く速さが、本来、人間の生活のリズムと合致しているに違いない。そんなあたりまえのことが、楽しみながら歩いてみて初めて気がついた」

「彼らが自然と一体となれるのも、おそらくはその貧困に起因していることにも気がついていた。だからこそ、彼らは自然に畏怖をいだき、自然とともに生きる道を模索する。自然には謙虚にならざるを得ないのである」

（引用はすべて『山と溪谷』1987 年 3 月号より）

神長 幹雄 （かみなが みきお）

株式会社山と溪谷社編集者。公益社団法人日本山岳会常務理事、「梅棹忠夫・山と探検文学賞」委員。近著に『未完の巡礼』がある。

ハイカーから見たロングトレイル

根津 貴央（ライター）

ロングトレイルとは一体なんなのか。定義のないこの言葉を、明確に分かりやすく説明できる人は、ほぼいないだろう。「長距離自然歩道」と訳されることが多いが、それがどういう道のことを指すのかはイメージしにくい。

そこで私は、上記タイトルの話をする前に、国内外のロングトレイルを歩いてきた一人のハイカーとして、大枠のイメージだけ明記しておきたい。

ロングトレイルとは、頂上に向かって垂直方向に延びる登山道とは異なり、水平方向に長く続く山道（未舗装路）である。

登山と対比させるのが一番分かりやすいため、以降、何かと登山を引き合いに出すが、それは優劣だとか良し悪しだとかの比較ではない。私自身、登山も好きだし、日本の登山文化に敬意を払っている。そこだけは誤解をしないでほしい。

そもそも、ロングトレイルは道である。現状、その道自体にとかくフォーカスが当てられているが、そこには少し疑問がある。なぜなら、大事なのは“道”以上にそこを歩く“行為”だからだ。登山を考えてみてほしい。皆どうして山に登るのか。その理由は人それぞれだが、共通しているのは登山（という行為）が好きだからだろう。登山道が好きだから、なんていう人はほとんどいないはずだ。

ロングトレイルも同じだと私は思う。ロングトレイルが好きだから歩くのではない。そこを歩く行為が好きだから、であるはずだ。だから、ロングトレイル以上に、そこを歩く行為について論ずることの方が重要であると思っている。では「ロングトレイルを歩くこと」とはどういうことなのか。その魅力や楽しさを知っている人が、どれだけ日本にいるのか。ここが今、日本のロングトレイル界が抱えている大きな課題だと私は思っている。

登山道は、そこを歩けば少なからず登山（という行為）の魅力を理解することができる。例えば、東京にある高尾山に登って、登山って意外と楽しいものだな、と思う人は多いはずだ。しかし、ロングトレイルは、そこを歩いただけではロングハイキング（今回、便宜的に、ロングトレイルを歩く行為をロングハイキングと呼ぶことにする）の魅力は理解できない。「自然の中を歩く気持ち良さがあるじゃないか」と言う人もいるだろう。でも、それは登山でも充分味わえる。だったら、わざわざロングトレイルと銘打たなくても、既存の登山道を活用して、インバウンドも含めた施策を行った方がさまざまな面において得策であるはずだ。

ロングトレイルとは一体なんなのか。どんな魅力や楽しさがあるのか。そして、それは日本にとって必要なことなのか。そんな話を、私自身の実体験をベースに、ハイカー側の

視点から語ってみたいと思う。

私がロングハイキングの虜になった理由

そもそも私がなぜロングトレイルを歩くようになったのか。きっかけは、アメリカ合衆国の三大トレイルのひとつ「パシフィック・クレスト・トレイル（PCT)」だった。これはアメリカの西海岸、メキシコ国境〜カナダ国境まで続くトレイルで、総延長は 4,265km。踏破には 4〜6 ヶ月ほどの期間を要する、長大なロングトレイルである。

私は 2012 年に 5 ヶ月間歩き続けたのだが、なぜ行こうと思ったのかというと、ロングハイキングという行為に惹かれたからである。私は元々会社員時代に登山を始め、週末登山を楽しんでいた。ただ、当時仕事が激務だったこともあってか、登山をしながら、ふとこう考えるようになった。平日、朝から晩まで仕事を頑張っているのに、土日のプライベートまで頑張って何かをするのは不自然だな……。間違いなく登山は楽しい。でも、急登はキツイし、登頂するにあたっては、それなりの努力が必要になる。そこに違和感を抱き始めたのだ。登頂した際に目にする絶景や、味わう達成感は素晴らしいが、「何かのために」ではなく、ただ単純に「好きだからやる」ことを増やしたい。その方が人間らしいんじゃないか、と当時の私は思ったのだ。

そんな私に、ロングハイキングは打ってつけだった。目的もなくだらだら歩く感じ。当てもなく彷徨う感じ。好きなだけ歩き、好きなだけ休み、適当な所でキャンプしながら、自分のペースで旅をする感じ。「これだ！」と思った。

実際の PCT は、想像をはるかに超えるほど楽しいものだった。最初は自然の中での非日

常感が新鮮だったが、日を追うごとにそれは日常化してくる。つまり、町での生活が日常で、山での生活が非日常という立場が、ある瞬間を境に逆転するのだ。その感覚が心地良かった。

また、アメリカならではの大自然も素晴らしかったが、多くのハイカーと仲良くなり、一緒に歩いたり、焚き火を囲んだり、飲み明かしたりするのも忘れられない思い出だ。4〜6 日おきくらいに補給のために立ち寄る町では、アメリカ文化を体感したし、トレイル・エンジェル（ハイカーをサポートするボランティア）の家にもたびたびお世話になった。当初は孤独な一人旅、自分だけが頼りのサバイバル、といった印象も少なからずあったが、全くもってそんなことはなかった。ロングハイキングは、出逢いに満ちた旅だったのだ。

以来、私はさまざまなトレイルでロングハイキングを実践するようになった。2014 年からはネパールの「グレート・ヒマラヤ・トレイル（GHT)」を踏査するプロジェクトに参画し、毎年ヒマラヤを歩いている。ただ、GHT はヒマラヤ山脈を貫いてはいるものの、どこのピークも踏むことはない。このトレイルは、新たに道を整備したわけでもなく、主に地元の生活道を繋げて、それを勝手に（と言っては失礼だが）GHT と命名しただけである。だからこそ、必然的に村落を繋ぎながらの旅になり、登山とは異なる魅力を有している。

日本でロングトレイルを楽しむために

ロングトレイルを歩くこと（ロングハイキング）に目覚めたきっかけは、海外のトレイルだったが、私はこれを日本で実践したいと強く思うようになった。私は日本人で、日本が好きで、1 年の大半を日本で暮らしているのだから、そう思うのは当然のことだろう。

そして、国内でロングハイキングをするようになり、ライターとして、このアクティビティの魅力を多くの人に知ってもらうべく、さまざまな活動を行うようになった。そこで痛感したことが、冒頭にも記した登山とは圧倒的に異なる点、「ロングトレイルは、そこを歩いただけではロングハイキングの魅力を理解できない」ことである。

海外のトレイルを歩くがごとく、数週間や数ヶ月にわたって歩けば、前述の魅力はおのずと実感できる。しかし、ここ日本において、私も含めて長期の休みはなかなか取ることができない。土日あるいは 3 連休といった数日レベルで、いかにロングハイキングを楽しむか。そこを解決しないことには、日本でロングハイキングは普及しないだろう。

一般論として、土日の 2 日間であれば、ロングトレイルを歩くよりも登山に行った方が楽しい、と思う人が多いはずだ。なぜなら、ロングトレイルは基本的に里山にあるため樹林帯が多く、眺望はあまり良くない。一方、登山の場合は、高尾山ですら頂上に行けば絶景が楽しめる。しかも登頂したという達成感まで味わうことができる。

では、なぜ私が日本でもロングハイキングを楽しめているかといえば、ロングハイキングの楽しみ方を知っているからだ。単に山歩きだけを楽しむのではなく、人の出会いやその土地ならではの食や文化に触れること。そこが重要なのだ。だから、プランニングの段階で、道中にある集落に立ち寄ることを必ず行程に組み込んでいる。テント泊にもこだわらず、民宿なども積極的に活用している。特に日本は国土が狭いこともあって、とにかく町と山が近い。とある集落を出発しても、峠を越えればすぐまた別の集落にたどり着ける。そんなエリアが全国津々浦々にたくさんある。この地の利を活かした楽しみ方こそ、日本ならではのロングハイキングではないだろうか、と私は思うのだ。

現在の日本のロングトレイル界は、釣りに例えると、釣具はたくさん開発されて普及したが、釣りの楽しみ方、遊び方を知っている人が少ない、そんな状況だ。今後は、より楽しみ方、遊び方を広めていくことが大事だと思う。

海外にはない、日本ならではのロングトレイルを

自然だけではなく歴史や文化も楽しむ……といった話をすると、街道歩きを想起する人もいるだろう。でも、現在の街道はそのほとんどが舗装路になっている。インバウンドだけ考えれば非常に魅力的だろうし、歴史好きやウォーキング好きの人にはかなり好まれるはずだ。でも、それはロングハイキングのフィールドとしては物足りない。私はできることなら山道を歩きたい。そこがロングハイキングの楽しみでもあるし、山の道だからこそロングトレイルである、とも思っている。

もちろんこれは、あくまで私個人の見解でしかない。ただ、曖昧なロングトレイルの定義、枠組みを、きちんと議論することは必要だと思う。日本にはさまざまな魅力的な道がある。私はそれをロングトレイルとひとくくりにしてしまうよりは、日本独自のものとして個別にアピールすべきだと思っている。例えば、お遍路もそうだし、街道もそうだし、縦走路もそう。さらに日本には素晴らしい登山道が山ほどある。いずれも日本らしさが際

立っているのだから、安易にロングトレイルという言葉に置き換えることなく、自信と誇りを持って、そのまま発信してはどうだろうか。

最後に、ある言葉を紹介したい。

「自然は寂しい。しかし人の手が加わるとあたたかくなる。そのあたたかなものを求めて歩いてみよう」

これは、私が尊敬してやまない民俗学者の宮本常一先生が語った言葉である。

ここに、日本におけるロングハイキングの方向性が現れている気がする。人里離れた大自然やウィルダネスを味わうのは、登山など別のアクティビティに任せたらいい。人里を、里山を、いかに味わい楽しむか。そこを考えずして、日本のロングトレイルに未来はない。

根津　貴央（ねず　たかひさ）
大学卒業後、広告会社でコピーライター職に従事。2012 年にライターとして独立し、アメリカのロングトレイル「パシフィック・クレスト・トレイル（PCT/総延長 4,265km）」をスルーハイクすべく渡米。2014 年からは、ネパールのロングトレイル「グレート・ヒマラヤ・トレイル（GHT/アッパールートの総延長 1,700km）の踏査プロジェクトに参画。以来、毎年ヒマラヤに足を運ぶ。2018 年 4 月、ライター&エディターとして TRAILS に正式加入。

第 5 回ロングトレイルシンポジウム
ロングトレイルとインバウンド

【日　　時】2018 年 2 月 24 日（土）13:30～17:30
【会　　場】安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター（略称：安藤百福センター）
【主　　催】特定非営利活動法人 日本ロングトレイル協会
【共　　催】公益財団法人 安藤スポーツ･食文化振興財団（略称：安藤財団）
　　安藤百福センター
【後　　援】環境省、観光庁、長野県、長野県教育委員会、小諸市、小諸市教育委員会
　　一般財団法人 全国山の日協議会
【特別協賛】ミズノ株式会社

ご挨拶　安藤　宏基

（公益財団法人 安藤スポーツ･食文化振興財団理事長、日清食品ホールディングス株式会社 代表取締役社長･CEO、特定非営利活動法人 日本ロングトレイル協会名誉会長）

安藤スポーツ･食文化振興財団理事長の安藤宏基です。この日本ロングトレイル協会の名誉会長として名前を連ねさせていただいております。

果たして私どもの財団が、どれだけこのロングトレイルに協力できるかということでございますけれども、このような建物があって、皆さん方がお集まりいただけるということを含めまして、お手伝いできるのではないかと思っております。このシンポジウムも今回で 5 回目ということで、今日のテーマはインバウンドとの関連の問題であります。ロングトレイルそのものも、今日は 19 団体の方々にお集まりいただいているということですが、のちほどお話の出る日本縦断型の「JAPAN TRAIL」の重要な部分を占めている方々から、このシンポジウムの中で多くのご賛同を得まして、この会が価値あるものになりますことを願っております。

申し訳ございませんが、少し安藤スポーツ･食文化振興財団につきましてご説明させていただきます。日清食品の創業者の安藤百福がチキンラーメンを発明いたしまして、ちょうど今年で 60 年になりますけれども、今から 35 年前、1983 年にこの財団を創りました。日清食品の株式 790 万株と私財を出しまして、この財団を設立したものです。

この運営につきましては、日清食品からの配当で財団活動を行っております。そういう中でこのロングトレイルにつきましても、自然体験活動の中での重要な部分として協力さ

せていただくこととして、現在に至っております。

財団の事業につきましては、パンフレットを見ていただければお分かりのことと思いますけれども、4つの活事業を行っております。1つは小学生の陸上競技活動を支援しております。交流大会ですけれども、これをスポンサードしており、クロスカントリー競技も行っております。それから自然体験活動ですけれども、「トム・ソーヤースクール企画コンテスト」というのもありますし、ロングトレイルの普及支援もこの中に入っております。そして、食文化活動につきましては、食を創造する会ということで、「食創会」という表彰事業も行っております。

いろいろと行っておりまして、右端の下の方は発明記念館活動で、創業者の思いを子どもたちに伝える発明記念館の活動ということです。小学生のころからベンチャー・スピリットを、ということで、このような手作りコーナーや、こういう小さなヒントからベンチャーというものは始まるんだ、ということを教えている事業でして、チキンラーメンやカップヌードルの手づくり体験も含めて行っております。

今日は大変盛りだくさんなスケジュールで、講演会も計画されております。ワールド・トレイルズ・ネットワークからガレオ・セインツさんにお越しいただきまして、世界のロングトレイルのお話を聞かせていただけるということでございます。また、水野正人会長からはオリンピック・レガシーについてのお話を、そして、観光庁の斉藤室長からはインバウンドの施策についてのお話もお聞かせいただけるとのことです。さらに、パネルディスカッションでは近藤謙司さんや高野賢一さんからもお話を聞かせていただけるということで、大変バラエティに富んだプログラムだと思っております。

そうした中で、ロングトレイルに関して財団に何ができるかということで検討してきておりますけれども、まずはホームページについてこれをリニューアルし、全部この中で行えるようにやってまいりました。

また、事務局をこの場所に置くことにより、全国の皆さん方の情報をこの中で集積しまして、さらに発信させていただくという、受発信基地になるということでやっております。そのほか商標登録につきましても、日清食品ホールディングス名でこの「ロングトレイル」の商標を登録させていただきました。ただし、日清食品だけが使うわけではなくて、この「ロングトレイル」という商標が悪用されないように、正しく使ってもらうためのコントロール・ボードとして、このような形を取っております。ですから、使いたい方については、どんどんお使いいただきたいということで進めております。また、トレイル協会のロゴマークにつきましても、デザインさせていただいた次第でございます。

それからスマホのアプリ関係についてですが、これは全部完成いたしますと、今まで地図で見ていたところを、もうこれからはスマホで見るという、こういう時代になろうかと思います。そういう中で、衛星関係は米国のGPSが有名ですけれども、日本の「みちびき」というのが今年で4基態勢になりまして、また2023年には7基態勢になるということで、GPSの誤差も少なくなり、大変精度の高いものになってくるということです。

Wi-Fi 関係のこともありますけれども、こういう中で、このコンテンツを作るのに財団の方でこつこつとサポートさせていただいております。また、Compass というシステムの中で、「トレイル巡り」を今、実施しております。19 団体のうちまだ 9 団体の方しか運用されておりませんし、運用はまだ部分的ではございますけれども、そういう支援活動を実施に移しているところでございます。

今日のテーマのインバウンドですけれども、まずはこのロングトレイルを「JAPAN TRAIL」あるいは「日本トレイル」として繋ぐ、このプロジェクトをどんどん進めていっていただきたいと思っております。ロングトレイル協会会長の節田さん、そして代表理事の中村さんに、この方向性をこれからもっと具体的に進めていただこうということで、期待しておるところでございます。

これは日本列島を北海道から沖縄まで、一気通貫で歩ける一本道を造りたいというお考えだそうです。大変いいんですけれども、その一本道から現在加盟の 19 団体の方が外れると、ちょっとまずいなと思うんです。これは早い者勝ちだというわけではありませんけれども、そのあたりを上手に調整していただいて、素晴らしい一本道ができることを期待しております。

これを 2020 年の春までになんとか発表できないか、というお話を文科省の方からいただいておりまして、それに向かってこれから仕上げていくということではなかろうかと思っております。全長で 1 万～1 万 5,000km になるだろうとのことですが、このようなロングトレイルの完成により、「歩く文化」が一層高まっていくものと思います。

ロングトレイルの意義ですけれども、自然や文化、そして歴史を楽しみながら山や街道など長い距離を歩く旅ということで、近年、大変人気が出てきているものです。人と自然と文化と、そして郷土ですね、こういうところのふれあいは大変重要なことでして、そのような活動において日本を再発見するというのは、日本人にとってもいいことでしょうし、また、インバウンドの方々に来ていただいて、これを利用していただくということも、日本の活性化には大変役立つと思っております。

そういう中で私たちは、元々「食育」の方を考えておりました。「食を通して、子どもたちを育成する」という意味ですけれども、これからは「歩くことを通して、子どもたちを育成する」ということで、保育園じゃないんですけれども、「歩育」ということも大変重要なことだと考えております。このロングトレイルが、まさしくそのものであろうかと思っておりまして、推進していきたいと願っております。

現実的には、今日ご参加の方々にとって、ロングトレイルの設計から管理、そして、最終的にこれをどう仕上げていくかということで、大変ご苦労が多いかと思います。けれども、のちほど代表理事の中村達さんから詳しくお話があろうかと思いますし、節田会長にもお願い申し上げておりますが、将来的には日本列島を縦貫する一本道として「JAPAN TRAIL」を造ろうという構想がありますので、これが完成しまして、そしてインバウンドに役立つということになれば、大変素晴らしいと思っております。

これをもって冒頭の挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。

特別講演①
“Why Long Distance Trails are Important to the World”

ガレオ・セインツ（Galeo Saintz : ワールド・トレイルズ・ネットワーク会長）

皆さま、こんにちは。本日、ここにお呼びいただいて大変光栄に思っております。今、皆さまのご覧いただいている写真は、世界で最も先駆的なトレイル開拓者と私は思います。つまり象ですね。象は道を造るものとして知られています。ほかの動物たちも入ることができるように森の木々を倒して、生い茂った森を切り開いていくわけです。彼らはアフリカ大陸の至る所で、大規模な街道を造ったり、それからアジアでも長い道を造ってきました。

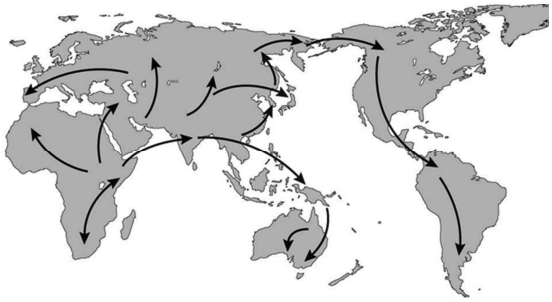
人類という種もまた、トレイルで育ったということが言えるかもしれません。野生動物が踏みならした小道を追っていき、狩りをして野生動物を食料としてきました。人類は今、足を置いている小道はどの動物が使っているのかを素早く理解することが必要で、これが私たちの生存を左右していたわけです。トレイルが私たちの生存を左右するということは、もしかすると今日でも変わっていないかもしれません。

写真をご覧になってお分かりいただけると思うんですけれども、動物が造った小道をたどっていくと、水源にたどり着くということがご理解いただけると思います。そのように短い歩く道も、私たちを素敵な所に導いていってくれると思います。

私が先ほどお話しましたように、過去において人類の生存がトレイルに依拠していたということは、これからの未来もたぶん変わらずに、そのように在り続けると思います。

私たちの DNA にトレイルがもう組み込まれているのだということは、容易にご理解いただけると思います。この地図が示すものは、人類がアフリカから伝播をしていった旅の道筋というものが、世界のロングトレイルの起源を示してくれているというのがご覧になれるかもしれません。

こちらの地図を見ていただくと――私はこの地図が大好きなんですけれども――南アメリカから始まってヨーロッパですとか、世界一帯に今日存在するトレイルが、人類がアフリカから伝播していった、その軌跡と非常に似通っているということがお分かりいただけるかと思います。人類が直立歩行を始めて以来、ずっとトレイルは我々の先生、師であり続けたわけです。



© 2018 Galeo Saintz

今日お話するときに使おうと思っていた、大事な小道具を忘れてきてしまったんですけれども、私の手にハイキングブーツがあるというふうにご想像ください。

このハイキングブーツが、我々人類の将来にとっての鍵となるものだと考えてください。もし私が、皆さまに「何を見て、どこに行くかといったようなことは、ロングトレイルにとって重要ではない」と言いましたら、どうお感じになるでしょうか。

トレイルで毎日目にする素晴らしい景色が重要なのでもなく、それから旅をすること自体が重要なのではありません。私たちが通り抜ける自然や、それから空を切り裂く険しい山頂、私たちが出会う豊かな文化が重要なのでもないのです。もちろん、こうしたことは価値があるんですけれども、トレイルが重要であることの理由にはならないわけです。

それから塩辛い冒険の味ですとか、息をのむ滝や氷河、山脈や野生動物を見るスリルが重要なのでもなく、休憩の際に湖畔に体を横たえる喜びや、星々に縁取られた空の下で野営をして、朝日の中で鳥の鳴き声を聞くことが重要なのでもありません。そして、私たちがトレイルで出会う人々が重要というわけでもないのです。

これまでつらつらと挙げてきたことよりも、より重要なこと、それがなぜ私たちがロングトレイルを支援し、また、ロングトレイルに投資をしなければならないのかという核心です。それをこれからお話ししようと思います。トレイルというものは私たちに、人生における６つの重要なことを教えてくれるわけです。

私はこれまでの間に、人々がロングトレイルを歩き終えた後に、より深くヒューマニティー、つまり人間性と結び付き、より良い人間になるということをこの目で目撃をしてまいりました。

この考えを少し深く感じてみたいと思います。トレイルを歩き終えて家に戻るとき、私たちは自身の人間性とより深く結び付いている、ということを少し考えてみましょう。

私は南アフリカで最長の２つのトレイル、「エデン・トゥ・アッド・トレイル」（これは約 400km）、それから「リム・オブ・アフリカ・トレイル」（約 650km）、これを共同開拓した者の一人でございます。私はこの２つのトレイルを歩いた人たちが家路につくときに、トランスフォーム、つまりなんらかの変容を遂げる瞬間を目の当たりにしてまいりました。

私は南アフリカから来ておりますけれども、南アフリカでは長い歩みというものが持つ価値を理解する、素晴らしい指導者がおりました。ネルソン・マンデラさんですけれども、彼の長い自由への歩みは、彼の中の普遍的な人間性を形作ることにおいて、非常に重要な役割を果たしたと思います。彼は長く歩み続けることが私たちに与える教えの本質を、正確に理解していた人物だと思います。

気候変動ですとか、それから政治経済の変化といった計り知れない困難に直面している現在において、私たちの人間性を救済するものは、まさにトレイルであると申し上げたいと思います。トレイルは私たちに思慮――考えることを回復させ、それから行き先の分からない未来と向かい合うために、必要な人格を与えてくれるのです。

ここから具体的に、トレイルの６つの教えについてお話をしていきたいと思います。トレイルのスペル TRAILS は、それぞれ私たち自身、私たちが自分の中にある人間性と繋がることを助けてくれる、私が呼びますところの「ロングトレイルの６つの教え」を表します。

最初の T は Tenacity、つまり「忍耐」を意味します。ロングトレイルは長い道を踏破するものですから、粘り強さと強い決意が必要とされます。歩みを止めないために辛抱強さが求められるわけです。それから一種の力と一つのことに専念していくということが求められていくわけです。ビジネスの世界でいうところの長期的な投資ということになりますでしょうか。持久力が求められるわけです。トレイルは私たちにそのことを教えてくれますね。

次ですが、R は Respect、これは「尊敬の念」という意味になりますね。自分が置かれている場所ですとか、自分を取り巻いている環境に対する敬意の念であると同時に、自分自身に対する尊敬も意味しています。広大な野生の世界で、自分が一つの小さな個でしかないということに気が付くにつれて、人間性が醸成されていくことでしょう。

それから環境に対する敬意の念ですとか、トレイルでのほかの人への敬意も示します。なぜなら、トレイルでは次の嵐や吹雪が来たとき、それから大きな川を渡るときなどに、一体、誰の力を借りることになるか分からないからです。自分のチキンヌードルスープが

終わってしまって、寒くて危険な状況になったときに、誰が助けてくれることになるか分からないわけですから。

３つ目はA、Appreciation、「感謝の気持ち」ですね。私たちがトレイルで出会う自然や、さまざまな文化に対する感謝だけではなくて、火をおこしたり水を湧かしたり、雪の中でテントで眠ったり、泉から水を飲んだり、自分が健康でそれから幸福な状態であるといった、小さなことに対する感謝の念も含みます。

仕事ですとか、社会活動がいかにして私たちからなんとなく人生を取り上げてしまうかは、皆さんもお感じになったことがあるかもしれません。トレイルは私たちに人生を取り戻させてくれる、これにも感謝する必要があると思います。

次にI、Insight、「洞察力」になります。さまざまな科学ですとか、科学的調査活動によって、歩くことが創造力や洞察力といった素晴らしい能力を開花させることが証明されてきております。歩くことが創造における非凡な才能に繋がったと言っているベートーヴェンですとか、スティーブ・ジョブズさんですとか、アインシュタインさんを見てください。私は今、お三方の名前を挙げましたけれども、実はこういうふうに言っている方のリストって非常に長いんですね。学者さんですとか、哲学者、それから著名なビジネスマンの方たちが、似たようなことを言っています。

次にL、Love、「愛」ですね。要するにトレイルによって私たちはもう世界に恋してしまう。世界を愛するということを、私はここで言いたいんです。しかし、この愛にはまた、ほかの人との繋がりや連帯感といったことも含まれます。さらには、自分の過去や未来との関係性を深掘りしていくことによって、自分自身への愛も芽生えるわけです。

私は今お見せしている写真が大好きなんですけれども、これはトレイルがいかにして人々を結び付けるかということをよく示した写真だと思います。昨年の 9 月、鳥取で撮ったものです。11ヶ国の異なった国籍を持つ人たちが集まりました。

最後に S、Simplicity、「簡素さ」ですね。一歩ずつ歩みを進めていく、あたかも遊牧民ですとか巡礼者、それから流浪の民のような簡素な生活に、トレイルによって導かれた喜びです。

トレイルでは自分が必要なものだけを持ち、世俗的な所有物から解放されて、私たちは極めて簡素に生活をするわけです。これはまさに日本の禅の世界とも通じるところがあると思います。

ここまでお話したトレイルの教えというものは、繰り返しになりますけれども、私たちに変化をもたらすということです。私の友人にザックという友人がいるんですけれども、彼はトレイルが人を形作り、人がトレイルを形作るというふうに話したことがありました。

これまでお話したことは、とても詩的で哲学的で申し訳ございませんでした。しかし、もしよく耳を傾けていただいていたとすれば、私のこれまでの話の中に、トレイルの市場をどう開拓するかについての秘訣を、実は共有させていただいていたんです。

ここからはトレイルの市場をどう開拓していくかについて考えてみたいと思いますけれども、「トレイルの６つの教え」というものは、トレイルのもたらす利益とか恩恵とは大きく異なるもので、この点を混乱してはなりません。

よく挙げられるトレイルのもたらす恩恵というのは、皆さまお手元の資料に 10 点挙げておりますけれども、こういったことがよく挙げられます。こうしたポイントはトレイルを歩く方々というよりも、資金を提供してくださる方、それから政治家の方、それからトレイルを抱える地域に対して、よく説明する必要があると考えます。

これは 10 点あるんですけれども、まず地域への経済効果、2 つ目が健康とライフスタイル、3 つ目が安全な代替交通手段であるということ、それから 4 つ目が緑地の保護や活用、5 つ目が自然や文化の保護、6 つ目が地域作り、7 つ目がお金の掛からない、8 つ目が無料もしくは安価なレクリエーション、それから 9 つ目が野外教育、10 個目が自然とのふれあいです。

それからもう一つ重要なことを付け加えたいんですけれども、トレイルは災害インフラになり得るということです。近年、ネパールで起きた地震を思い起こしていただきたいんですけれども、地震の際にトレイルが被災地からの避難路として利用されました。また、津波の際には、トレイルが家畜や野生動物、それから人々が危険から逃れるために利用されました。

写真でお見せしていますように、9.11 の際にアメリカのワールド・トレード・センターで悲劇が起きたわけですけれども、ツインタワーが崩落した際に、多くの人たちはハドソン川沿いに整備された遊歩道を使って避難をしました。今日、政治的に世界が混乱し、気候変動の影響もどんどん出てきているわけですけれども、都市計画においてレジリエンス、つまり「回復力」を組み込んでいく必要があると言えます。そして、そこにおいてトレイルは解決策の一部であるということができます。

これまでトレイルの教えや、それから恩恵について共有をさせていただきましたけれども、では一体、我々の現在のトレイルの状況というのはどういったものでしょうか。私た

ちはどのようにトレイルを労わっているのでしょうか。トレイルが教えてくれる、目では見ることができない質を理解し、また、トレイルに感謝をしているとすれば、私たちの時代において最も重要なことは、ロングトレイルという財産を伝え続けるために、ロングトレイルに投資をすることが重要だと考えるでしょう。さらには、都市部の人々が実際にトレイルに足を運び、トレイルを楽しんで、トレイルから学ぶようにすることが重要だと思います。誰も使わないトレイルではいけません。

私はここ 5 年ぐらい、たくさんのトレイルを訪れたり、トレイル関連のコンサルティングをしてきました。

韓国のチェジュ島で開かれた第 1 回のワールド・トレイルズ・カンファレンスでは——2012 年にこの会議が開かれたわけですけれども——私は南アフリカから来て、非常に良い時間を過ごすことができました。チェジュの皆さんは、トレイルについてあらゆることをご存じだったんです。

しかし、私はもうすぐに気付いたんですけれども、アメリカの一番いいトレイルであろうが、ヨーロッパのトレイルであろうが、世界中どこでもトレイルが抱える課題は、どこも同じだということです。

こうしたトレイルが抱える課題をすぐに解決できるような国というのは、実はどこにもないんですね。私たちは一緒になってより良いトレイルを造っていくために、解決の手段を探っていかなければなりません。

トレイルが抱える課題というのは、4 点ぐらいあるかと思うんですけれども、維持管理が十分でなかったり、それからトレイルによっては、来訪者が多過ぎるトレイルもあります。それから再投資が十分に確保できていなかったり、放置ですとか、放棄によってトレイルが閉鎖されるといった課題がどこでも起きているわけです。

ロングトレイルに関しては、これもお手元の資料をご覧いただきたいんですけれども、その管理について特有の課題があります。まずは全体の距離が長いこと。それから管理の主体が自治体やクラブ、ボランティアといった多岐にわたる主体であること、調整しづらいということですね。それから訪問者に比例した資金が不足しているということです。それから最後は、トレイルから生み出そうとする経済利益が、だんだんシフトしているところもあるということです。例えばネパールでは、観光から交通機関の整備へとシフトがなされたわけですけれども、その過程の中で観光資源が破壊されているという状況があります。

先ほどからもお話している「トレイルの 6 つの教え」ですが、これはすべてのトレイルがそういった教えを来訪者にあげることができるのかというと、実はそうでもないんですね。やはりきちんと人が担保されて、持続可能であるトレイルのみが、こうした私がお話してきている教えを訪れた人に与えることができます。

2 年前に私は、ネパールの国のトレイル規定書を作るプロジェクトに参加しました。ネパールでグリーン・フラッグ・トレイルを始めることをお手伝いしたんですけれども、この

グリーン・フラッグ・トレイル・システムというのは、大学教授も務める、私の同僚が 15 年かけて開発したもので、トレイルの評価ですとか、格付けの際に参考になると思います。

使われないトレイルというのは、役に立たないトレイルであるということをポール・ビュッシャさんは言っています。

これは非常に単純なことというふうに思われるかもしれないですけれども、実は質がきちんと担保されたトレイルを造るには、このことが非常に重要なんです。トレイルがなぜ、それから誰に向けてトレイルを造るのかということを、きちんと考えていく必要があります。

トレイルの質がなぜ重要なのかについては、トレイル利用者にとって良いトレイルというのは、もちろん価値があります。それからトレイルを実際に造った人たちの誇りにも繋がります。それからもちろん、良いトレイルがあれば収入の増加にも繋がりますし、実は質の良いトレイルというのは、維持費を節約することもできます。また、安全性の強化にも繋がっていきます。

トレイルの質に繋がる要素としては設備、それから衛生とか清潔さ――トレイルのあらゆる設備が清潔であるかということです。それから安全性、防犯対策がきちんと取られているか、後はきちんとした道標があるか、難易度がきちんと設定されているか、管理がきちんと行き届いているか、という点が挙げられると思いますけれども、この 5 つがきちんと一緒になってトレイルの質が担保されていきます。

皆さまにはトレイル造りのモデルをお配りしています。これはトレイルを実際に造るときにも参考にしていただけると思うんですけれども、トレイルの中間評価ですとか、造った後の評価にも活用することができます。

グリーン・フラッグ・トレイルの創始者であるレオン・ヒューゴ博士は、小さな計画を立ててはいけない、誰でも土にシャベルを立て、道を造ることができる。持続可能なハイキング・トレイル・システムを作り、発展させることができる人というのは非常に少ない、というふうに述べています。

このトレイルの評価をする際に、この評価表は 86 のポイントを含んでいます。標識がど

うなっているかとか、防犯対策がどのようになっているかというのを、この表を使ってアセスメントしていくわけです。私たちはこのようにして、トレイルを守っていくような手段を作っていかなければ、未来にトレイルを失ってしまう。それはつまり、人類の非常に偉大な師を失うことにも繋がってしまいます。グリーン・フラッグ・トレイルは、トレイルの維持管理に際して、科学的根拠を使って評価活動をしています。

少しアドベンチャー・ツーリズムというものに目を向けてみたいと思います。

2017 年に東カリフォルニア大学がまとめたグローバル・ツーリズム、世界旅行動向の調査の中で、トレイルがついに最も人気のあるアドベンチャー・トラベル――野外で体を動かすような旅のスタイルをアドベンチャー・トラベルと呼ぶ――の活動として認められました。

この調査では、アドベンチャー・トラベル――冒険、体を動かすような旅行をした――における活動の上位に、ハイキング、歩いて旅をすることがランクインしています。調査対象者の 92.3%が、ハイキング、徒歩による旅行を行ったと答え、そのうち 51%以上が、将来的にまたハイキングに行くことを計画しているというふうに回答しています。

アドベンチャー・ツーリズムは、グローバル・ツーリズムの中でも急成長を見せている分野でして、その市場は年間約 26 兆 4,000 億円というふうに試算されています。

上位 5 位の活動のうちハイキング、バックパッキング、トレッキングが上位 3 位を占めています。ここで重要なのは、ハイキングやトレッキングといったことがほぼすべて、何かしらトレイルのインフラ設備を使った活動であるということです。
そして、この活動は実は女性層が非常に好んで行うものです。

トレイルがアドベンチャー・ツーリズムの核となっていることに、私たちは意識を向けなければなりません。そして、ワールド・トレイルズ・ネットワークは、この世界的産業分野を、持続可能で、また公平で十分に資源が充てられ、それからきちんと価値を生み出していただけるものとするように、非常に重要な役割を果たしています。

ワールド・トレイルズ・ネットワークは今年、次世代トレイル・リーダー育成プログラムの立ち上げを通じて、日本におけるトレイル・ツーリズムの振興に関わりました。このプログラムは、国際的な繋がりやパートナーシップの醸成を通じて、次世代のトレイル・リーダーたちのネットワーク作りですとか、知識や考えの共有、それから彼らを触発するようなことに焦点を当てたユニークな取り組みです。

日本は文化色が強かったり、自然に特化したものなど、素晴らしいロングトレイルがたくさんありますよね。しかしながら、日本は国際的なトレイル・ツーリズムの恩恵を理解しているでしょうか。どうしたらこの美しい国のトレイルについて、世界の目をもっと向けさせることができるでしょうか。

今日、皆さんの前に貼られています日本ロングトレイル協会のロゴですけれども、こうしたことは世界のトレイルマップの上に、日本のトレイルをきちんと入れていくことに関しての第一歩になっていると思います。

私が先ほどお話ししたトレイルによる変容の物語は、強力な、トレイルの市場開発における核になるというふうに思っています。スペインのカミーノ・デ・コンポステーラが一つの例だというふうに思いますけれども、この古くからの巡礼路に関しては多くの本や映像が作られてきました。また、今日はソーシャルメディアが、情報の発信において非常に重要な役割を果たしています。

私たちは物語を語るときに、独創的にならなければならないというふうに思っています。そこに先ほどから繰り返しお話ししている「トレイルの 6 つの教え」は、非常に重要です。

ロングトレイルというのは単に歩くだけではなく、人生の旅路のようなものであります。今日、人々はどんどん忙しくなっています。それだけでなくて、旅行先における体験もより早くて、それからより気軽にできるようなものが求められています。ロングトレイルは旅行者のこうしたニーズをどう満たすかを考えなければなりません。例えば、ロングトレイルのより短いものを準備するとか、それから時間をかけて何度もリピートしてもらって踏破をしてもらう、歩き切ってもらうということを工夫する必要があるでしょう。

私どものネットワークについて少しお話をしたいと思いますけれども、今、ここに挙げている自然、文化、催し、イベント、それから知識、ツーリズムというのは、私どものワールド・トレイルズ・ネットワークが活動の焦点としているものです。

5 つの分野それぞれにボランティアチームが形成されておりまして、戦略ですとか、それからプロジェクトを運営する上での目的などきちんと設定をして、国境を越えたそうしたボランティアが、プロジェクトをそれぞれの分野で運営しています。

6 つのこと――忍耐、尊敬、感謝、洞察力、愛、そして簡素さ――これらすべてのことは実は、人々が旅先で体験をしたい、経験をしたいという意識に訴えかけることが可能だというふうに考えております。今日、アドベンチャー産業やアウトドア産業で主流となっているものは、旅先における体験です。

単に旅先での良い写真を使ったり、このトレイルは何百 km ありますよといったようなことを話すよりも、トレイルがどのように私たちに忍耐力を与え、それから私たちの人格を高めたかについて語る方が良いのではないでしょうか。尊敬の念がいかに私たちをより良い人間にしたか、また、感謝することが私たちの体験をどう豊かにしたか、なぜ洞察力はコンピュータでは見付けることができないのか、そして、愛はどのようにして私たちに意味あるすべてのものを与えてくれるのか、簡素さが私たちをこの先、何千年と続くことを可能とする、持続可能な世界に立ち返らせてくれるのかについて語った方が、良いのではないでしょうか。この 6 つの言葉は、トレイルをこれまで全く予想しなかった形で売っていくための、複合的な入り口になるというふうに考えています。この 6 つの言葉の一つ一つが、単にトレイルを体験したということだけではなく、トレイルで過ごした後に自分の中とか、それから自分の人生に起こることも体験する、そのことを感じてもらえるからです。

私たちは、これからお話するような世界的なキャンペーンを通じて、より効果的にロン

グトレイルを支援していくことを楽しみにしております。まずはオンラインのトレイル・アトラスですね。それから国連を動かして、国連で「国際トレイルの日」を制定しようと働きかけていきたいと思います。そして、特にこれは「国際フレンドシップ・トレイルズ」というプログラムですけれども、このプログラムも強化していきたいと思います。このプログラムの中では、例えばトレイルがある市町村を姉妹都市にしたりですとか、そういったことも検討していきたいと思っています。

今日お集まりの皆さんの中に、ここに挙げられているような分野で、自分は専門性があるとか、そういったことがあれば、ぜひ私どものネットワークの活動にご参加をいただきたいと思います。私どもが持っているこの国際的なチームに、皆さんの経験ですとかそういったことを、ぜひお力添えをいただければと思います。

それから私たちの活動の一つにイベントというのがありましたけれども、このタスクフォースチームが今、とても頑張っている、非常に重要な活動は、今年 9 月 26 日から 29 日に、スペインで開催される「第 7 回ワールド・トレイルズ・カンファレンス」です。どんな方でもご参加を歓迎いたします。

私たちのネットワークは、まだ組織が非常に若いです。私どもは今、21 の会社に働きかけをさせていただきまして、それぞれの会社から資金を提供していただくように働きかけをしています。これらを「21 クラブ」というふうに私たちは呼んでいるんですけれども、こちらを通じて資金調達を行っていきたいと考えております。

先ほどの基金の話ですけれども、5 年間で 2,100 万 US$の基金を集めることを目標にしています。それぞれの会社から 100 万＄出していただくという目標です。それから私どもの活動の拠点ですけれども、スペインでまずは NPO 登録をいたしました。それから最近、アメリカでも NPO 登録をいたしまして、これらの拠点を活用して資金の調達ですとか、大陸間のプロジェクトの調整を行っていきたいと考えています。

トレイルは私たちを形作り、そして古くからの知恵について教えてくれます。人生とはまっすぐな道ではない。ときに困難で、つらいことから立ち上がる力や、それから責任を求められることもあるということを教えてくれます。使う物はより少なく、自分を頼りに

して、それから自分が決めたことを信じて、リスクを受け入れ、自分を信じること、そしてトレイルは、我々は一人ではないということも教えてくれるのです。

今日のお話を、先ほどお話した、次世代のトレイル・リーダー育成プログラムにおいて採択された「トレイル・マニフェスト」を読んで終わりにしたいと思います。このマニフェストは若者だけではなく、トレイルを愛するすべての方々、トレイルが私たちにもたらしてくれるものや、トレイルがいかにして私たちを人類というものに引き戻してくれるか、また、トレイルが私たちに人間性を再びもたらしてくれる、そういったことを愛する人たち、こうした人々すべてに向けたものです。それでは皆さん、ブーツを履いてトレイルを見付けに行きましょう。

トレイル・マニフェスト

私たちはトレイルによって結び付いた家族である。
私たちは、歩く。歩いて旅をし、ペダルを漕ぐ。

トレイルは私たちの物語であり、遊び場でもある。
その刺激的な線は、山頂を越え、谷を渡り、滝の上を行く。
それは、ビジョンやゴール、そして鼓動を越えていく。

私たちが行く所、その跡は残さない。私たちは、シンプルな標識に沿って進む。
より遠くへとたどり着くことが冒険であり、奥へと進むにつれて結び付きは深まるのだ。

私たちの答えはゴールではなく、歩みの中にある。
理由など必要ない。そこに道がある、それだけで十分だ。

すべての夢は冒険。すべての旅には意味がある。
空に昇る月や太陽、そして果てなく続く空。素敵なものはすべてトレイルにある。

地図を持とう。水を運ぼう。準備をしよう。
冒険に感謝しよう。
星の下で眠り、野生たるものを愛そう。挑戦のしょっぱさを味わおう。
一人で、一緒に、ただ存在しよう。

私たちはトレイルに留まり、トレイルを行く。

身を捧げ、そして祝う。自由を希求する古い歌を愛する。そして、思いやる。

そう、私たちは自然を守る。未来に残すべき遺産を大切にする。コミュニティを維持する。感謝を示すことで、報われるんだ。

すべての歩みが変化を生む。すべてのトレイルが命を生む。

これが私たちのマニュフェスト。
いつも足元の小道を愛し、気ままに歩み、分かち合い、そして歩み続けること。

歩き、ペダルを漕ぐ。歩いて旅をし、座り、眠り、笑い、楽しむ。

私たちの家族は、あなたたちの家族。これからもずっと。
トレイルはすべての人を誘（いざな）うから。

特別講演②「オリンピックレガシー」

水野 正人（ミズノ株式会社 相談役会長／日本オリンピック委員会名誉委員）

水野正人と申します。第 5 回ロングトレイルシンポジウムにお招きをいただきまして、誠にありがとうございます。この安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センターができましたときも、私は安藤宏基理事長と一緒にお祝いにここへ来ましたが、本当にこの場所が、いよいよ日本のロングトレイルのメッカになればいいなということで、私も皆さま方の今までの大変なご尽力に敬意と感謝を申し上げたいというふうに思います。

ガレオから素晴らしいお話をいただきました。22 時間もかけてやって来られたので、本当に実のあるお話をしていただいて感謝しています。私はほんの 1 時間半ほどで来ましたから……。持ち時間で私が皆さんに申し上げたいことを、一つ述べてみたいというふうに思います。

その前にちょっと自己紹介でありますが、私は兵庫県芦屋市に昭和 18 年、1943 年に生まれました。74 歳です。安藤さんはいわば 2 代目といいますか、本当に苦労してここまで会社をもってこられて、敬意を表します。私は 3 代目で、創業者の孫です。初孫ですから、もう目の中に入れても痛くないほど可愛がられて育ちました、お坊ちゃま君でございます。

お坊ちゃま君ですから、神戸にあるエスカレーター学校に入りました。幼稚園に入ったら大学まで行っちゃう、もう本当にまあまあ気楽な学校で、入園試験しか受けたことがありません。4 人兄弟ですけれども、妹と弟が両親に連れられて東京に住んでいましたので、私は甲南という学校に入っているから、祖父と祖母が育てようということで、そちらで育

ててもらいました。

姉が２つ上なんですけれども、力が強くて、祖父から「相撲を取れ」というふうに言われては、いつもコロッと負けていましたので、祖父が悔しがって「正人、頑張れ」とかと言うんですけど、いつもコロコロ負けました。

これはあかんなと、正人をなんとか強くせなあかんということで、早稲田の野球部の人がいらして、その人が芦屋ボーイスカウトの育成会長だったので、スカウトに入れなさいということになりました。こうして私は、カブスカウトから入ってボーイスカウト、シニアスカウトと、スカウト活動もやりました。

本当に、自然の中で私たちはいろいろ遊び回りました。その当時はまだまだ今のような規制がなくて、どこでも、なんでもできるようなときでしたから、本当に皆で楽しくキャンプとかやっていました。

夜空には、本当にフル・オブ・スターズというほど星が輝いていましたので、私は星を見るのが大好きでした。中学 2 年生のときに、私の父が「それじゃあ、京都大学の花山天文台へ連れて行ってあげよう」と言って、冬に連れて行ってもらいました。

宮本正太郎先生という天文学の大先生が、「正人君、君は土星の輪がどうしてできたか知っているかい」と言うから「いや、知りません」「じゃあ教えてあげよう」と言って、「水分を含む岩が本当に粉々に壊れて、引力で土星の周りを回るようになったんだよ。さあ、見せてあげよう」と大きな天体望遠鏡でバッと見せてもらって、本当に感動しました。宇宙って広い、素晴らしい。そういうことを考えると、我が地球がいかに小さくて、愛しい星かということも考えるようになりました。

お坊ちゃま君ですから、甲南大学を出て、アメリカの学校に行きました。アメリカといっても、ウィスコンシンという田舎ですから、ど田舎やから、もう本当に星がまたいっぱい見えて、星が見えると自分がどこにいるかよく分かりますから、別にホームシックにも全然かからずに帰ってきました。

帰ってきて結婚して、子どもが生まれて。で、うちの父が「お前、ちょっと東京で修業してこい」ということで 3 年間、「じゃあ、行ってきます」と言って東京に行きました。1970 年のことです。

東京へ来てむちゃくちゃ腹が立った。なぜか？　星が見えないんですよ。そのころスモッグと言って、もう星のかけらも見えないんです。今はちょっと見えるようになったけど、それでもどうしようもない。なぜだ、なぜだ、それで「環境」ということをちょっと考えるようになりました。

私たちはスポーツのメーカーです。世界にはナイキとかアディダスとかプーマとか、本当にたくさんのスポーツの会社があるので、そういう会社で世界スポーツ用品工業連盟という連盟を組織していて、私もそこへ毎回、毎年出かけていました。

ある年、1990 年ぐらいに、皆よう聞けということで、「私たちは自由で公正な競争、自由で競争のある取引をせないかんけれども、しかし、共通の課題は皆で解決せなあかんちゃ

うかな。それが環境だ」とか発言したところ、「お前、よう言うやんか」とか言われて、環境委員会を作りました。10 年間、環境委員長をやっていました。

それで IOC に手紙を出して、「我々はスポーツのメーカーなんだから、もう物作りから物流から何から、全部環境についていろいろやりますよ」と。で、「いろいろ契約している選手にも、環境についてはちゃんとメッセージを送らせる」と偉そうなことを書いたら、当時、サマランチという会長から、「おお、お前、何を言っているんだ。環境保全こそ IOC がやる仕事だと思っている。オリンピック・ムーブメントはスポーツ、文化、それに並んで環境が三本柱なんだ」とか書いてきました。で、IOC にも環境委員会を創るから、お前もメンバーになれ、と言われて、1995 年にメンバーになってほぼ 20 年、IOC で環境委員をやっておりました。

で、「IOC もそうやっているから、JOC もちゃんとやりましょう」と言ったら、JOC もちゃんとそれをやろうということで、私も JOC の理事にしてもらいました。そうして環境委員会を動かしていたんですけれども、2006 年に副会長になれ、とか言われて「ええっ、私、1 回ですよ国際担当になってから」と言ったら、分かってくれました。で、国際担当の副会長になりましたが、「せやけど、もう 1960 年の東京オリンピックから半世紀もたつから、オリンピックをもう 1 回、日本でやろうぜ」ということになって、2016 年、もう終わりましたけれども、オリンピックの招致をいろいろやりました。

そのときは、やはり利益相反――コンフリクト・オブ・インタレストというんですけれども――になっちゃいけないから、私は JOC の副会長として、横から招致をデザインしましたが負けました。そこでいよいよ 2020 年、今度こそ本気でやろうぜ――今までも本気でしたけれども――、しっかり取ろうということで、私は会社を辞めました。そういうことで、利益相反になっちゃいけないということで会社を辞めて、招致委員会の COE という事務局を束ねる役になりました。

本当に皆さんのご支援のおかげで、2020 年にオリンピック・パラリンピックを招致することができました。その年がちょうど私は 70 歳ですわ。70 歳って、JOC、IOC も定年制があって 70 歳ですから、そこで私はすべて終わって、今はただのおっさんです。

せっかく 2020 年にオリンピックが来ますから、それを今からちょっとお話しましょう。

オリンピックの開催には 2 つの意義があります。とても大切なことです。1 つは安全、安心、確実、清潔、そして感動、夢、元気、勇気を世界で共有する、素晴らしい大会をスムーズにやることです。今、ピョンチャンでもやっています。放送に映る限りはいいけれども、後ろにはやっぱりいろいろな問題があります。ああいうことが起きないように、特に警備網が大変なんです。ですから、本当に世界の模範になる、安全で、安心で、確実、また、皆さんに感動、夢、勇気というものを共有できるオリンピックをやることです。これが 1 つの意義です。「ああ、東京はうまくやったね。これは世界の模範だ」と言われることは、大変な事業です。

もう 1 つ意義があります。それは、演題にあるように「レガシー」です。レガシーって

何かというと、「遺産」と言います。大会をやって何を残すんですか、と。レガシーにも２つあります。1 つは有形のもの、1 つは無形のもの。有形のものは簡単ですね。競技会場をちゃんとまた後で使えるようにしようぜ。1 つは、例えばバリアフリーで、体の不自由な人も自由に動けるようにしようぜ。あるいは警備もしっかりやらなきゃあかんし、安全にできるようにしようぜ、と。あるいは、環境のいろんな設備とか、いろいろ有形のものなんです。

無形のレガシーってなんですか？　1 つは文化です。これは人間が生きていく値打ちの一つやったのは、私たちは文化を持っているからですよ。トレーニングも文化です。ですから、この文化というものを、私たちはしっかり醸成していく必要がありますね。

2 つ目は教育です。日本の教育は悪くはないです。しかし、北欧のフィンランドなんかナンバーワンです。どうしてフィンランドがナンバーワンかといったら、学校の先生は教えません。先生が教えない、どうするの？　子どもに考えさせる。子どもに考えさせるから、子どもは考える力が出る。知識を押し付けても、知識からは考えとして出てこない。だから子どもに考えさせる。今、文科省もそういう方向で動いています。

3 つ目は、例えば環境。環境について皆がしっかりやろう、と。この大雪が降っているのも、実は温暖化の影響だということで、もうちょっと時間があったら、私は環境について少し話したいことがあるんですけれども……。いずれにしても、環境問題を皆が本気で考えて、できる限りのことをして、この地球がもう少しでも長く、長持ちするようにしましょうということが、無形のレガシーになればと思っています。

今までのは文化、教育、環境、そして国際交流です。もう世界中から人が来ます。だから、日本人は今まで日本語ばかりやっていたため、海外の言葉が難しいからとあまり交流しない。今はどうですか？　スマホに翻訳ソフトというのがあるんですよ。これで「あなたの好きな食べ物なんですか？」と言ったら、何語でもいい、What kind of food do you like？　What is your favorite food？とか、ちゃんと言うんですよ、こいつが。

私は今、ボーイスカウトの副理事長で、国際交流支援担当ですから、来年、1,000 人を連れてアメリカのワールド・キャンプに行きます。で、スカウトには「何しろもう英語を覚えるな、それよりもこれを扱える方法を覚えろ」と。それでなんでもいいから捕まえては「どんなことやって楽しんでるの？」とか「何してるの？」とか、そうやって友だちを作っていける。それが国際交流です。

昔はそろばんだったけれど、今は計算機じゃないですか。計算機の方が便利やから計算機を使う。だからもう、いよいよコミュニケーションは、こういうので「何してんねん」とかいうのをやったらどうかと、ちょっと今、アイデアを出しています。そういう国際交流もありでしょう。

それから、例えばボランティアリズム。オリンピックのボランティアは簡単です。200 万人くらい応募があって、その中から 8 万人くらいを選ぶわけやから。オリンピックはもう簡単に集まりますが、このロングトレイルこそ、いかにメンテナンスするかとか、皆で

いかに大事に使っていくとかということは、やはりボランティアが皆で力を合わせてやる必要があるというふうに思っています。

先ほど言いました無形の遺産とはなんですか？　文化だ、教育だ、あるいは環境だ、国際交流だ、ボランティアリズムだ。それから、実は観光です。観光も無形遺産の大きなものです。

観光立国日本。私たちはオリンピック招致のときに、この日本にオリンピックが来ることによって、観光が大変に盛んになりますよ、と言っていました。2013 年、日本へのインバウンドは 1,000 万人以下でした。で、観光庁といろいろ話をして、よっしゃ、2020 年には 2,000 万人のインバウンドを目指して皆で頑張りましょう、と言っていました。今どうですか？　もう一昨年くらいに 2,000 万人を軽く超えて、今、宿が足らんのですよ。それほど日本は今、インバウンドが増えているんです。増えているからといって、放っておいたらあかん。これをなんとかせないかん、というテーマが、実は今日、後 7 分ぐらいで話すことなんですが……。

そのほかに、無形のレガシーにもう 1 つあります。例えば、ニュービジネスという新しいビジネス。いろんなビジネスができてきたり、なくなったりしますよ。その中で、新しいビジネスが出ます。なんでしょう？　やっぱり旅行関係、インバウンド。特に今、団体旅行が進化しており、実はカスタムメイドの、自分たちの旅行というのを皆考えているんです。

これは今、インターネット上には、まだまだ良くせないかんけど、いろいろな情報が出ているんですね。で、世界の人たち――世界は今 70 億人ぐらいいるんですけれども――のほんの数%でも興味を持って、日本は面白い、どういう所があるかインターネットで調べてみよう、となる。中禅寺湖に行くには、あそこの駅で降りて、市バスの何番に乗って、何分発に乗ったらどこどこへ行くと。そこで有名なお蕎麦を食べて、それから今度はまたバスを乗り換えて、何分のバスでどこに行ったら中禅寺湖に行きますよ、とかいって、そういうインフォメーションを自分で調べて「よっしゃ、行こう」となる。

日本はすごいんです、時間をピタッと守る国民なの。東京の方もいっぱいいらっしゃると思うけど、それこそインターネットでパッと分かる。何分に地下鉄に乗ったら、何分に着いて、何に乗り換えてどこに行くか。時間どおりに来ますよ、本当に。あ、時間かなとなると、ズゴーッと電車が入ってきて、ホームで乗ったらビューッと出ていって、すごいです、本当に。常磐線なんかすごいんですよ、15 両編成ですよ。15 両編成といったら、1 両が 20mやから全長 300m。300mの物体がぶわっと時間どおりに来て、ぶわっと出て行くって、信じられないほどすごいんですよ。それで今、ガイジンが来たら、彼らに「よく聞いておけ、電車は普通ゴトンゴトンいうやろ、あれはレールの継ぎ目の音なんや。日本は今、ロングレールで、レールの継ぎ目をはすに継ぎ合わせるから、音がしないんや。シューって行くやろ」と話すと、「本当や、本当や」と言われるんですよ。本当に音がしない。これがもう日本のインフラ・ストラクチャーの素晴らしさ。だから日本は安全で安心で、

本当に皆が確実に旅行できる国なんです。時間どおりにすべてが動いて、食べものは安全だし、そうして皆どんどん日本を目指すんです。

そこで私たちは、ロングトレイルならロングトレイルで、インターネットにもうこういうコースがありますよ、それから付加価値を付けるために、例えばここをちょっと曲がったら、こんなに見晴らしがいい所がありますよ、といったような情報を提供したり、写真を載せるとか、そうやって作ったものを大々的に売るとか、いろいろ考えられますね。そういう新しい工夫をするだけで、「こんなにきれいな所があるから、ここへ行ってあそこへ行って、あれを食べよう」とかというような気持ちになって来ていただく。これはニュービジネスじゃないけど、新しいクリエイションですから。そういうものを私たちは作り上げて、世界中からいろいろな方に来ていただいて、ロングトレイルを楽しんでもらいたいものです。

私はボーイスカウトをやっていますから、ボーイスカウトのロングトレイルに一緒になって参加したいと思っています。ところで、ボーイスカウトは、たくましくて頼もしいリーダーを野外活動で育成するんですよ。私たちはそれをやっています。キャンプに行って、火をちゃんと管理して、ロープピングだ、応急手当だ、救急法だ、それから手旗信号だなんだかんだと、子どもたちを訓練します。それをやっておくと、何に強いかというと、災害に強い子どもを作ります。

ロングトレイル活動にしても、実は同じなんです。子どもだけやなくて、どの年代層もがこのロングトレイルを楽しんで、なおかつ楽しむだけでなく、そういういろいろなことをちゃんと吸収できることに意味があるんです。いざとなって、いや水が出ました、いや震えました、何しましたというときに、俺はロングトレイルをやっているから平気さと、畳 1 枚のスペースとロープさえあったら、なんでもできるということで、本当に災害に強い人を作ることができるわけですから。

ロングトレイルの価値については、ガレオがちゃんと 6 項目を言いました。あれは嘘ではありません、本当です。でも、それにプラスして、本当にいざというときに強い人を作るのは、やっぱりロングトレイル活動だというふうに私は信じています。

ボーイスカウトも今、一生懸命やっていますけど、子どもの数が減っていますので、皆さん方にもご協力をお願いします。小学校 1 年生から 2 年は「ビーバー」と言うんですよ、小さい。それから 3、4、5 が「カブスカウト」、6 年、中 1、中 2、中 3 が「ボーイスカウト」、それから今は「ベンチャー」と言うんですけれども、高校生。これらの子どもたちが減って困っていますので、皆さま方のお孫さんとか、お子さんで、それぐらいの年代層の方をボーイスカウトに入れてもらったら、確実に災害に強い子どもに仕立て上げますので、よろしくお願いしたいと思います。

そのほか、ガレオも言いましたけれども、ロングトレイルというこの活動には当然、移動する手段もあれば、宿泊もあれば、食事もあれば、エンターテインメントもあれば、ネットワークもある。あるいは何か起こったときのリスクマネジメントもあれば、というこ

とで、それこそいろいろなエレメント、いろいろなファクターがあるというふうに言いました。私たちはそれを継続的に分析していって、その１つ１つを改善すれば、ロングトレイル活動は大変魅力のあるものにこれからなっていきます。そういう意味で、私たちもしっかりと力を合わせていきたいと思います。

「山の日」ができました。山の日が制定されたことによって、自然の中で活動している仲間たち皆が集まって、改めてしっかりやろうぜというふうになってきているわけですから、ボーイスカウトも一緒になってやります。これはどこか一団体だけの運動ではないので、ひとつ皆で力を合わせてやっていきたいというふうに思います。

最後に、私はオリンピックに行っていますからよく知っているんですけど、100mのスタートをバーッと見たら、誰が勝つか分かるんです。水泳の決勝でバーッと見たら、誰が勝つかすぐ言うんです。分かるんです、私には。誰が勝つんですか？　伸び伸びした人です。伸び伸びしてなきゃ勝てない。

この間もほら、スケートで小平とか高木ちゃんとか、皆勝っているじゃないですか。あれは皆、伸び伸びやっているんですよ、本当に。我々が緊張しただけで、本人たちはしょっちゅうやっているから、経験の積み重ねなんです。相手も同じ顔ですから、本当はそんなにプレッシャーが懸かっていない。それで伸び伸びやった方が勝つということです。私たちも１回しかない人生、皆やっぱり伸び伸びやらないと……。

だからロングトレイル活動も皆で楽しく、本当に伸び伸びやりましょう、と言ったら、ちょうど時間になりましたので、これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

講演「観光先進国への取組～スポーツツーリズムを中心に～」

斉藤 永（観光庁観光地域振興部観光資源課 新コンテンツ開発推進室長）

観光庁の斉藤と申します。本日はこのような素晴らしいシンポジウムにお招きいただき、ありがとうございます。

私はいつもこういう場に呼ばれると、前の人のときに自分の話の構成とかを考えるんですけれども、今日はうかつにも水野会長の話に聞き入ってしまって、ちょっとまとまりのない話になってしまうかもしれませんが、どうぞご容赦ください。

本日のタイトルとしましては、「観光先進国への取り組み」です。ということで、スポーツ・ツーリズムと絡めてお話させていただこうというふうに考えております。主に３つのポイントについてお話させていただければ、と思います。

まず今、政府で観光について、地方創生の切り札とか、経済成長の柱だとかいうふうな

話をしていますけれども、本当に観光にそういう力があるのかどうかというところを、経済的な観点から申し上げたいというのが 1 つ目の事項です。

2 点目につきましては、本日のテーマであるインバウンド。最近、ちょうど昨年のデータが整ってきましたので、最新の統計データでインバウンドの成功についてお話したいと思います。

3 点目ですけれども、そのような傾向を踏まえて、現在、政府でどういう取り組みを行っているのか、ということをご紹介したいと思います。

まず、観光の意義、重要性ですけれども、このグラフは今後の日本の人口の推移というものを示したものですが、皆さんはいろいろなところでご覧になっていると思います。今後、日本の人口はもうピークを越えまして、どんどん減っていくというような状況になっています。政府の方としましても――もともと私は情報通信政策に携わっておりましたけれども――、ICT の力を使ってイノベーションを起こして、生産性を上げていくというような話をしていますけれども、すぐに効果を出すというのもなかなか難しいような状況です。

2 つ目は都市化ですね。これは国連の資料を抜粋してきたものなんですけれども、先進国、途上国問わずに、今後、都市化が進んでくるというような状況が予想されております。先ほどの事例も踏まえますと、日本においても一極集中が進んでいるということで、2015 年の国政調査では、東京圏に人口の 30%が、もうすでに集まってきているというような状況になっています。

そのようなことを踏まえて、地方における定住人口がますます減ってくるというようななかで、地方創生をどうやって実現していくのかというところが非常に大きな課題となっています。その 1 つの方策として、観光によって地方にいろいろ訪ねてもらうと、国内外からの旅行者に訪れてもらうと、交流人口を拡大していくというようなことが、非常に重要になってくるというふうに考えております。

具体的に言いますと、これはもう経済的な側面だけを見たものなんですけれども、定住人口が 2016 年で 1 億 2,700 万人という状況で、1 人当たりの年間消費額は 124 万円となっています。そういうデータがあるなかで、旅行消費額を見た場合、訪日外国人旅行は、2016 年なんですけど 3.7 兆円で、国内旅行については 20.9 兆円の消費があるということ。

で、2016 年の旅行者数がインバウンドで 2,400 万人、国内については宿泊、日帰り合わせて 6 億 4,000 万人ぐらいというところで、これを割り算すると、海外の方が日本を訪れて 1 回で消費する額は 15 万円程度でして、日本ですと、宿泊を伴うと 1 人当たり 5 万円、日帰りですと 1 万 5,000 円というような状況となっています。

先ほど 1 人当たりの年間消費額が 124 万円と申しましたけれども、1 人の人口が減る分を補おうとしたら、インバウンドにおいては 15×8 で、大体 124 万円になるということで、外国人旅行者 8 人を交流人口として連れて来れば、経済的なところだけですけれども、まかなえると。

国内でも、宿泊を伴えば 25 人、日帰りですと 79 人連れて来なくちゃいけないというところなんですけれども、そういうなかで、インバウンドの方を連れてきた方が、正直なところ効率が良いというようなことが言えると思います。

特にインバウンドの、この 3.7 兆円ですね。もう昨年は 4 兆円を超えていますけれども、3.7 兆円という額は、外国人の方が日本に来てお金を落としてもらうというのは、サービスの輸出というふうに考えられることがあるんです。けれども、3.7 兆円という額をほかと比べますと、ちょうど半導体の電子部品の輸出額が 3.6 兆円ぐらいですので、もうすでにそれを超えている額ということです。インバウンドを観光で呼ぶというのは、それだけの経済効果があるというようなことが言える資料となっております。

続きまして、最近の統計をいくつかご紹介したいと思いますけれども、先ほど水野会長からもご案内がありました旅行者数ですね、インバウンドの。海外の方をさらに呼んで来ようといって、「ビジット・ジャパン」というキャンペーンを政府が始めました。小泉総理のときですけれども、2003 年です。そのときは 521 万人でした。目標 1,000 万人を達成しようと言って頑張ったんですけれども、2011 年のあの大震災でちょっと落ち込みはありましたが、実現したのが 2013 年。ここまでに 10 年、倍にするのに 10 年かかっています。

ところが、この 1,000 万人から倍増を実現するのに 3 年しかかかっていないということで、ここ数年で急速に伸びているというところが、ご覧になっていただければ分かるかと思います。

昨年のデータもちょうど出たばかりですけれども、2017 年は 2,869 万人、前年に比べて 20%近く伸びているような状況となっています。内訳はアジアの方が全体の 85%を占めているというところで、特にヨーロッパの方がなかなかまだ比率としては多くない状況です。いかにここを伸ばしていくかが重要になっていると思います。

あと、消費額についても 2017 年の速報値で 4.4 兆円になっています。この折れ線のところが 1 人当たりの消費額になっていまして、先ほど 2016 年は 15 万円と言いましたけれども、ちょうどピークですね。これは特に「爆買い」と言われたときですけれども、17 万円だったのが、逆に全体消費額が伸びているのに、1 人当たりはちょっと微減ですね。落ちているという状況になっています。

やはり中国ですね。中国、台湾、韓国が上位を占めているというような状況になっています。

次は国ごとを表した図になっていますけれども、やはり「爆買い」が一段落というような状況はあっても、まだ中国が多いということ。後はオーストラリア、イギリス、スペインと、中国以外はヨーロッパの方々の額が高いということです。

ちょっと注目していただきたいのが韓国ですね。7 万 1000 円しか使っていないと。韓国の方は距離が近いということもあって、LCC とかで気軽に来て、ちょっと買い物して帰っていくというようなことがありますので、それほど消費が伸びないということになっています。全体消費額が上がっているのに 1 人当たりは横ばいとなっているのは、先ほどの人

数で言うと、全体の 25%を占めている韓国の消費が少ないというようなことが、1つの要因にあるのではないかというふうに考えられます。

旅行消費額の内訳ですね。どういうものにお金を使っているのかというのを示した図です。平均は、全体が1人当たり 15 万円になっているんですが、娯楽サービス費については、3%の 5,000 円しか落としてくれていない。

いわゆるトレイルとか体験型もこちらに含まれるんですけれども、外国の方は 5,000 円ぐらいしか使っていないという状況です。

ちょっと下のオーストラリアを見ていただきたいんですけれども、オーストラリアの方は 1 万 4,000 円使っていると。これはなんでだろうと言うんですけれども、オーストラリアの方は冬場、スキーに来られるということで、リフト代がかなりここに入っているんじゃないか、というようなことが考えられています。

このような状況なんですが、全体の傾向ですけれども、先ほど水野会長からありましたとおり、団体旅行からもう個人旅行にシフトしていると。特にインバウンドの方ですね。2012 年に個人旅行が 61.8%だったのが、2017 年ではもう 75%、4 分の 3 の方がインバウンドで、個人手配になっています。旅行者数は先ほど申し上げたとおりです。

あと、「モノ消費」から「コト消費」とよく言われていますけれども、モノ消費ですね。なんらかの娯楽サービス費に対してお金を支払った人の割合についても、2012 年が 20.5%だったのが、2017 年は 35%に伸びているということで、全体的にはやはりモノ消費からコト消費というふうに移行していく傾向です。けれども、先ほどご覧いただいたとおり、娯楽サービス費が日本は少ない、と。

それはなぜなのだろうかということを考えておりまして、体験型の観光コンテンツ自体が少ない、もしくは外国の方に知られていないというようなことが今、課題となっているのではないかというふうに思われます。

で、これは OECD の資料ですけれども、各国の先ほどの旅行支出の割合です。ちょっと統計の取り方が違うので、数値、パーセントが、先ほどの観光庁の統計とは数字が異なってくるんですけれども、日本について娯楽サービス費が 1.1%しかないなか、ちょっとこれもお手元の資料をご覧いただければと思うんですけれども、アメリカは 10%となっています。フランスでも 8%ある、と。

インバウンドの数が多い、ほかの観光先進国と言われている所では、やはり娯楽サービス費の割合が日本に比べて多いという状況になっています。逆に言えば、これから日本が旅行消費を伸ばしていくというような目標を掲げるなかで、この娯楽サービス費を上げていくことが、伸びしろとなっていくんじゃないかというふうに考えております。

整理しますと、このような状況です。今、政府目標というものが「明日の日本を支える観光ビジョン」というものに明記されているんですけれども、オリンピックがある 2020 年には 4,000 万に持っていこう、というような目標を掲げています。

これは着実に増えているので、なんとか目標を達成できるのではないかというふうに考

えておりますけれども、旅行消費は 8 兆円の目標を掲げています。かなりチャレンジングな目標を掲げていると思います。昨年でちょうど 4 兆円を超えたばかりですから、2020 年までに倍近く上げていかなくちゃいけないということです。で、4,000 万人で 8 兆円ですから、1 人当たり 20 万円。先ほど 1 人当たり 15 万円程度と申し上げていますけれども、それをさらに 5 万円近く、1 人当たりの消費を上げていかなくちゃいけないというようなことが課題となっております。

で、どういうふうに対応するかですけれども、トレンドとして団体旅行から個人旅行へシフトしている状況ということですので、まず海外の方にどうやって情報発信をするか、プロモーションそのものを考えなくちゃいけないんじゃないか、ということです。

あと、ゴールデンルートですね。よく海外の方は、東京へ来て、箱根へ行って、富士山を見て、京都を見て、大阪から帰って行くというような方が非常に多いんですけれども、それをいかに地方に足を運んでもらうかということ、そういうコンテンツをどうやって作っていくのかということが、これからの大きな課題となっているということです。

さらに、1 人当たりの旅行消費額を上げていくためには、特に富裕層の方――私の感覚だとなかなか実感はないんですけれども――、1 年間で 1 億円以上を旅行に使える人というのが、世界中にはかなり多くいるなかで、そういう方をいかに取り込んでいくのかということ。特に日本で言われているのは、5 つ星ホテルが少な過ぎて、泊まる所がないので来ない、とか言う方が多いというふうに聞いております。

あと、先ほど申し上げましたモノ消費からコト消費への対応を、いかに考えていくのかということが、今、政府の中では議論となっているような状況です。

で、具体的に観光庁で何をやっているのかということですけれども、昨年の 10 月からこのような「楽しい国」の実現に向けた検討会で、観光資源活性化に関する検討会議というものを立ち上げました。要は海外の方にどのような体験型コンテンツを充実させていくのかということで、今、どのような課題があって、それに対してどういう方策を打ち出していくのかというようなことを検討しています。ちょうど今、3 月中旬に提言を取りまとめる予定で一生懸命やっているところなんですけれども、大体議論が出尽くしてきたというようなところです。ご覧のような方々にご参加いただいて、議論しているところです。

で、具体的にどういうテーマでやっているのかというと、メニューの充実ということで、野外アクティビティやアウトドアスポーツ――トレッキングも当然入ってきますけれども――、いかに日本の自然を活かして楽しんでもらうか、ということを充実させていく必要があるのではないかと考えます。

後は日本文化や生活体験の充実です。それと、ちょっとこれは日本に特別かもしれないですけれども、特にアジアの女性の方々は、日本の美容に対して非常に興味を持っている方が多いということで、ビューティーヘルスも挙げさせていただいております。そのほか東京オリンピックも見据えて、観戦型スポーツに関して、訪日外国人の方にも楽しんでもらえるような方策というのを考えていこうということです。

また、全体的な、これはインフラの部分に当たりますけれども、体験に対する満足度ですね。チケット購入が難しく、かなり海外の方から苦情というかクレームが多いと聞きます。特に日本の発券システムですが、コンビニに行って紙で出すというようなことが多いんですけれども、日本人にとっても非常に分かりにくい上、外国人にとってもほとんど入手不可能だ、と。しかも日本に来て、そんなことできるわけがないというようなことがあって、なかなかチケットが買えない、と。そして、インターネットでも、予約サイトが必ずしも英語対応していないとか、英語であっても分かりづらいとか、使えるクレジットカードでなかったりとか、いろいろ課題が多いと言われます。

それと、ホールや劇場空間の活用ですね。2020 年に向けて、老朽化したシアターとか、数そのものや座席数が非常に減っているなか、公共空間をもっと有効に活用していこうというようなことも、課題として挙げています。

そして、ナイトタイムの問題です。今、ナイトタイム・エコノミーと言っていますけれども、海外の方が日本の夜があまり面白くない、と。食事してカラオケすると、あまりやることないよね、と。東京でもそういうことがありますが、あと地方でも、温泉へ行かれる方が多いんですけれども、温泉に行くと食事が 6 時ぐらいに出てきて、食べるとお膳を下げて布団が敷かれる、と。で、もっと楽しみたいのにやることがない、というようなことを言われていますので、そういう海外の方にも楽しんでもらえるような夜のコンテンツを考える、とか。

あと逆に朝早い時間ですね。京都の二条城とか、朝早い観光ですね。夏場の涼しい時間帯を使って、空いている時間に、モーニングタイムを利用してもらう、と。モーニングタイムの活用というのは宿泊も伴いますので、そういう意味ではかなり経済的な効果もあるということです。

あと、新しい分野ですね。VR、AR とか言われていますけれども、特にオリンピックを想定して、いろいろな企業がこういう AR とか技術を使って、より面白く見せる工夫をしていますので、そういうのもどんどん使っていくべきじゃないか、というような話をしています。

今回のトレイルの関連で言いますと、特に野外アクティビティですが、どういう論点が出ているかということなんですけれども、まず人材ですね。特にガイドの方が少ないということ。今、ちょうどスキーシーズンで、かなりの海外の方が、北海道のニセコとか新潟、長野を訪れているんですけれども、海外の方に対応した人がなかなかいないという問題をどうするんだ、ということが挙げられています。

あと、ガイドとドライバーですね。特に地方に行くときですね。現状では法律でガイドとドライバーを兼務してはいけないというようなことがあって、それもちょっと課題ではないか、というようなことが言われています。

それと統計データ。まずマーケティングして、観光戦略を立てていくに当たって、基本となる統計データ、地域における統計データがまず不足しており、戦略が立てづらいとい

うような話が今、出ております。

海外を見てみますと、特にニュージーランドやアイスランド、これは野外アクティビティが非常に盛んな所ですけれども、非常にガイドビジネスが確立している、と。特にガイドに関しては、オフシーズンはホテルで働いていたり、賃金保証があったりとか。あと、ガイド料金全般に関してですけれども、日本よりかなり高い金額でガイドをしているということ。で、先ほどの検討会議の場でも指摘があったんですけれども、日本の料金設定はちょっと安過ぎないかというような指摘がありました。海外の方はもうちょっと高い料金設定でも、喜んで来てくれる方がかなり多い、と。その分、ちゃんとしたコンテンツに仕上げていく必要があるんですけれども、もっと取っていくべきじゃないか、というような話でした。

あと、アウトドアガイド、人材育成ですね。特にニュージーランドとかは専門学校があったり、大学でもコースがあったりするような状況がある、と。で、人材の供給もちゃんと行われているというのが、海外の事例として紹介されておりました。

そのようななかで、スポーツと観光、アウトドアスポーツというものを営まれた場合、どういうことが言えるかということなんですけれども、特に日本は非常に自然が豊かで、四季折々違う表情を見せる。この恵まれた自然環境というものをアウトドアスポーツに活かすべきではないか、ということ。アウトドアスポーツだけではなくて、地域を訪れて来た方に、その地域の食事とか文化といった観光資源を組み合わせて、体験型コンテンツを充実させることが重要ということ。特にそのスポーツだけでは吸引力がないけれども、その地域の食事とか文化も一緒に組み合わせて提供することによって、宿泊も伴いますし、その地域にお金が落ちるというようなことが考えられます。

具体的にはお手元の資料をちょっとご参照しながら見ていただければと思いますけれども、これはスポーツ庁が最近取った海外の方のアンケート結果ですね。どういうことをするスポーツをしてみたいかという質問に対して、中国とか韓国、アメリカ、タイ、オーストラリアの方々からアンケートを取ったものの集計です。特にその中でもスノースポーツとかトレッキング、ウォーキングというものが、ほかのスポーツよりも非常に高い。各国総じて 3 割程度は「してみたい」という意向を持っているという状況です。海外の方が日本に来て、こういうことをやってみたいという思いがあるということです。

あと、こちらは観光庁で取った、日本に滞在した方に対しての質問です。空港で「今回、日本に来たときにどういうことをしましたか」というようなことをアンケートしたものなんですけれども、その中の自然・景勝地観光という項目を 75%の方が体験されているということで、非常に人気があるということですね。日本食とかショッピング、繁華街に次ぐ高いニーズがあるということです。

この自然・景勝地観光をした方の国別の割合ですが、やはりイギリスとかスペイン、オーストラリア、イタリアとか、非常にヨーロッパの方は――中国の方も参加されていますけれども――、こういう自然の中でウォーキングとかトレッキングをしてみたいという意

向を持っている方が多いということが、ご覧いただければお分かりになるかと思います。

次は観光庁の取り組みですが、観光庁で具体的にどういう事業をやっているかということなんですけれども、こちらは現在実施中で、ちょうど今、公募をかけているところです。「テーマ別観光による地方誘客事業」と申しまして、具体的に何かというと、いろいろな地域で、同じテーマで観光振興がかかっているものがあります。例えば、これは採択している事例なんですけれども、エコツーリズムです。あとは、全国各地にある酒蔵ですね。自分たちの地域を盛り上げていこうとしている地域がたくさんあるんですけれども、バラバラにやってもなかなか目に留まりにくいというような状況がありますので、そういう同じテーマで観光振興を図る地域が一緒に手を組んで、一緒にプロモーションしていくというようなことで、一緒に連絡協議会とかネットワーク、販売戦略とかモニター、そういう企画をすることに対して支援してあげましょう、というような事業です。

で、具体的に今、スポーツ関係で言いますと、継続して昨年採択された新規の中で、サイクル・ツーリズムと全国ご当地マラソンというのがあります。全国各地にマラソン大会がありますけれども、バラバラでやるよりは一緒になってプロモーションとかした方が、非常に目に留まりやすいというようなことで、取り上げさせていただいております。

そのサイクル・ツーリズムとマラソンについては、具体的にお手元の資料にも一枚紙でそれぞれ付けておりますけれども、サイクル・ツーリズムに関しては、こういう外国人のモニターツアーとかの企画をしていますし、こういうことに関してもご支援できるということですので、もしご関心があれば、ちょっと調べていただければと思います。

あと、こちらはスポーツ庁における取り組みなんですけれども、スポーツ庁でも今、スポーツ・ツーリズム・ムーブメントと言いまして、「する」「見る」スポーツに関して、国民的機運を醸成していきましょうというようなことを今、非常に熱心に取り組んでいるところです。

アウトドアスポーツに関して、スポーツ庁はかなり力を入れて取り組んでいこうと言っておりまして、特に自然環境を活かしたアウトドアスポーツで需要を喚起していきましょう、というようなテーマを今、取り上げております。具体的には、実際にかなりの競技会を開いているとありますけれども、あと、プロモーションも非常に熱心にやられているという状況です。

これはスポーツ庁のサイト、アソビューasoview と連携してやっている事業なんですけれども、いろいろな、そういう日本におけるアウトドアスポーツの紹介を行っているということです。特に海外の人の目にも留まりやすいアソビューasoview というような媒体を使って、こういうアウトドアスポーツの楽しさとか、いろいろなものがあるんだよ、ということを紹介しています。リオ・オリンピックに出たカヌーの羽根田さんという方を起用して宣伝をしていますので、こういう場をロングトレイルのプロモーションに使っていただくことも一案かな、と考えております。

あと、こちらはトレイルとインバウンドに関することです。これは国東半島峯道ロング

トレイルからいただいた資料ですけれども、非常に人気があるとのことです。で、海外の方も参加しているような状況で、24 年は 180 名だったのが、28 年に 1,600 名まで増えているそうです。これはたぶん海外の方が多いんだと思いますけれども、参加者が非常に増えており、人気が出てきているという状況が見られます。

ただ課題としては、先ほどの検討会議の中でも指摘があったんですけれども、ガイドが少ない、外国語で案内できる人がいない、受け入れ態勢が整っていないということで、外国人対応にまで全然手が回らないというような状況が、国東半島のトレイルでは課題として挙がっています。

たぶんこれは、トレイルに限らず全国各地の野外アクティビティについて、同じような課題があるんだろうなと思います。インバウンドを受け入れるためには、ガイドという存在が非常に重要になってくると、関係者の皆さんが認識し始めているという状況です。

ちょっと駆け足になりましたけれども、最後にまとめとして、今後のそういうコンテンツ醸成に向けた考え方について述べてみたいと思います。これはトレイルに限らず、全体的なコンテンツに関して共通するものだと思いますけれども、まずはちょっと海外の方に目に触れていただくということ。先ほど申し上げたとおり、個人旅行が非常に増えていますので、旅行会社を通じてというよりは、海外の方がよく目にする媒体に、いかにそういうプロモーションをかけていくかということ。

あと、マーケティングでも出てくるんですけれども、関心が全くない方にそういう不要な情報を送ってもなんら響かないので、そのあたりの選別が重要かと思います。例えばトレイルだったら、先ほどのアンケート調査ではヨーロッパの人が非常に関心があるということですが、ヨーロッパの方のどういう層にこういうプロモーションをかけていくのがいいか、検討する必要があるでしょう。目に触れて、認知してもらって、行きたいと思わせる――いかにそういう魅力的なプロモーションをかけていくか、ということですね。

あと、実際に行ってみよう、行ってみたいと思わせても、なかなか予約ができないとか、情報を取りたくても自分たちの欲しい情報が得られないとか、日本語しかないので、自分たちの言葉で情報が得られないなど、課題は多いですね。プロモーションと予約システム、そして、先ほど申し上げましたように、やはりガイドですね。受け入れ環境をいかに充実させていくかということが今後の課題となるでしょう。

で、非常に満足度の高い体験をしていただくと、リピートに繋がってくるということです。そこで、観光庁としましても「グローバル・キャンペーン」というのを始めまして、まず目に触れていただいて、日本というのはいろいろ海外旅行をする人が多いんですけれども、日本が訪問先として認知されていない人をいかに掘り起こしていくかというようなことを今、一生懸命取り組んでおります。後は体験型コンテンツの充実というのを先ほどの検討会議で進めていまして、それを実際に官民の方といかに取り組んでいくかというのをまさに今、観光庁内で検討しているところです。

駆け足になりましたが、私の話はこれで終わります。3 項以降は、先ほど申し上げました

ビジョンについて、政府の中でも総理をヘッドとした会議で、あのような目標を定めているということです。また、官房長官をヘッドとした会議も毎月のように開かれており、具体的な方策としては、特に鉄道の無料 Wi-Fi 化というのは、海外の方から非常に不満が多いということで、新幹線でもかなり急速に進んできていると思います。こういうことも、この会議で指摘されたことが実行に移されているというような状況ですので、ご関心があれば、ホームページをちょっとご覧いただくと最新の議論の動向等を見ることができます。

駆け足になりましたが、以上になります。ご清聴ありがとうございました。

パネルディスカッション「ロングトレイルにおけるインバウンドへの課題」

ルーカス B.B.（Lucas Badtke-Berkow：PAPERSKY 編集長）
近藤 謙司（国際山岳ガイド）
高野 賢一（特定非営利活動法人 信越トレイルクラブ事務局長）
節田 重節（特定非営利活動法人 日本ロングトレイル協会会長）
コーディネーター　中村 達（特定非営利活動法人 日本ロングトレイル協会代表理事、安藤百福センター センター長）

○中村：皆さん、こんにちは。お疲れだと思うんですけど、もう少しお付き合いをいただきたいと思います。

このディスカッションは今回、4 名の皆さんに来ていただきました。では、順番に簡単な自己紹介をしてもらいましょうかね。

一番向かって右端、信越トレイルクラブの事務局長・高野さんから。自己紹介と一緒に

PR もいいですよ。
○高野：皆さん、こんにちは。初めましてという方と、よく顔なじみの方も多くいらっしゃいますが、日ごろからご協力いただきまして、ありがとうございます。また、お招きいただきまして、ありがとうございます。信越トレイルクラブの高野です。どうぞよろしくお願いします。

私は今日、ここから近い飯山市という所から来ていますので、車で 1 時間ちょっとぐらいでしょうかね。1 時間半までかからないくらい、もう近距離です。信越トレイルクラブの事務局をやっておりますが、今、私は勤め先が新幹線の飯山駅の駅舎内ですので、新幹線のすぐそばで働いております。

ご存じの方も多いかと思いますが、全長 80km、新潟と長野の県境を行く信越トレイルは、全線開通してちょうど 10 年がたったというところです。数年前と比べるとまだ絶対数は少ないんですが、インバウンドの方がだいぶ増えてきまして、そのへんのお話も今日できればと思っていますので、よろしくお願いいたします。
○中村：次はご存じの方も多いかなと思うんですけど、国際山岳ガイドの近藤さんです。で、彼の言葉を借りますと、日本ではもうからへんから海外に行っているんだそうです。
○近藤：近藤です、よろしくお願いします。すごく目立ってしまうんですけど、エベレストの山頂に登るガイドをしています。これが終わったら 4 月からまた行きますけれども、今までで 13 回目になります。私自身は 7 回目の登頂になるかと思うんですけれども、それがちょっと目立っていますね。

日本でトレイルのご案内をしたりもします。いろいろなことをやって、日本の良さをアピールはしたいんですけれども、インバウンドの方を受けるというよりは、なんとなく日本の方を海外にお連れしちゃって、日本に落とすべきお金を海外に持っていっちゃってるタイプですね。そんな男ですが、よろしくお願いします。
○中村：次は以前、2 年ぐらい前にもお話しいただいたのですが、今日はパネラーで来てもらいました。彼は見てのとおり外国の方です。『PAPERSKY』という、アウトドア誌の編集長、エディターです。じゃあ、ルーカスさん自己紹介をお願いします。
○ルーカス：皆さんこんにちは。今日は朝から話を聞いていて、すごくわくわくしています。僕は旅の雑誌『PAPERSKY』を 17～18 年ぐらいずっと作っているんですけど、自分でも日本の古い街道を 13 年ぐらい、ずっとあちこち歩いて、たぶん 20 ヶ所近くスルーで歩いています。ひょっとすると、もっといっぱい歩いているかも知れません。いつも「ルーカスって何してるの？」と周りの人が言ったりするけど、今日ここに呼ばれて、自分の出番がやっと来たな、と喜んでいます。これは観光庁も含めて、日本の魅力を正しくアピールするいいチャンスだと思います。日本の自然とか文化とか、うまく海外の皆に伝えていくことで何か役に立てればいいな、と思っています。よろしくお願いします。
○中村：次はもうご存じだと思うんですけど節田重節さんです。ロングトレイル協会の会長をしていただいております。要は簡単に言えば、山ヤです。日本山岳会の元副会長です。

○節田：どうも皆さん、こんにちは。今さらですが、中村さんからありましたように、基本的に、いわゆる山ヤです――中村さんもそうですけれども――。それが 50 過ぎになったら高い山もだんだん難しくなってきたので、せめて裾野でも歩いてみようかということで、世界各国、結構いろいろな所を歩いてまいりました。そんな経験も含めて、いろいろ述べさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。
○中村：今日、いわゆるロングトレイルとインバウンドについて、感じていること、やりたいこと、失敗談や抱えている問題も含めて、いろいろ自由に話していただこうと思います。あまり結論めいたものは期待していませんから、とりあえず自由におしゃべりしてください、ということで今日来ていただきました。
　それでは、インバウンドだからまずはルーカスさん。彼は日本の古道などを結構歩いていて、それを自分の雑誌に書いておられます。最近、どこを歩きました？
○ルーカス：一番最近歩いたのは木曽路です。全部正しく歩くと 120km になる中山道の一部です。
○中村：何が楽しい？
○ルーカス：それが皆、なかなか理解してくれなくて……。さっきの 2 つのスピーチにいろいろキーワードが出ていたと思うけど、まず日本の文化を知ることがすごく面白い。やっぱり日本が好きな人だったら、ここはこういう人が訪ねてきたとか、歴史的にはこういう所だったとか、最近の話でも、こういう人がこの町に住んでいて、この人が生まれ出た場所だとか、その道を歩くとどんどんそんな情報が耳に入ってくること。つまり文化が入ってくること、やっぱりそれだね。
　あと日本食。地域によってすごく変わってくるから。トレイルによって、季節によって変化があり、食べるものすべてが楽しいな。
　そして日本人、人に会えること。いろいろな旅の仕方があるけど、やっぱり歩くのが好きだと、皆ひと声掛けてくれるし、人とふれあえることが、またとても楽しいな。農家もあちこちいっぱいあって、「このミカン、食べていかないか？」なんて声掛けられて……。
　それと、ここに来ている人はたぶん皆さん、歩くのが好きな人がいっぱいいるから、単純に歩くことも、とてもわくわくするね。僕にとってこの 4 つぐらいが一番の楽しみになっているんじゃないかな。
○中村：ルーカスさんの話を聞いていてもそうですし、さっきのガレオさんの話を聞いてもそうなんですけど、我々日本人と外国人の方だと、どうも視点が違うんですね。感性、感覚が違う。だから、例えばホームページを作っても、日本人が作る英語では駄目なんや、という意見があります。というのは、いろいろなものに対して、あんまりときめかない、わくわくしないということがありがちですね。
○ルーカス：大体そのパターン。
○中村：日本のトレイルの中で、歴史のあるのがたぶん信越トレイルかなと思うんですが、高野さんどうですか、そのへんは。外国人対応としてトレイルのインフォメーションの仕

方とか、いろいろと方法やバリエーションがあるでしょう。そのへんはいかがです？　外国人が一番多いトレイルだと思うんだけど、今、インバウンド対応に何をやっていますか。
〇高野：そうは言っても、絶対数は本当に少ないんですけど、事務局に問い合わせがあるだけで年間 200 人はいないかな、という感じですね。ただ、問い合わせのない人も結構歩いていますので、それがどのへんまでいってるか分かりませんが、せいぜいそれぐらいの数かなと思っています。

ルーカスさんも来ちゃったんですが、だいぶ前から自分たちで YouTube で英語とかほかの言語で情報を流したりとか、以前から英語ページを作ったりとか、パンフレットも作ったりとかやってるんですよ。たぶんつまらないものができているなと思いますが……。

で、結局、来た方が発信してくださっているというのが現況で、大体、強力に発信している方と同じパターンで歩きたいという人が、ここ最近ずっと多くて。ですので、自分たちの発信したものは、それは情報としては見るんだけど、情報としてだけ見ていて、人を呼んでくる動機ということになると、やっぱり来た方が発信してくれている影響の方が強いかなと思います。
〇中村：実は、これはぶっちゃけた話なんですけど、南アフリカからガレオさんが来てくれるので、皆でどんなお土産にしようかといって、ちょっと相談したんですよ。で、結論は日本人形はやめよう、もらっても置く所困る、と言うて。そういう感性というか、うまく言えませんが、日本的と思い込んでいるものが結構あるんじゃないかな、と僕は思うんだけど……。

ちょっとそれは置いておいて。近藤さんとは夏、アルプスに行ったら必ずどこかでお会いしますよね。シャモニに行ってもツェルマットに行っても（笑）。
〇近藤：仕事してますよ、ちゃんと（笑）。
〇中村：それで、エベレストももう営業登山なんですね。お客さんを山頂へ連れて行く。彼に「これから日本もロングトレイルやから、日本で外国人を相手にしたらどう？」というふうに聞いたら、「それはもう商売にならへん」ということを聞いたのが、すごく印象に残っているんです。
〇近藤：そうですね。すごく気になるのは、ちょっと特別な技術が必要なときに、ガイドの需要がやっぱり出てくるんですよね。で、僕らはロープを使ったり、ピッケルを使ったりとか、一般の人では行けない所にお連れしたりとかするのが、仕事上は多いわけですよね。

ところが、トレイルをご案内するときには、それらを駆使する必要がなくなってくるので、一般的な安全管理と、後はエンターテイナーに徹するとか、そういう方法でガイディングをします。また、自然ガイドをしていくとなると、自然ガイドがお得意な方たちはものすごくたくさんいるので、僕のにわか知識だと「もう、エベレストに行ってても、この木の名前を知らないじゃん」とか言われちゃうので、そこらへんがちょっと難しいかな、という気はしていますね。

○中村：ここでちょっとトレイルについて私の方から少しお話をしますけど、ガイディングをして欲しいってよく言われるんですよ。やっぱり外国の方というのは、すごく勉強して来るんですよ。例えば、この植生はどうだとか、それがバラだけではあかんわけですよ。どういうバラなのかで説明しなきゃいけない。ところが、山ヤ的な話になるわけですが、高山植物で知ってるのは、せいぜいコマクサかハクサンフウロぐらいですよ。それでは駄目なんですよね、近藤さん。
○近藤：だと思いますね。もう少し言うと、これは北海道の何々の亜種で、実はこの地域にはもともとなかったんです、とかいうぐらいの説明ができたりとか、どこどこには同じ植物が生えているんですよとか、そこと植生が近いですね、というぐらいまで自然ガイドさんは勉強していますので、そうなると、ちょっと僕的には自然ガイドさんたちに勝てません。
○中村：エベレストに 7 回登ったけど、できないんですよね（笑）。
○近藤：そうですね（笑）。
○中村：だからそのへんに、いわゆる日本のガイド、トレイルガイドの本質があるような気がします。
○近藤：あと、もともとガイドがいなくても歩ける場所じゃないですか。どなたでも歩ける場所なので、ガイドが一緒じゃなくても楽しめる場所だと思うんですよね。それだけに、一般的には需要がそんなに高くないんじゃないかな、という気はしていますね。
　ただ僕らが、例えばエベレストのベースキャンプまで行く間に、エベレスト街道というのを歩きますが、10 日間ぐらいかかります。で、その 10 日間ぐらい歩いているなかで、やっぱり現地の人たちの文化とか宗教とか、いろいろな民族とか、あと植生とか、いろいろ総合的なものを楽しみながら山道を歩いていきます。で、健康管理もしなくちゃいけません。特に高山病ですね、高山病の管理もして、医者みたいなことをやったり、看護師みたいなことをやったり、コックみたいなことをやったり、漫才師みたいなことをやったり、いろいろなことを全部やりながら一緒に移動しているのが、僕はすごく楽しいんですよね。だから、それと全く同じものを日本で展開して、海外の人にアピールしてあげれば、なんとなく同じようなことができるのかな、というふうにも思うんですよ。
○中村：節田さんは元山と溪谷社の役員で、『山と溪谷』誌の編集長もしていましたね。だからずっと山の本を作ってきたわけです。で今も、こんなん言うたら怒られるけど、後期高齢者なんですけど、結構登ったり歩いたりしているんですよ。パブリッシャーとしてもそうやし、専門家としても山をよく見ておられますが、日本の山に来ているインバウンドの人たちって、どういうふうに映っていますか。
○節田：そうですね、まだ目に付くというほどではないと思うんですけど、一番たくさん来ているのは韓国の方ですね。特に北アルプスなんかを歩いていますと、日本人と相通じるところがあるんですけれども、非常にパターン化しているんですね。槍ヶ岳から穂高連峰を登って上高地へ下りる、と。このゴールデンルートに、もう次々とツアー会社やガイ

ドがお客さんを送り込んでいます。それ以外の所へは、あまり行ってないんですね。で、初めて中央アルプスへ行ったかなと思ったら、遭難しちゃったりしています。

いずれにせよ、立山黒部アルペンルートなどを見ても、基本的に増えていることは間違いないと思います。それら以外の人たち、アルプスは無理だけど、日本の自然の中を歩いてみたいという人は、信越トレイルをはじめ、これからトレイルに入ってきてくれると思うんですけれど。

あと、一番私が聞いて面白い現象だなと思ったのは、飛騨の高山ですね。とにかく外国人が多いんです。古い街並みなどを歩いているのはもちろん分かるんですけど、隣の飛騨古川まで脚を延ばして、自転車でもって田舎体験をしたりしています。これには仕掛け人がいるんですが、そういう生きた日本人の生活や文化をこの目で見てみたいということで、そちらの方がやはり人気が高いみたいですね。

ですから、彼らは日本人が考えるいわゆる観光地と違う所に着目して、自分たちなりに楽しんでいるんじゃないかと思いますので、先ほど話にありましたように個人型旅行の方が多くなったというのは、そういう傾向の表れだと思いますね。

〇中村：ご存じだと思うんですが、1800 年代の終わりごろ、明治 11 年ぐらいかな、イザベラ・バードというイギリスの旅行家が日本に来て、東京から日光へ行って、新潟、山形、秋田と歩いて北海道まで歩きました。そして『日本奥地紀行』という旅行記を書いて、それがヨーロッパで売れたそうです。

でも、そこには日本って素晴らしいと書いてあるんだけど、外国人の見る目と日本人の目線とは、すごい落差を感じるんですね。そういう意味では、ルーカスさんは日本語をしゃべったり、外国人だし、あちこち回ってみて、日本人の受け入れ先の外国人への対応ってどうですか。

〇ルーカス：ロングトレイルとか、皆いろいろな言葉を使っていると思うけど、日本には、雑誌の編集長をしたときに歩いたハイキング・トレイルもいっぱいあるし、トレイルという文化は日本人にとって、めっちゃ新しい文化ではないね。100 年たっているかどうか分からないけど、割と古くからある文化だと思います。だから、そういう歴史のある道を歩くことが、僕の中では日本で一番面白いことだと思っています。さっき動物のトレイルの話もあったけど、同じようにもう 400～500 年くらいも前に人が歩いていた街道に魅力を感じますね。もちろん、信越トレイルとか、さっき話の出た国東半島とか、そういう新しい、ちょっと長く歩く人のためのトレイルが、ぽつぽつでき上がっているというのは嬉しいですね。

例えば鯖街道というのがありますけど、小浜から京都まで続く道ですが、皆でかいサバを 30 尾ぐらい背中に背負って歩いて行くという、そういうようなトレイルも日本にはあります。で、本当にそこを歩いてみると、さっき言ったように、歴史もあるし、今でもそのサバを食べられるし、京都に着いたら、その歴史がさらに詳しく分かってくるし、わくわくするね。

ところが、日本人は本当に小さなスポットに皆バスで入って、10 分ぐらいかな、2km あるかどうかぐらいを歩いて見物して帰るみたいな、そういう旅のスタイルが多いね。でも、鯖街道というトレイルは 80km あって、素晴らしい山だったり村だったり、いろいろな所を通るから、そこが私には大変楽しい。やっぱり人に出会えることが、本当に旅の一番の楽しみだと思います。また行きたくなる。またあそこの旅館行きたいなとか、またあの味を食べたいなとか。日本人は、特に地方に行くと皆がものすごく優しいね。

僕も『PAPERSKY』という旅の本を作っているから、もちろんその本の中で日本の文化も紹介するけど、結構いろいろ海外にも行って、一生懸命日本についていつも紹介しています。いろいろな国に行くけど、ここまで安全で、優しく受け入れてくれる国はないと思うね。

また、先ほど話した街道歩きですが、ほかの国には日本のような歴史がないから、たぶん街道がトレイルとして挙がらないと思います。日本は歴史があって、なおかつ安全性が高いから、安心して楽しく歩けることがまた魅力ですね。

〇中村：ルーカスさんがあちこちへ行くでしょ。そしたら、「あ、ガイジンや」とか言われません？

〇ルーカス：うん、よく言われるけど、さっき言ったように、ミカンを渡してくれたりとか、今、スイカできたから食べましょうとか、そういう話もよくあります。外国人だからというのではなく、僕が歩いて旅しているからじゃないかと思います。もちろん男じゃなかったら、もっといい対応になるんじゃないかな。逆に日本人ももっと歩いたら面白いと思いますよ。

〇中村：ルーカスさんはそういう情報誌を作っていて、フィーリングでいいんだけど、日本に来る外国人で歩く人が増えると思いますか？

〇ルーカス：情報をうまく伝えられれば、確実に増えると思う。皆歩きたい気持ちは満々なんだけど、そこを歩いたら何があるかとか、何が面白いかとか、それが分からないから行けないんです。

〇中村：伝え方が必要だね。

〇ルーカス：そう。だからさっき言ったようにあちこち歩いているけど、僕もほぼ外国人を見ていない。唯一見ているのが木曽路です。理由が分からなかったのですが、「うわっ、初めて自分以外の外国人が歩いている！」って、自分でもびっくりしました。自分以外の外国人がこういう街道歩きを楽しんでいるのを目にしたのは、初めてだったと思います。そんな状態なので宿が取れない。だから、たぶん 1 年先ぐらいに木曽路に行こうと思ったら、皆さん宿が取れないと思いますよ。

〇中村：それ、どういう意味？

〇ルーカス：外国人、避けている。

〇中村：避けている？

〇ルーカス：そう。木曽路に行きたいと思っても、1 年先までもう予約が入っているから。

日本人も泊まれない。そのぐらいテンションが上がってきているということです。
○中村：日本のロングトレイルはまだ、空いてると思うんですけど……。
　今、ルーカスさんが言ったのは、要はインフォメーションの出し方にちょっと問題があるということですが、じゃあ、高野さん、信越トレイルはたぶん日本のトレイルの中で外国の方が一番来ていると思うんですが、問い合わせに対してどういう情報提供の態勢をとっていますか。
○高野：見ていただければ分かるんですけど、基本的なアクセスとか、トレイルの概要みたいなところとかは説明しているんですけど、それ以上あまり細かい説明はできていないと思いますね。だから、ほぼきっかけだけ。来た方に聞くと、国内では、いわゆるトレイルを歩こうと思ったときに、映像情報は少ないそうです。で、たどり着いたのが信越トレイルだったという人が結構いるんですが、情報量が薄いと思います。
　今、もう本当に毎日毎日、英語のメールが事務局に入ってきていますが、やっぱり個別に対応して、そこでちょっと細かい情報を伝えていくようにしています。
○中村：やっぱりインフォメーションが足りない、情報量が足りない、アウトプットが不足している。それが問題ですね。
○高野：そこを全部自分たちでやるのも結構大変な作業で、先ほど言ったみたいに、出したところで結構つまらない情報が出ちゃったりするところが問題ですね。やっぱり地道に、FIT（個人手配の海外旅行）を含めて海外の方が来て、その方々が情報を発信してくれる積み上げが大事かな、と思います。
○中村：インフォメーションの出し方は難しいよね。近藤さんはガイドをやっていて、アルプスと日本とを往復しているんだけど、向こうへ行って見てくると、そういう日本のフィールドからの情報量について、どういうふうに感じます？
○近藤：たぶん、今でも結構頑張っていると思うんですよ。ただ、いわゆる観光地の情報はずいぶん出ていると思うんですけど、このアウトドアスポーツの分野や自然に関してなど、そういうものをアピールするというところまではまだ達していないと思います。
「日本はヒストリック・シティーがいっぱいあるんでしょ」と言われるだけで、「ネイチャーがいっぱいあるんでしょ」とまではいかない。「コンクリートの国でしょ」とか、「ビルディングがいっぱいあるんでしょ」とかいうイメージがあるんですね。「いやいや、日本は国土の 7 割近くが山岳地帯で、オーストリアと一緒だよ。スイスが 6 割ぐらいだから、スイスよりも多いんだよ。だから日本は海に囲まれながら山にも恵まれ、ものすごく自然が豊かな国なんだよ」とアピールしたいと思いますね。
　僕は実は、全然受け入れをしていないんですが、それでも外国の方から、やっぱり同じように問い合わせがずいぶん来て、ヨーロッパの人は特にそうですけれども、やっぱりインターナショナル・ガイドじゃないと信頼できないと言って、直接メールがわあっと来るんです。ただ、やっぱりそれは僕が受ける必要はないので、ドメスティックのガイドの人たちに全部振っています。その問い合わせの内容を聞いてみると、大体一緒なんですよ、

トムラウシ山に行きたいとか。で、僕は東京にいるので、僕が行くとすごい金額掛かるから、北海道のガイドを紹介するよって。
○中村：高いんですか。
○近藤：いやいや、僕が個人的に高いんじゃなくて、飛行機代とかそういうものが掛かるよ、という意味です。
　で、そういうことがあるので、現地のガイドを紹介するよ、英語をしゃべれるのもいるよ、というような感じで紹介をしていくんですけれども、やっぱりSNSとかどこからか入っている情報なんですね。
　で皆、トムラウシ山に行きたいとか、ニセコへ滑りに行きたいとか、今は熊野川の人気が上がってきたりとか、そういう“はやりもの”みたいなところがたくさんあって、それらを上手に作ってあげればいいと思います。そのコミュニティみたいなものができ上がれば、結構伝わっていくのかな、という気がするんですよね。
　あと、全然トレイルと関係ない話かもしれないけれども、さっきルーカスさんが言ってましたけれども、日本の人って、外国の方と目と目が合うとニコッとするよね。ですけど、日本人同士ってどうです？　あんまりニコッとしないじゃないですか。で、僕は海外に行くとき、目と目が合ったら必ず笑うんですよ。
○中村：営業じゃなくて（笑）。
○近藤：営業じゃないです、そんな営業の塊みたいな人間じゃないですよ、僕は（笑）。なんとなく癖なんでね。だから、ちょっと皆さんと目が合うと、僕はニコッとしていると思うんですよ。ちょっと気持ち悪いなと思うかもしれないんですけれども……。
　あなたに敵対心は持っていませんよ、という代表的なポーズで、初めのスマイルがやっぱり一番大切だと思うんですけど。外国の方だと、ルーカスさんだったら顔がすぐ分かるからニコッとなりますけれども、韓国の方とか中国の方は、パッと見て分からないときがありますよね。で、そういうときに、なんとなくニコッとしづらいとか、挨拶しづらいとか、何語で挨拶すればいいんだろうかとか、躊躇があったりして、親切にできない日本人が多いのかな、という気がしますね。
○中村：いつの間にか日本文化論になってきました。
○近藤：そうだと思います。
○中村：節田さん、そういう意味ではパブリッシャーに責任はありませんか？　だって、日本の本や地図には英語表記がほとんどないんですね。今日、観光庁の方が来られていますが、日本のシステムに外国語に対する配慮が本当に欠けていると思います。節田さん、どう責任取ります（笑）？
○節田：そうですね、ネパール、スイス、オーストリア、カナダ、アメリカ、ニュージーランドと、現役のときに、これだけハイキング・ガイドブックを作りました。言ってしまえば、自分が行きたかったから作ったんですね。ただし、地名や山名の現地語併記以外、もちろん全部日本語です。それとは逆のことになりますが、今度は受け入れ側として、ぜ

ひそれをやっていただきたいと思います。特に地図ですね。国土地理院の地図は、まだ英語が併記されていないですから。

私は海外に行ったとき、必ずまず本屋か土産物屋へ行って、自分が歩きたい所の 2 万 5000 分の 1 の地図を全部買って、それからコースを選んでいつも歩いています。特にアルプスなんかは、もうクレバスの一個一個まで書いてあるような、素晴らしい地図がありますね。それさえあれば、どこでも歩けます。

特にドイツ語圏のスイスやオーストリアなんかは、指導標が完璧に整備されています。地図にコースナンバーが入っていて、そのコースナンバーが指導標や岩に書かれているので、それを選んでいけばまず間違えることがないと。そういうシステムが非常にうまくでき上がっていると思います。日本でもまず大事なのは、基本図である 2 万 5000 の地図に、主要な地名だけでも英文を併記していくのが喫緊の課題と言えましょう。

〇中村：要するに、情報のシステムが非常にまずいということですね。

話は変わりますけど、今、京都は外国人が非常に多いんです。京都で人気がある市場、いわゆる「京の台所」ですが、昔は惣菜屋とか八百屋とか魚屋さんとかがたくさんあって、京都の人はそこへ買い物に行ったんです。ところが今、外国人が多くなって、例えばひと皿とか、ひと串とか……ビックリです。あまりの変わりように驚きです。

で、高野さんは外国人が来られたとき、どういう情報というか、サービスというか、例えばここを見て欲しい、これを見に来て欲しいなどというのは、何をどういうふうにされています？　ちょっと難しいかな。

〇高野：よく分かります。例えばカナダのヤムナスカ・マウンテン・ツアーという会社があるんですよ。そこは毎年連れて来てくれます。

１つはどうやってこの名も知れぬ信越トレイルに人を連れて来るかというと、信越トレイルの自然だけではなくて、やっぱりその周辺の峠の文化とか、そういったところをかなり評価しています。それから信越トレイルを造った理念とか趣旨とか、そういったところを旅行会社も大事にしてくださって、そういうトレイル造りをやってくれたところを一緒に見に行こうよ、みたいな感じで売れているんですね。

彼らは、自然はもちろん楽しまれているんですけど、結構、すごく練りに練ったツアーを組まれているんです。峠の歴史をガイドでお話するじゃないですか、そうすると、塩の道とか、上杉謙信が送った塩とか、いろいろな塩の話が出てきます。そして、その日は下りたら天ぷら料理で、地元の内山和紙という和紙を敷いて天ぷらを載せ、地元の塩で食べるとかします。天気が悪かったら代替案で、地元は仏壇の町なので彫金体験をするとか、和紙作り体験をするとか、そういった文化体験もトレイル歩き以上にすごく考えられているくらいです。

去年は台風で半分も歩けなかったツアーでしたが、皆さん大満足で、京都行かなくてもいいじゃん、って。あ、京都の方いらっしゃいますね、すみません（笑）。そうおっしゃっているんですよ。

我々のようなローカルな地域でも、海外の方はやっぱり文化体験が半分だと思うので、やりようによってはちゃんと人を呼んで来れるので、そういうところも推していけばいいかな、というふうに思っています。

それらの情報は結構大事かなと思いますし、地域にはお金が落ちているんですね。トレイル上というのはなかなかお金が落ちないんですけど、泊まり以外にそういった所で結構楽しめますし、それがほかの季節にも繋がったりします。

○中村：これはインバウンドと直接関係ないんですけど、例えば、さっきガレオさんが説明したアドベンチャー・トラベル。アメリカではもう 20 年ないし 25 年ぐらい前から、アドベンチャー・トラベルって当たり前の話なんですね。彼が「アドベンチャー」と言ったとき、日本の感覚では皆「あれっ？」と感じたと思うんですけど、違うんです、アメリカのマーケットでは。アドベンチャー・トラベルというのは当たり前の話で、至って普通の話なんですね。

何かというと、トレイルをちょっと歩く、ちょっと散歩に行く、こういうのがすべてアドベンチャー・トラベルなんですね。そういうようなマーケットがしっかり確率している。実はトレイルもそういうものだと思うんですね。

何が言いたいかというと、ライフスタイルがしっかり確立していくと、そういう言葉も必然的に使われていくだろうと、そういう感じを僕はものすごく持っています。

近藤さん、ガイドをしていて、やっぱりその国の、あるいはその民族の、そういうベーシカルなライフスタイル、それが結構反映されていくんじゃないかと思うんですけど？

○近藤：特に歩こうと思っている所の街道に人間が住んでいて、そういう文化を感じられるところは、まさにそのとおりだと思うんですね。けれども、例えばジョン・ミューア・トレイルとか、僕は全部歩いてはいなくて、スタートのマウント・ホイットニーと、最後のヨセミテの 3 日間しか歩いていないですけれども、別にアメリカの文化は感じないですよね。アメリカの文化って、たかだか 300 年もないですしね。

○中村：ルーカスさんのことやないよ（笑）。

○近藤：（笑）僕は嫌いじゃないですから。町を下りるとマクドナルドとかがあって、ああ、これがアメリカの文化なのかな、とか思うんですけど。歩いている中では、別に文化とか宗教とか民族とかは感じないですよね。あそこは楽しいから歩くんですよね、きっと。だから、ちょっと違うんじゃないかな、と思います。文化を感じながら歩くルートと、そうではないところがあるかもしれないので、日本はそのどちらにもっていくのかなと、気になるところがありますけれども……。

○中村：私は、このインバウンドの話をするたびに思い出すんですが、明治の初期、明治 3 年か、日本政府が世界中から 3,000 人ぐらい、お雇い外国人を日本に招くんです。そのうちの 1 人が、イギリスから来たウィリアム・ガウランドという人なんですね。彼は科学者で、冶金技師として大阪造幣局に雇われます。で、来日したついでに山が好きだから山へ登りました。上高地に来て山を見て登って、「これはアルプス」と思うんです。そして、本

国へ帰って本に「ジャパン・アルプス」と書くんです。そして、イギリスへ行った日本人がそれを見て、「日本にもジャパン・アルプスがあるんや」ということになった。そうすると日本で、「アルプスへ行こう」となり見直された。そんな逆輸入もあるんですね。

そういう例がこらからも続くんじゃないか、という気がするんです。だから、トレイルをインバウンドで外国人が歩くようになると、日本人も歩こうか、とならへんかなと思うんだけど、どうですか？　ルーカスさん。

〇ルーカス：僕は歩くと思う。国民性か分からないけど、外国人がやることはやっぱり日本人は気になるから、あれっ、最近、外国人が結構このへんを歩いているな、とたぶん噂が立ってくるから、それを耳にした誰か勇気ある日本人が、じゃあ、歩いてみようかということになるから。で、最初に手を上げる人はたぶん感度がいい人だから、それで本当に面白いかどうか判断することになるから、そこがすごくポイントになると思うね。その人が歩いてみて、「なんだ、外国人が歩いているだけだな」みたいな話になっちゃうと、終わってしまうんだけど……。それはさっきも言ったように、たぶんそのトレイルを開くとき、どんな目的で造るのかというのが、おそらくキーポイントになってくると思う。それが正しければ、日本人も楽しめると思うけど。もちろんさっき話の出た、自然の方へ行くか、文化の方に行くか、という問題はあるけれど。

話は戻るけど、僕はやっぱり街道の方に行って欲しいという思いが強いけど……。街道歩きの方が文化の面はもちろん、自然の面もあるし、楽しいと思う。もっとも、僕はアメリカ人ですから、ヨセミテとかいっぱい歩いていて、もちろん自然がきれいで、素晴らしいと感じます。だけど、あの国の歴史は 200 年ちょっとしかたっていないのもあるけど、文化的な面で見所が少ないと思う。

自然の中を歩き、その自然からもらえる力を感じたとき、たぶんどんな人間でも感動すると思うけど、文化で楽しんでもらえる国は、すごくワン・アンド・オンリー的だと思う。日本はその街道を持っているから、そこがうまくミックスできれば、ほかの国にないものになるから、日本のトレイルの１つの目的として活かせられるんじゃないかな。

〇中村：トレイルの運営されている方にとって一番頭が痛いというか、悩みの種は、トレイルのアプローチだと思いますね。どうやってそこへ人を運ぶか、どうやって来てもらうか、バスなのか、タクシーなのか、自転車なのか、歩くのか、という話です。

実はここ安藤百福センターを中心に、自由に歩けるようにトレイルが約 60km あります。で、日本人がここを利用するとき、初めての人だったら電話が掛かってくるんです。どうやってそこまで行ったらいいか。タクシーかバスか何かありますか、と。

で、外国の方はあまり聞かないです。なんでかというと、彼らは 1 時間ぐらい、別に気にしないで歩くんです。そのへんのところはすごく面白いと思うの。それで、信越トレイルにはそういう問い合わせあります？　アプローチのアクセスはどういうふうにされています？

〇高野：信越トレイルは、やっぱり宿に泊まる方が多いんです。それはロングトレイルだ

ったらどこでも一緒だと思うんですけど、やっぱり通して歩いてくれる方、特に海外の方は長く歩く方が多いので、宿に泊まります。宿の無料サービスを利用して行ってくれるのがすごく多いので、助かっていますね。新幹線で飯山駅まで来て、駅からバスで 20 分でもうトレイルの入り口まで行けちゃったりするので、意外とロケーションは悪くないと思いますので、そこは結構アナウンスしやすいけど、手間は掛かりますね。

〇中村：バスに乗っていただいて。

〇高野：1 人 1 人組んでいくところは、結構手間が掛かります。

〇中村：それで採算が合います？

〇高野：難しいところですね。課題の話になっちゃうんですけど、だいぶ問い合わせが増えてきて、1 件 1 件そうやって対応していくと、結構コストが掛かるんですね。しかも海外の方って、予定を立ててだいぶ組んだところで、行かなくなったよとか、すごく多いんですね。予定を組んでいて、宿も手配して、英語対応がなかなかできない宿にお願いしますと言って予約を入れるけど、もう疲れたからここでやめるわ、とか、そういうこともやっぱりちょいちょいあるんですね。

そこは間に立つ我々事務局がうまくやってあげないといけないと思います。そんなのは海外のトレイルに行けば別に自己責任だし、海外のオフィスに電話しても、そんなの自分で対応しろよ、で終わっちゃうことがすごく多くて……。悩んでいるのは、そういう形でもう自分でやってくださいとするか、今みたいに懇切丁寧に対応するか、です。でも、コストが掛かる話なので、どうしようかなというのが今、インバウンド対応では悩むところです。どこまで対応できるかどうか。

〇中村：そのあたりの対応は難しいよね。近藤さん、どうですか？　アルプスに行かれて、あるいはアメリカを歩かれて、そのへんのシステムというかサービス・システムは。

〇近藤：僕らは向こうでの金銭の授受はないので、全部日本で金銭授受をしてから現地に行きますから、税金は向こうには掛かってないんです。向こうの労働許可は取っていますけれども、日本で全部税金が済むようにしています。

海外からやっぱりお仕事をもらって、いくつかうちでもやったりしますけれども、クロージングに持っていって、お金をいただくところまでがすごく難しいんですよ。で、情報を結局はただで差し上げてしまって終了しちゃったな、ということが多くて。だから、その前にある程度の段階でお金を振り込んでいただかないと、とか、それから後は――その当時はカード決済なんかうまくできなかったので、今、カード決済ができるようなシステムにしたんですけれども――カード番号をいただいて、ちゃんと外国からのお金を受け取るようにします。まずはこの段階で、今だと何％かはもう返らない段階になるよ、とか、何日か前でキャンセル料が発生するよ、みたいな話をしてからじゃないと、なかなかちょっと前に進めないですね。

うちは旅行会社なので特にそうなんですけれども、一般の民宿とか旅館とか、普通の専業ガイドだけをやっている人たちなんかは、そこでちょっと泣いているところはあるかも

しれないですね。丸々取り違えちゃった、とかいうのはあるかもしれないですね。
○中村：高野さん、飯山あたりの民宿とかは、外国人の方のカード決済ってどうしているんですか？
○高野：半分ぐらいは対応していますかね。インバウンドに慣れている宿は、大体対応しています。来て現地決済ができれば、それは全然問題ないです。
　ただ、今の近藤さんがおっしゃった話ですが、我々も課題について悩んでいるだけじゃなく旅行会社とも会って、いろいろ検討しています。今後のやり方として、まず効率的にはやっぱり団体ツアーなんです。インバウンドの団体トレッキング・ツアーがちょっと増えてきていまして、それは今後増やしていこうと思っています。
　個人の方に関しても、今年から FIT 向けのパッケージ・プランをもう作っちゃって、手間暇かけたのをお金で解決ということで、手配はするけどこれだけお金をもらいますよ、という形でプランを作っているところです。それ以外はほぼ自己責任で、自分で手配してね、と完全に差別化してやっていこうと思っています。
○中村：先ほどのお話で、観光庁の方からインバウンド 4,000 万人という目標が提示されました。日本には美しい自然があり、四季があり、今後、ヨーロッパの人たちに人気が出そうだ。そういう話があったんですけど、そのニーズとそれを実際ツアーの中に組み入れるて、すごく大きな課題だと僕は思うね。
　当然、有名山岳、例えば上高地とかだと、我々としては日本の自然の奥深さを知ってもらうには、やっぱり歩いて欲しいというのがありますよね。それで外国の方がザックを背負って歩いてくれれば、僕は日本の風景が変わってくると、本当にそういうふうに信じているんです。たぶんトレイルの関係者の方、皆さん、そういうふうな想いは一緒やと思うんですね。
　では、ざっくり全体的なことでいいですけど、期待することと問題点を。何に一番期待して、一番の問題はこれだと。そろそろ終盤の議論に入りたいと思います。ひと言ずつ思いのたけを、高野さんから。
○高野：期待するところは、さっき中村さんがおっしゃったように、僕もよく使う言葉で「逆輸入」という言葉がありまして、やっぱり旅って異文化を楽しむことですから、我々にとっては当たり前になっている「和」という文化の価値を、海外の方に気付かされることが、すごく大きいですね。
　そして、先ほどの話のように、地元でもマーケティングばかり考えるとおかしなものを売り出したりとかしちゃうんですが、やっぱり自分たちが何を大切にしなきゃいけないか、そのアイデンティティというか、ブランドを崩しちゃいけないということに気付かされるのも、インバウンドのお陰かな、と思っています。
　我々は本当に名もなき裏山を開拓したんですけれども、今言ったようなことは、いい形で増やしていければいいと思っております。10 年以上前には、こんな所にトレイルを造っても、誰も来ないだろうと言っていた所に、今、わざわざそこを目的地として来日される

方が増えてきているので、さらに地域発掘という観点から期待をしているところです。

課題は信越トレイルのブランド力がまだ弱いということで、熊野古道を歩いたら次は信越トレイルへ、とか、そういう流れも今、作りつつあります。そういう感じで進めていきたいと思っていますが、あと緊急時の対応が課題ですかね。以上です。

〇中村：去年の秋に、節田さんと信越トレイルを歩いてきたんです。僕は何回か歩いているんです。

大変恐縮なんですが、このトレイルは、一部は景色があまり見えへんのです。ブナの森が続いている感じです。

そやけどね、今回行ったら、ちょっと違うのが分かってきたんで。あ、そうか、ここはやっぱりいろいろ考えながら、思索しながら歩いたら、いきなり違うイメージが膨らんでくる。古道が横断しているし、ここは謙信が通った所だ、とか。しかもその道が絶妙に造ってあるんです。先人の知恵に感心しました。それで信越トレイルを見直したんです。すごいな、これはやっぱり外国人に受けるぞ、というふうに思いを強くしました。

〇高野：最初はどうなるかと思いました。ありがとうございます。

〇中村：じゃあ、近藤さん。

〇近藤：僕はどちらかというと、トレイルを造る立場ではなくて、やっぱりソフトを充実させたい側の人間だと思うんですね。で、僕はガイドという職業ですけれども、僕らはアクティビティをいろいろ提供していて、さっきの「逆輸入」の話はまさにそのとおりです。

今、日本の雪って世界的にものすごく有名になっているんですが、日本の人はそれに気付かなかったんです。一晩で 50cm とか 1m とか降りますよね。そんな国はないんですよ、世界中どこを探したって。

だから僕らは誇れるんです。「ジャパウ」というのは、「ジャパンのパウダー」を表す言い方で、今、「お前はジャパウを体験したか」なんて言って、皆さんウワーッと盛り上がっています。特にオーストラリアの人など、あのへんの人たちは自分の国で雪がそんなにたくさん降らないので、日本に来て一生懸命滑っているわけですね。

で、おやおやと、日本の人たちがびっくりしている状態です。野沢温泉なんかがいい例で、今までの旅館のおじさんたちは年齢も上がっているし、とてもじゃないけどもう旅館業ができなくなってきている。でも、オーストラリアの方たちがそこを貸してもらったり、買い取ったりして、今、野沢が活性化されているんです。ニセコなんかもそうですけれど。

そして、皆 3km ぐらい平気で歩いてご飯食べに行ったりするわけですよ。そこら中を歩いているんです。だから、そういうふうな感じでトレイル文化が進んでくれるといいな、と思いますね。でも、やっぱりそのときに日本の人たちが、面白いものがあるよ、とか、上手にそういった情報を提供してあげて欲しいですね。日本の人は意外に自然をあまり知らないので、自然の遊び方とか、例えばスノーシュー、このペタペタ感面白いよとか、ゲレンデだけじゃなく、外で滑るとこんなに面白いことがあるよとか、そういうソフト面を充実させていきたいな、と思っています。

と思うと同時に、僕らとしての課題は、ガイドってオーストリアとかフランスに行くと国家資格ですけど、日本に持って帰ってくると紙切れなんですよ。なので、ずっともう何年も一生懸命やっていますけれども、ぜひ山岳ガイドの国家資格化について、理解を賜りたいと願っています。

また、環境省さんとか観光庁さんとかって、それぞれ縦割りで、あまり横の連携がないですよね。なので、日本に何か作りたいなとか思っても、いろいろな所の許可が必要だったりするので、僕はそれらを一本化して、日本の自然の素晴らしさを内外にアピールし、結果的にマーケットが大きくなっていくというのが望ましいかな、というふうに考えています。僕や後輩たちの将来も、そこに懸かっていると思います。

○中村：ありがとうございました。じゃあ、ルーカスさんお願いします。

○ルーカス：話の中にあった成功例としての信越トレイルですが、造った人は加藤則芳さんですよね。僕は造る前から何回かインタビューしたことがあったけど、やっぱりものすごくトレイルのことが分かっている人だし、アメリカのロングトレイルをたくさん歩いている人だから、そこに彼の中の DNA があるから、とてもビジョンがあった。

どんなトレイルの目的が彼の頭の中にあったか分からないが、１つは、どこに行っても日本のトレイルは大体キャンプできないことが問題だった。しかし、僕の中では長く歩いてキャンプできることが、信越トレイルの一番面白いポイントだなと思っている。さらに昔調べたけど、今どうなっているか分からないが、水を自分で汲まないと飲めないところが特徴的だと思う。なかなかその体験がないので、そういうめっちゃハードじゃないけど、やっぱり普段できないことが要求される。その達成感がすごく上がっていくから、信越トレイルは、そういう目的がしっかりしているトレイルの１つだと思うね。

で、さっき言ったように、トレイルは今、この文化の面をどんどん取り入れていこうと努力し、そこにある自然をプラスして、さらに宿泊を確保できれば、間違いなくそれは伸びてくると思うね。だから、街道のことを僕は「ジャパニーズ・オールド・ハイウェイコース」と言っていて、やはり魅力的だね。

最近、『PAPERSKY』も街道歩きの連載をやっていて、毎回違う外国人の面白いゲストを連れていって一緒に歩き、その人のフィルターを通して話をしたり見たりするのをやっていると、皆もう確実に大満足だし、またやりたいと言う。だから、成功しないわけはない、と言いたい。ただ、正しく解釈してあげることをしないともったいない。

こういう日本の文化を体験できるチャンスってなかなかないと思う。日本には、いいディズニーランドがあるんだけど、それで日本を体験したと言ったらちょっと違うんじゃないかな。

先ほどのガイドはもちろん大事だけど、スイスだったりニュージーランドだったりアメリカだったり、ガイドなしで皆ガンガン歩くから、必要ないと言う人もいるだろう。さっき言った街道歩きの地図がまずない。日本語にしてもない。だから、どこに行っても頑張って探した古い街道のマップとグーグルを合わせて、どんな道かなと、おばあちゃんやお

じいちゃんに聞きながらたどって行くというスタイルで歩いています。

そこで、まず地図だね。その次が看板。看板があってもすごく小さい。いきなりコンビニができていたり、道路もいつの間にか変わったりするから、ルートが合っているか合っていないか分からないね。看板をちゃんと整理して欲しいです。

先ほどちょっと話が出たけど、僕は本という媒体を通じて紹介する立場だから、ちゃんとしたストーリーを語ってあげたいと思っています。街道とかロングトレイルにおいて、さっき言ったように塩の道だったら、ちょっとその塩を背負って歩く部分があっていいし、また、町に入って文化的な面を楽しめる部分があったり、そのトレイルに対する歴史認識を深められるようなストーリーを作ってあげればいいと思う。それをちゃんとメディアに出せたら、世界にない、面白いロングトレイル・ネットワークができるんじゃないかな、と思います。

〇中村：どうもありがとう。

〇節田：私はどちらかというと、皆さんのトレイルに対する応援団的立場なのですが、ロングトレイルに繋がった、私個人の「道」に対する想いを最後に語ってみたいと思います。それは大昔のことで、たぶん中学 2 年生だったと記憶しています。

1956 年に、日本の登山隊が 8000m峰の一座、マナスルに初登頂しましたけれども、その映画を、私のふるさとである佐渡の中学校の体育館で見ているんです。そのとき、なぜか登頂シーンよりも、キャラバンのシーンが非常に印象に残っているんですね。あの当時の登山隊というのは、何百人という大変な人数のポーターを使って、長大なキャラバンを組んでベースキャンプまで歩くんですけれども、そのシーンが非常に印象に残っておりまして、この映画がきっかけで山登りを始めたようなものです。

そのマナスル登山隊が通った道を、20 年後に私自身が追体験しました。ネパールは初めてだったんですけれども、マナスル山群への道は、特にトレッキングで有名な道じゃなく、たまに登山隊が通るぐらいの、どちらかというとマイナーなルートなんです。

キャラバンの道すがら人々の暮らしを垣間見て、たぶん日本の江戸時代の暮らしってこんな感じかな、それこそイザベラ・バードが歩いた日本は、こんな雰囲気かなと想像していました。そういうことを体験できたのが大きなカルチャー・ショックで、大変印象に残っています。そんなことが積もり積もって、たぶんロングトレイルに繋がっているんじゃないかなと、自分の中では思っています。

もちろん若いときは、「馬鹿となんとかは高い方に登る」で、険しい高い山へ登っていましたけれども、やっぱりそれなりの年になってきますと、再び「道」に対するこだわりが復活してきました。先ほど中村さんから、「道には哲学がある」というような話がありましたけれども、京都に「哲学の道」というのがあるように、人は歩きながら何かしら考えているんじゃないかな、と思います。

もちろん自然環境が素晴らしくて、なおかつそこに歴史や文化もたくさんあって、それらをいろいろ体験しながら、あるいは人々とコミュニケーションしながら歩いていく、と。

そういう道が日本中に増えてくれることを願って、中村さんと２人でこんなプロジェクトを立ち上げましたけれども、だんだんスケールが大きくなって、後期高齢者となった身としては、いい加減重荷になってきています。けれども、消費期限の切れるまで、皆さんと一緒に頑張っていきたいと思っています。

〇中村：冒頭で安藤理事長からもお話がありましたが、JAPAN TRAIL についてご説明します。これはインバウンド振興の方向性の１つかな、というふうに思います。

現在、日本ロングトレイル協会には 19 トレイルが加盟しています。で、たぶん明日の理事会で 3 つのトレイルが加盟承認され、おそらく今年中に 25 ぐらいになるだろうと思います。そして、私の計算ですけど、たぶん何年かのうちには 30 から 40 ぐらいになると思います。そういうトレイルをできるだけうまく繋いで、日本列島に一本道を引ければ面白いな、というふうに思っています。

これが現在のロングトレイル協会のメンバーです。で、これが今構想中の JAPAN TRAIL です。まだほかにもあると思いますし、抜けている部分もあるかも分かりません。なお、赤と青で書いてあるのは、実際に歩く道がセットされています。

で、皆さんのいろいろなトレイルを繋ぎながら、こういう道が引ければいいな、と思っています。そこで、名前を JAPAN TRAIL としました。分かりやすいのが一番いいだろう、と。もちろんこれを見たら、あっ、自分の所入ってへんわ、と言う人がいるかも分かりませんけど、これはあくまでもこんな感じ、ということです。だから日本列島全体で調整したり、いろいろ考えながらやっていきましょう。

現在、佐渡島でもトレイル構想がありますが、島も当然入れたいと思います。そういう所もバリエーションとして考えたい。北海道の北の端に立てば、この道が九州まで続いている、あるいは奄美からさらに沖縄まで続いている、そういうようなイメージ・デザインができるような道を造りたい、ということです。

たぶんこれは10年以上かかると思います。そして、エンドレスです。これはロングトレイル協会とはパラレルの話ですが、表裏一体です。したがって、皆さんにご協力いただきながら、ロングトレイル協会のメンバーのトレイルは、できる限り通すように努めます。

これが日本の主な山地です。そういう所を通って行くようなイメージです。こういう道を順番に繋ぎながら行きますが、入ってない所があったら、すみません。そして、これが北アルプスです。我々は地球規模で考えていますから、北アルプスの夏道はトレイルだ、ハイキング道だと思っています。そこも通します。ただし、こういう所を歩けない人もいますので、そのためにエスケープ・ルートも造ります。それは、例えば塩の道だったりするんですね。こういう構想を持っていまして、今年の 4 月から、いよいよ委員会を立ち上げます。皆さん、ぜひご協力をお願いしたいと思います。

JAPAN TRAIL はかなりインバウンドを意識しながら、近藤さんが言っているような「逆輸入」的なことも考えながら造ろうということです。

ちょっと余談になりましたけど、時間がもうかなり押してきちゃったので、最後にワンワードだけ、これからのご予定を聞いて終わりたいと思います。じゃあ、高野さんから。ご予定といっても、仕事ばかりだもんね（笑)。

〇高野：懇親会を楽しみにしたいと思います（笑)。そういう話じゃないんですね。80km から 120km ぐらいになると思うんですが、今、苗場山へ向けて信越トレイルを延伸するような構想を持っていまして、それをできれば数年以内に完成させたいということと、そもそも信越トレイルですので、雨飾山に向けて延ばせたら、と思っています。ちょうど戸隠方面の方々が造り始めようとしていますので、うまく繋がっていければ、と考えています。

〇中村：ありがとうございました。近藤さん。

〇近藤：懇親会も楽しみなんですけど、地元の山岳会の方にちょっとお呼ばれしているので、僕はちょっと参加できなくて残念です。夜に戻ってきますから、つぶれないで待っててください。

で、明日はちょっとアイス・クライミングの仕事が入っているので、そちらへ行ってしまいます。4 月 10 日からまた、今度は 13 回目のエベレストにまいります。また、いろいろネットとかに出ると思いますので、ぜひ応援メッセージとかをいただければ嬉しいな、というふうに思っています。

〇ルーカス：4 月末に出る次の『PAPERSKY』がハワイ特集です。ビガーアイランド bigger island の方だけど、「リトリート retreat」というキーワードでやろうと思っています。日本人はまだちょっと分かる人は少ないと思いますが、たぶん 1 年ぐらいで日本にもその波が来るでしょう。つまり、リトリートとは日常を忘れ、自分を解放して強く自然を感じること。自分たちはやっぱりずっと町にいると、自然がどのくらい大事か、その感覚を忘れてしまっているから、そういった時間をちゃんと割いて暮らしていこう、ということです。

アメリカでは、ものすごい数の若い人がリトリートしている。それまでの、年寄りの人が休みをとって、どこかでゆっくりするというようなスタイルじゃなくて、ヨガだったり

メディテーションだったり、そこで何かを体験することを言います。

また、先ほど話した外国人を連れて行くトレイル歩きは、その号にも載せます。伊豆半島の方に「山伏トレイル」というのがあって、２人の男の人が一から造ったトレイルです。このへんには昔の生活で使っていたようなトレイルがいっぱいあるので、２人が町の人と話し合って、それをきれいにしたのだそうです。そのトレイルはたぶん 30～40km ぐらいあって、そこでマウンテンバイクも乗れるし、歩きもできるということです。ぜひ、次号の『PAPERSKY』を気に掛けてください。

〇中村：で、明日からハワイだね（笑)。

〇ルーカス：はい、明日からハワイへ行ってきます（笑)。

〇節田：じゃあ、ふるさとの PR を１つ。私は佐渡で生まれたんですが、今度やっと佐渡にもトレイルができることになりまして、5 月 25 日、佐渡でロングトレイルの１回目のシンポジウムがありますので、皆さんぜひ、この機会においでいただければと思います。これでいくらかでも、ふるさとに恩返しできるかな、と思っております。

〇中村：時間が押しましたので、かなりぼやっとした形でしたが、これをもちましてシンポジウムを終わりたいと思います。ご登壇者に拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

ロングトレイル協会・新規加盟団体紹介

岩手山・八幡平・安比高原 50km トレイル

髙橋時夫（岩手山・八幡平・安比高原 50km トレイル協議会　会長）

ナショナルパーク＆ジオパーク的な魅力を持つトレイル

岩手県と秋田県の県境を南北に延びる奥羽山脈。岩手山、八幡平、安比高原の全長 50km に及ぶ山岳地帯は、標高 1500m から山脈の最高峰である岩手山（2038m）へと連なるブナ、ダケカンバ、ミズナラ、オオシラビソなどの豊かな自然に囲まれた、我が国でも有数のロングトレイルを形成している。

この山脈は、那須火山帯に属し、コース上では活発な火山活動を垣間見ることができ、まさに地球の生い立ちを今に感じるトレイルだ。

登山口には温泉が湧き出ており、日本百名山の岩手山や八幡平はもちろん、延々と連なる峰々を踏破した後の山旅の疲れを癒してくれる。

トレイルの北の起終点となる安比高原ブナの駅周辺は、我が国有数のリゾート地である安比高原スキー場の中核をなし、後背地には、我が国有数のブナの原生林や二次林が形成されている。また、八幡平周辺は国立公園八幡平地域の中心として、春の桜と雪の回廊、6 月には数百種の高山植物とともに残雪と池塘が造り出す「八幡平ドラゴンアイ」が話題となっている。

晩秋にかけて多くのハイカーが、ニッコウキスゲの群落や草紅葉の探勝を楽しんでいる姿が見られる。ここから望む秀峰・岩手山ははるか彼方に見えるが、トレイルの積み重ねを山頂は待っている。

八幡平アスピーテラインを横切ると、東北で最も標高の高い藤七温泉の湯煙が待っている。

これより標高 1500m 級のなだらかな稜線を進むと、トロイデ火山の畚岳（もっこだけ）をはじめ、その名のとおりオオシラビソの諸檜岳（もろびだけ）、南面が大きく切り立った険岨森（けんそもり）、そして、裏岩手連峰の盟主・大深岳と続き、50km のトレイルも半分が背後へと過ぎていく。小畚山（こもっこやま）から三ツ石山の稜線は、箱庭のような自然美を見せてくれる。秋には、全山鮮やかな紅葉が待っている。毎年 6 月の第 3 日曜日には、麓の秘湯・松川温泉の河畔でアルプススタイルの「残雪の裏岩手連峰開山祭」が開催され、多くのハイカーで賑わう。

三ツ石山荘を過ぎると大松倉山、犬倉山、姥倉山と、トレイルはどこまでも続き、姥倉山を過ぎるといよいよ岩手山が目の前に迫り、広大な西岩手火山の火口が現れ、活発な火

山活動を続ける黒倉山の鞍部から大地獄谷分岐経由で八ツ目湿原へと入る。天気の良い日は、アルプス的景観の鬼ヶ城の稜線コースを通るのも楽しい。

西岩手火山と分かれ、急勾配を上り詰めると盛岡不動平に出る。近くには岩手山八合目避難小屋があり、御成り清水で喉を潤すことができる。

岩手山頂まではもうひと息。2038m の山頂に着くと、早池峰山、鳥海山、秋田駒ヶ岳、八甲田山、岩木山の山並みが望め、360 度のパノラマが待っている。北の方に目をやると、一歩一歩歩いてきた裏岩手連峰や八幡平、安比高原の山並みが広がり、トレイルの疲れを癒してくれた藤七温泉、松川温泉の湯煙が見える。

トレイルの南の起終点である岩手山焼走り国際交流村も、もうすぐ。

途中、平笠不動避難小屋でひと息入れ、コマクサの大群落で 50km に及ぶトレイルの疲れも忘れ、南の起終点となる焼走り登山口に到着。思い出深い山旅に感謝のひとときだ。

岩手山・八幡平・安比高原 50km トレイルの整備や維持管理は、環境省、岩手県、八幡平市などが中心になって行っているが、民間ボランティアの活動も活発だ。八幡平周辺では、環境省パークボランティア、八幡平自然散策ガイドの会、自然公園指導員が、岩手山では八幡平市山岳協会などの構成団体が、長年にわたり山小屋管理、登山道整備、清掃活動を行っている。

岩手山・八幡平・安比高原トレイル活動の柱

岩手山・八幡平・安比高原 50km トレイル協議会は、エリア内の登山道の維持と設置、休憩・避難施設の管理活用、スカイ・トレイルとしての整備を通して、隣接市町村との地域連携を図り、自然の保全と持続的利用を図り、自然を求めてこのトレイルに訪れる人々との交流を通じて、地域の活性化、観光振興に寄与することを目標としている。また、貴重な山岳景観を誇る岩手山・八幡平・安比高原の豊かな自然から、人間と自然とが共存することの重要性、十和田八幡平国立公園八幡平地域の機能を理解するとともに、新たな国立公園のあり方を考え、自然保護とアウトドアスポーツへの意識を啓発することを目的としている。

岩手山・八幡平・安比高原トレイルガイドライン、トレッキングルール

・岩手山・八幡平・安比高原 50km トレイルガイドライン、トレッキングルールを事前に確認して楽しんでください。

・岩手山・八幡平・安比高原の貴重な資源を未来に永続し、より多くの方々に楽しんでいただくためのお願いです。

①岩手山・八幡平・安比高原 50km トレイルマップを購入してください。
トレイルには道標や案内板がありますが、自分の安全を確保するためマップは必ずお持ちください。

②装備はしっかり整えてください。
岩手山・八幡平・安比高原 50km トレイルは、標高約 1500m から 2000m 級の山岳で形成されており、天候が急変することもありますので、装備は十分に整えてからトレッキングをお楽しみください。特に夏場は気温が非常に高く、日差しも強いので、しっかりとした日除け対策をしてください。また、トレイルには水場が少ないので、十分な飲料水(夏場で 1 人あたり 2ℓ以上)を持参してください。

③トレイルにはいくつもの分岐が交差しています。自分の体力やプランに合ったコースを設定してください。

④全行程を歩くには、一般の方で 2～3 日程度かかります。途中の山小屋、温泉宿等の宿泊施設に泊まりながら、のんびり歩いてください。

⑤トレイルへアクセスするための路線バスなどは、一部整備されていません。タクシー等をご利用ください。

岩手山・八幡平・安比高原トレイルの具体的取り組み

▼残雪の裏岩手連峰開山祭の開催
▼八幡平山開き協力
▼八幡平国立公園内の指定外来植物駆除作業への協力
▼岩手山山開き協力
▼トレイル（歩道）周辺の清掃活動、維持管理事業への協力
▼自然保護に関わる啓蒙・レンジャー活動
▼観光協会 HP、パンフレット等での登山ルール、マナー理念の啓蒙
▼森林、自然を活用した環境教育事業
▼希少動植物の研究調査活動、指定外来植物の駆除
▼自然公園指導員、ガイド等の派遣紹介
▼自然観察会、トレッキングツアー、 シンポジウム等イベント企画開催
▼登山道、避難小屋、ビジターセンター等観光関連施設等の活用、情報提供
▼各地域の管理団体、地権者、森林ボランティア団体等との連携
▼指導員等の人材育成
▼山岳遭難防止と安全登山の啓蒙

びわ湖比良比叡トレイル

比良比叡トレイル協議会事務局長　小川 隆

琵琶湖の西岸、比叡山から比良山地へ続く 50km の稜線

比叡・比良の山々は、古く奈良時代から修験者たちの歩く道で、山岳信仰の場だった。その後、平安時代に最澄が自らの仏道修行の場と定め、修行を積み、天台宗を開創し、あまたの高弟により日本仏教の母胎と言われるようになった。1,300 年後の今日まで続く道は、筆舌に尽くし難い苛酷な修行の場として、千日回峰行者が巡拝する道でもある。なお、比叡山は 1994 年に世界文化遺産に登録された。

山道を歩くと、眼下に琵琶湖の絶景が見える。地形は変化に富み、三の滝、楊梅の滝などの滝や、八雲ヶ原、小女郎池などの湿地が点在している。スギやヒノキの森を過ぎると、コナラ、ミズナラの森、さらにシャクナゲの群生地へ繋がり、ブナやトチの巨木に出会え、標高 1000m 級の山々の道沿いには、四季折々の山野草がハイカーの目を楽しませてくれる。

山を下り、里山や棚田を過ぎると、古い歴史を持つ社寺が多く点在し、伝統のある祭りが行われる。比叡と比良の中間の琵琶湖岸には、おごと温泉がある。

平成 29 年 12 月、ルート調査完了

平成 28 年、比良比叡トレイルの発起人 12 団体は、プロジェクトチームを立ち上げた。メンバーである滋賀県山岳連盟の延べ 100 名が、予定するルートを往復 2 回、計 25 回にわたり踏破・調査をした。そして、平成 29 年 8 月 11 日、国民の祝日となった「山の日」に、計 17 団体が集まり、「比良比叡トレイル協議会」を設立した(協議会メンバーはホームページに掲載 http://hirahiei.com)。

比良比叡トレイルのルートは、26 年前に発足した、隣接する京都一周トレイルと比叡山で繋がり、北は 11 年前にスタートした中央分水嶺高島トレイルへと続く。滋賀県では琵琶湖を取り囲む山々を繋げる「山のビワイチ構想」※「ビワイチ」とは琵琶湖一周の意　があることを記しておきたい。

活動目標は観光の振興

目標は、外国人観光客を含めた多くの歩く人々を誘致することである。琵琶湖を展望する道、かけがえのない景観を広くアピールし、安全な山歩きを進めながら、自然・歴史・文化・健康・環境・スポーツをテーマにした、魅力いっぱいの企画を創成する。

30 年度の活動計画は、(1) 前年度に引き続き、賛助会員の募集によって活動資金の調達を進める。(2) 画像と英文翻訳に力を入れたホームページ、地図、パンフレットを制作する。(3) 調査と整備を継続し、放置された古い看板や安全対策をテーマにした道標を設置する。(4)「山の日シンポジウム」を開催する（※28 年の第 1 回から「びわ湖の山の日」と名付けて比良山地と比叡山でイベントを開催。第 3 回となる 2018 年は、多くの関係者や報道関係者を対象に、山の魅力と山歩きの安全をテーマにしたシンポジウムを開催し、活動を PR する)。(5) モニタリングツアーの実施など、である。

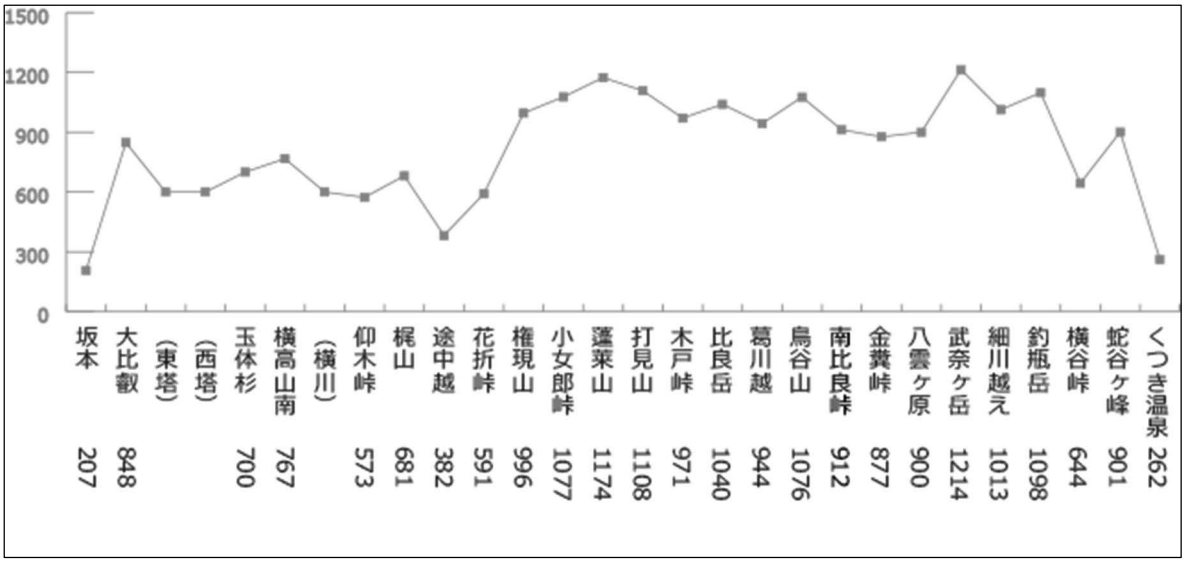
重要なのは活動の継続

協議会の運営は、目標へ向けて会員がしっかりした共通の意識を持ち、積極的に行動できるかに懸かっている。そして、この事業の成果を活用して、地域の交通機関、宿泊施設、温泉施設や道の駅、レストラン等と連携を強化し、地域産業へ貢献を果たしながら、私たちへの支援を求めたい。その活動の中から、ビジネス展開の可能性も追求していきたい。観光の振興は、1 人でも多くの人々を山へ誘うことに懸かっている。

活動計画で述べたように、当面は活動資金を助成金や寄付金に頼らなければならないが、継続のためには、ビジネス展開の可能性を追求し続けなければならない。

活動を始めて 2 年足らず、今のところは未知数であるが、この活動に関心を持って、今後関わりたいと言ってくれる人たちが出始めた。当初から地方創生やスポーツ・ツーリズムのテーマで指導や支援をいただいている政治家の方々だけでなく、地域の自然愛好家の

サポートを大きな力にしていきたい。



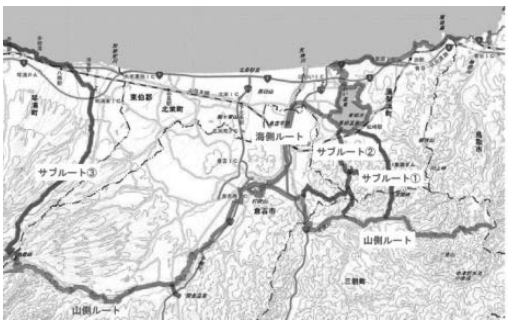
ルートの地点名と標高

伯耆国ロングトレイル（仮称）

特定非営利活動法人未来

伯耆国ロングトレイルは、飛鳥時代から鳥取県を中央に二分していた「因幡国」「伯耆国」と呼ばれていた「伯耆国」の一部である現在の倉吉市、湯梨浜町、三朝町、北栄町、琴浦町を繋いでいる。

鳥取県では、「ウォーキング・リゾートとっとり」を掲げ、官民が一体となって、ウォーキングと温泉、食、歴史・文化、自然景観などの地域資源を活かして、ウォーキングをブランディングする「ウォーキング・リゾート構想」を推進してきた。その取り組みの結果、平成 29 年 10 月には、ウォーキングによる健康・地域づくりの国際会議「第 6 回ワールドトレイルズカンファレンス鳥取大会」の日本初開催へと繋がり、33 ヶ国・地域から 4,500 名の皆様に、鳥取の風土とウォーキングが持つ癒しの力を感じていただいた。この国際会議を契機に、鳥取県東部地区の「山陰海岸ジオパークトレイル」に繋がる中部地区の自然や歴史、文化に触れることのできるロングトレイル・ルートとして登録した。



トレイルルート全体図

ウォーキングリゾートロゴ「ホトリ」

ルートは山側ルート（約 65km）、海側ルート（約 35km）と 3 つのサブルートから構成されている。山側ルートは、鳥取県の 2 つの日本遺産、大山と三徳山を繋ぐルートで、中国自然歩道の大山参詣「大山みち」川床道*と呼ばれていたコースの中で、最も山の中を歩く。

大山古道を歩く

川床から一向平（いっこうがなる）ルートまで歩き、地蔵峠を越えると、開湯 1,300 年の歴史を持つ関金温泉に着く。昭和 60 年に廃線となって 30 年以上も経った今も、レールやホームが残っている旧国鉄倉吉線の廃線跡や倉吉市内を一望できる打吹山（うつぶきやま）*、打吹山の城下町として栄えていた白壁土蔵群、泉質にラジウムやラドンを多く含み、世界でも有数の放射能泉である三朝温泉などの観光地と、国宝「投入堂（なげいれどう）」で有名な修験道の行場である三徳山と俵原高原の道*を繋ぐ中国自然歩道からなるルート、それが山側ルートだ。

旧国鉄廃線跡

白壁土蔵群

三朝温泉

三徳山・投入堂

海側ルートは、山側ルートの途中、倉吉市白壁土蔵群から日本海側に北上し、全日本ノルディック・ウォーク連盟公認第 1 号コースとなった、1 周 12km からなる東郷湖（とうごうこ）を周回して日本海側に出るルートだ。東郷湖は湯梨浜町に位置し、はわい温泉、東郷温泉の源泉が湖底から湧き出ており、日本一大きなシジミがとれることでも有名である。

東郷湖

はわい温泉・東郷温泉

サブルート①は、山側ルートの三朝町片柴から波関峠を通って東郷湖に抜け、海側ルートに繋がるルート。

サブルート②は、山側ルートの途中にある倉吉市大原から湯梨浜町十万寺に繋がるルートと、三朝町山田から湯梨浜町十万寺に繋がる、舗装されていない中国自然歩道を通り、羽衣天女伝説や、戦国時代お城のあった羽衣石山を通る「羽衣石城跡へのみち」*を通り、東郷湖周回ルートに合流するルートだ。

羽衣石城

羽衣石城跡への道

サブルート③は、琴浦町一向平から琴浦町地内を通って日本海まで下り、琴浦海岸の西に位置する「鳴り石の浜」*に行くルート。鳴り石の浜は、大小さまざまな大きさの丸いゴロタ石が集積し、打ち寄せる波によって石同士がぶつかり合い「カラコロカラコロ」と心地の良い音がする不思議な海岸だ。このような大きな丸石ばかりが集積した海岸は、全国的にも珍しいようだ。

鳴り石の浜

トレイルルートの整備について、行政サイドの中国自然歩道事業として、平成 29 年度に一部のルートで多言語誘導標識や案内板の整備がされた。今後も官民一体で地域連携を図りながら、ロングトレイルの標識・案内板等の整備や、維持活動を進めていく予定だ。

整備された看板

13 ヶ国から集まったトレイル・リーダー

〈参考〉

平成 29 年度には、13 ヶ国 15 名の次世代トレイル・リーダーが中部管内のトレイルを登山、ウォーキング、サイクリング等で踏破。鳥取県の自然豊かなトレイルを体験、情報発信をするとともに、ルート設定や整備に関する助言をいただいた。

大山古道は、大山寺から麓へと放射状に延びる５つの古道（横手道、溝口道、川床道、尾高道、坊領道）の総称で、博労座で開かれた牛馬市へ向かう道として、山岳信仰の舞台として拓かれた。

*大山参詣「大山みち」川床道　http://www.pref.tottori.lg.jp/93942.htm

*歴史と自然観察のみち「打吹山」　http://www.pref.tottori.lg.jp/93947.htm

*三徳山と俵原高原のみち　http://www.pref.tottori.lg.jp/93950.htm

*羽衣石城跡へのみち　http://www.pref.tottori.lg.jp/93948.htm

*「鳴り石の浜」　http://nariishi.com/

大江山連峰トレイル

大江山連峰トレイルクラブ会長　髙崎洋一朗

鬼伝説に彩られた大江山連峰を歩く

大江山連峰トレイルは歴史があり、文化と自然が豊かな大江山連峰を中心に歩く、全長約 84km の、日本有数のバラエティに富んだトレッキング・ルートになっている。

大江山連峰（与謝野町より）

大江山連峰は、丹後・丹波の国境にそびえる当地方きっての名山である。大江山を記した古書も数多くあり、3 つの伝説が残されている。

1 つは崇神天皇の弟にあたる日子坐王（ひこいますのきみ）の土蜘蛛退治伝説であり、もう 1 つは用明天皇の第三皇子麻呂子親王の鬼退治伝説であり、残り 1 つは御伽草子『酒呑童子』で知られる源頼光の鬼退治伝説。これらの伝説にまつわる伝承地は、今でも数多く残っている。

山伏に扮し、酒呑童子に酒をふるまう頼光

一方、この地は丹波・丹後を結ぶ陸上交通の要路でもあり、大江山の東には普甲峠（宮津街道）、西には与謝峠（山陰道丹後支路）がある。与謝峠越えの道は古代山陰道丹後支道のルートで、また、普甲峠越えの道は、宮津藩の公路として江戸時代初期に藩主京極高広によって新しく開かれた道であり、それ以前はさらに東の元普甲道を通り、都への往来をしていた。今でも宮津街道には石畳の道が所々に残り、参勤交代の行列や旅人が往来した面影を残している。

今普甲道（宮津街道）〈普甲峠～中の茶屋間〉

大江山連峰の自然

平成 19 年 8 月 3 日、「丹後天橋立大江山国定公園」として指定された大江山は、南は福知山市、北は与謝郡与謝野町と宮津市と接し、標高 832.4m の千丈ヶ嶽を主峰として、西に赤石ヶ岳（736m）、北東に鳩ヶ峰（746m）、鍋塚（763m）と連峰をなしている。

複雑な地形のためか、動植物の生態面では極めて興味深い山であり、植物は種類が豊富で、南方系と北方系の草や花、そして、樹林が混じり合う植物の宝庫として知られ、動物でもツキノワグマ、シカなどが見られる。野鳥ではヤマセミ・アカゲラをはじめ大江山全体で 28 科 80 種の生息記録があり、京都府内でも屈指の探鳥地として有名である。昆虫も豊富で、アカエゾゼミなど京都府内で初めて見付かったセミもいる。

秋の早朝、8 合目の鬼嶽稲荷神社からは、乳白の雲海の中に山々が島のように浮かぶ幻想的な雲海が見られる。

大江山の雲海

大江山連峰トレッキングルートの概要

1）赤赤縦走路

赤石ヶ岳、千丈ヶ嶽、鳩ヶ峰、鍋塚、普甲峠、茶屋ヶ成、杉山、宇野ヶ岳、赤岩山を経由する全長約 16km のルートを、その両端の山の名前をとり「赤赤縦走路」と呼ぶ。標高は千丈ヶ嶽の 832.4m が最高で、アップダウンも緩やか。さらにほとんどのルートが整備されているため、登山初心者でも歩きやすくなっている。

2）天橋立トレイル・ルート

大江山連峰から少し離れた天橋立の近くにあるトレッキング・ルート。天橋立の眺望が、段々に姿を変えていくのが見られる。題目山からの景色は、伊根湾まで見渡せて素晴らしく、最後は金引の滝でマイナスイオン・シャワーを楽しめる。

3）ダイラ道

宮津市今福と舞鶴市西方寺平（だいら）を結ぶ古道。かつては、宮津の灯籠流しの際など日常的に使われていた。春は斜面にタムシバの白い花と緑の天然杉の見事なコラボレーションが見られ、宮津側の入口から少し歩けば、7つの滝からなる今福の滝がある。宇野ヶ岳・赤岩山鞍部から30分で赤岩山にたどり着く。

4）今普甲道ルート

地元では「宮津街道」と呼ばれ、それまでの普甲道（現在の元普甲道）が険しく危険だったことから、江戸時代当初に開かれた道のこと。以降、京都と丹後地方を結ぶ主要街道として、宮津藩の参勤交代や西国三十三ヶ所の巡礼に使われるようになった。距離はあるものの、難所のない歩きやすいコースで、随所に残る石畳や二瀬川渓流に代表される自然景観など見所も豊富。

5）元普甲道ルート

棚田で有名な毛原地区や、ゲンジボタルなどが生息する桧川流域を歩くルート。途中の寺屋敷地区は、かつて「西の高野山」とも呼ばれた普甲寺跡がある。茶屋ヶ成からは宮津市街地や宮津湾、天橋立を一望できる。

「大江山連峰トレイル」開設記念シンポジウムの開催

2018年3月17日に大江山連峰トレイルの開設と、大江山連峰トレイルクラブ*の発足を記念し、「大江山連峰トレイル」開設記念シンポジウムを開催した。

大江山の自然や歴史資産を活用した観光地域づくりのため、海の京都ＤＭＯや関係市町とともに、大江山に残る古道や登山道を活用したトレッキング・ルート「大江山連峰トレイル」の開設と、全国へ繋がるトレイルとして日本ロングトレイル協会に加盟したことを祝った。

※大江山連峰トレイルクラブ

大江山を中心に活動している４つのトレッキング団体である、大江地域観光案内倶楽部（福知山市）、加佐地域農業農村活性化センター（舞鶴市）、上宮津杉山エコガイドの会（宮津市）、大江山鬼っこの会（与謝野町）が、地域団体や企業、ボランティア等と連携して、民間ベースによる利活用の活性化と継続した維持管理を行っていく組織。大江山連峰トレイルの開設と同時に結成された。

〔大江山や鬼に関する出典〕日本の鬼の交流博物館

石鎚山系ロングトレイル

高知県大川村　田渕　史剛（石鎚山系連携事業協議会事務局）

石鎚山を中心に、東西約 60km に広がる石鎚山系ロングトレイル。歴史や信仰に触れることができ、渓谷美や特有の高山植物など貴重な自然が優しく迎えてくれる。

石鎚山

本トレイルの魅力は、西日本最高峰の石鎚山の主峰天狗岳（標高 1982m）の高さだけではなく、瓶ヶ森、伊予富士、笹ヶ峰などの山々と、変化に富んだ地形、地質、渓谷美、さらに石鎚山系特有の高山植物など、特徴的な自然が広がる多面性にある。

石鎚山は日本百名山の 1 つであり、一帯は国定公園に指定されており、四季折々の美しい景色とともに、原生林や高山植物などが訪れる人々を優しく迎えてくれる。また、石鎚山は日本七霊山の 1 つに数えられる信仰の山で、古来より様々な面で地域住民の生活と密接な関係にあり、今日においても多くの恵みを与えている。今から 1300 年余り前、富士山をはじめ日本各地の霊山を開いた「修験道の開祖」とも言われる役小角という修験者によって開かれ、古くから山そのものがご神体として仰がれていた。７月１～10 日に行われる石鎚神社夏季大祭は、一般的に「お山開き」と言われ、全国各地から、白装束に身をまとった修験者が集まり、山頂を目指す（７月１日のみ､女人禁制となっている)。

その石鎚山を中心に東西にわたって広がる石鎚山系は、瓶ヶ森（日本三百名山・標高 1897m)、伊予富士（日本三百名山・標高 1756m)、笹ヶ峰（日本二百名山・標高 1860m）など、標高 1500m 以上の山々が連峰をなす急峻な地形であり、豊かな生態系と多くの自然環境が残されている。

石鎚山・土小屋登山口の東方にあり、全長 27km に及ぶ「ＵＦＯライン（いの町道瓶ヶ森線)」は、標高 1100～1700m の高地を通る、西日本で一番空に近い高所道路で、石鎚山系沿いを走っており､標高 1200～1900m の各高山を徒歩５分から２時間程度で登頂できる。石鎚山をパノラマで見渡せ、晴れた日には太平洋を遠くに望め、気軽に絶景を楽しむことができる、サイクリストにも人気のコース。唯一水流が四国４県に及び、「四国三郎」と称

される大河・吉野川の源流は瓶ヶ森にある。

ＵＦＯライン

石鎚山の南麓に広がる面河渓は四国最大の渓谷であり、その手つかずの自然は「未来に残したい日本の自然 100 選」や、「水源の森 100 選」にも選ばれており、日本屈指の透明度を誇り、その独特の青い水の色から「仁淀ブルー」と称される、仁淀川の源流となっている。

仁淀川・にこ淵

平家の落人伝説から名付けられた平家平の山頂は、一面の広大なササ原に囲まれて、四国山地の山々を 360 度見回せる眺望は抜群で、晴れた日には瀬戸内海まで見ることができる。巨木ブナが群生する大座礼山を経て、江戸時代から昭和 40 年代まで採掘されていた白滝鉱山の歴史的な遺構を探訪できる、野地峰に至るコースとなっている。

大座礼山・ブナ林

この魅力あふれる石鎚山系を有する愛媛県西条市、久万高原町、高知県いの町、大川村の4市町村が連携・協力し策定した地域再生計画「石鎚山系の魅力発信及び持続可能な資源とする事業」に基づき、石鎚山系に関わる観光振興、環境保全、安全対策等さまざまな取り組みを行い、石鎚山系のブランド価値創造を目指し、有機的、継続的な連携を図るべく、平成29年3月30日に包括連携協定が締結された。その後、多面的に問題点や課題を共有し、登山者や観光客等の目線に即した対策が取れるよう、4市町村だけでなく、行政と民間事業者が一堂に会し、今後の方向性について共通認識を持つ場として、石鎚山系連携事業協議会が平成29年4月26日に設立された。

平成29年度は石鎚山系連携事業協議会として、

①登山者のみならず、石鎚山系とその周辺地域を訪れる来訪者の属性や回遊ルート、目的など、石鎚山系の現状などを把握するための動向調査

②山や道路の状況など、安全確保に資するリアルタイムな情報発信や関連情報を集約化し、石鎚山系の魅力を広く発信するためのポータルサイト開設

③山の難易度を見える化し、登山者の安全確保のため、西日本で初となるグレーディング調査実施と、その調査結果を利用しやすくするため登山アプリ（YAMAP）と連携した、日本初のグレーディングを付したマップを配信

④4市町村にまたがる全長約150kmの上級者向けと、石鎚山系の麓で各地域の魅力を楽しむ初級～中級者向けのサイクリング・コースの設定

⑤現地調査による危険箇所や道迷いポイントの確認による登山者等への注意喚起と各自治体に向けた登山道整備の提言

以上の事業の実施により、石鎚山系ロングトレイルが日本ロングトレイル協会の加盟コースとして承認されるよう取り組んだ。石鎚山系連携事業協議会としての石鎚山系ロングトレイルに関する取り組みはまだまだ始まったばかり。今後はポータルサイト運営によるリアルタイムな情報発信を継続して行うとともに、石鎚山系を学ぶ・感じる・体験する各種イベントの催行、サイクリング・コースのＰＲや、ロングトレイル・コース受け入れ体制のより一層の充実を図り、平成31年度から本格稼働するよう取り組んでいく。

トレイル道標 統一整備プロジェクトについて
～ロングトレイルの普及・振興に向けて～

公益財団法人 安藤スポーツ･食文化振興財団
事務局　荒金 善一

安藤財団では、子どもたちの自然体験活動は、山・川・海など、どのフィールドでも「歩く」ことが基本であると考え、我が国における「歩く文化」の醸成を目指す日本ロングトレイル協会と連携して、ロングトレイルの普及・振興とそのための安全対策のお手伝いをしている。

「歩育」の促進

安藤財団は、1983 年に日清食品の創業者である安藤百福（1910～2007）が設立し、以来、子どもたちの健全な心身の育成のためのスポーツ振興事業と食文化向上に貢献する事業に取り組んでいる。財団での事業を通じて、安藤百福は食育とともに、自然体験活動の中で歩くことの重要性を「歩育」という言葉で説いていた。

2002 年からスタートした「トム･ソーヤースクール企画コンテスト」では、全国からユニークで創造性に富んだ自然体験活動の企画案を募集し、選考の上 50 団体に実施支援金を贈呈、さらに支援団体から提出された実施報告書を基に優秀団体を表彰している。応募していただいた企画は、活動の目標達成に向けて、子どもたちが山に登り、海や川を泳ぎ、キャンプを楽しむなど、自然に囲まれた環境の中で活発に歩き回る内容が多くを占めている。歩くならできるだけ自然が多い場所が良いと言われており、歩いて体験活動を行うことによって、子どもたちの協調性や創造力、自活力を養うのが「歩育」である。

これまでの 16 年間で、「トム･ソーヤースクール企画コンテスト」への応募団体は 2,600 団体を超え、およそ 59 万人の子どもたちが活動に参加した。そのうち、720 団体に実施支援金を贈呈し、22 万人以上の子どもたちがその支援の下で活動を行っており、安藤財団は長年にわたり「歩育」を促進している。

プロジェクトの始まり

3 年ほど前に、安藤理事長から「山の中には、さまざまな形や材質の道標が混在し、また朽ちたものも多くあり、景観を乱している。道路標識のように道標の整備、統一化はできないものか？」との話があった。また、2017 年 2 月に開催された第 4 回ロングトレイルシンポジウムで、理事長は「歩くことを通じて、我が国が安心・安全な国、素晴らしい国であることを広く世界に発信し、財団はその下支えができればよいと考えている。道標の整備、統一化をはじめとして、安全性の確保について貢献していきたい」と挨拶した。以来、財団の新たな取り組みとして「道標整備プロジェクト」がスタートした。

思いつくままに、道標の現状について書いてみた。

① 設置者、デザイン、材質、表示の仕方がさまざまである。
② 向きがおかしいものがある。
③ 支柱から案内板が外れて地面に落ちている。
④ 多言語対応ができていない。
⑤ 類似した道標が乱立している。
⑥ 朽ちて、倒れているものがある。
⑦ 文字が消えていたり、正しい方向が分からない道標がある。
⑧ 無許可の道標が多い。

つまり、統一感がなく、メンテナンスのできていない道標が多い。

また、2018 年 4 月から、山と自然ネットワーク Compass が行っているアンケートで、道標について以下のとおり利用者から多くの意見が寄せられている。

・道標は、初心者には心強い。
・矛盾するが、自然に溶け込みつつ、目立つものがよい。
・デザイン、色を統一してほしい。
・道標は自然になじんでいた方がいいと思うが、登山者が増えているので、誰にでも分かるように目立つのがいいと最近は感じている。
・登山者が少ないコースに道標を増やしてほしい。
・正確・シンプル・耐久性のある道標を全国に広めてほしい。
・地図を見ない、読めない登山者が増加。より一層必要、重要になっている。
・道標を見ると安心する。
・自然に溶け込む道標は、初心者のみならず見失うことがある。
・目立たなくては意味がない。
・道標の役割を考えれば目立つ方がよい。
・壊れているものは、すぐに直してほしい。

環境省　「自然公園等施設技術指針」で書かれていること

国土交通省が管理している道路標識は、全国隅々まで統一されていて、交通事故の発生防止のため重要な役割を果たしているが、里山や山岳地域においても道標を整備、統一することは、安全・安心な登山やハイキングを行う上で大切なことだ。

平成 29 年 6 月、警察庁生活安全局が発表した「平成 28 年における山岳遭難の概況」の中で、山岳遭難発生数 2,495 件のうち、遭難事故の原因の 40%近くが「道迷い」と報告されており、統計を取り始めた当初から山岳遭難の原因のトップになっている。山での遭難事故を減らすために、登山道の分岐点や迷い易い所に、適切に方向を指示する道標を設置することが重要であり、さらに同一山域において、コース上の道標デザインが統一されていれば、ハイカーや登山者は安心感を持って気持ち良く歩くことができると思う。

環境省自然環境局が発表した「自然公園等施設技術指針（平成 25 年 7 月制定）」には、道標について詳細な規定が示されている。この指針は、国立公園や国定公園、都道府県立自然公園等の施設の計画・設計に適用するものであり、その中で案内標識（誘導標識）の部材の使用にあたっては、①木材を使用する、②長寿命化対策を検討する、③自然景観、自然環境を著しく損なわない、の 3 つの条件が定められて、推奨する案内標識の図が掲載されている。

腐朽、割裂、風化等による劣化が速い木材の長寿命化対策として、「自然景観に影響を及ぼさない範囲で、強度や耐久性で優れる人工材料の使用を検討するが、視認性の高い部位や人の手に触れる部位は、木材を使用することが原則である」と明記されている。人工材

料は、土に接していたり、水や雪に浸かる部分の使用に限定されていて、地上部の部材は、原則木材の使用が求められている。私は自然景観を著しく損なわないのであれば、道標のすべての部位に人工材料を使うことにより、さまざまなメリットが享受できるのではないかと考えている。

安藤財団が提唱する統一道標について

安藤財団が提唱する統一道標についての考え方、製作コンセプト、使用部材は以下のとおりである。

A.統一道標の考え方

① 広域合意形成が可能な山域において、道標デザインの統一整備を提唱する。
② 景観や自然環境に配慮した違和感のないデザイン（構造、色彩、表示内容）とする。
③ 表示板は、日本語、英語の併記を原則とする。
④ 量産可能で、軽量で安価なものとする。
⑤ 緊急時に目印となる工夫をする。
⑥ 製作、運搬、設置の費用を賄うため、「スポンサー名付き道標」とする。

B.製作コンセプト

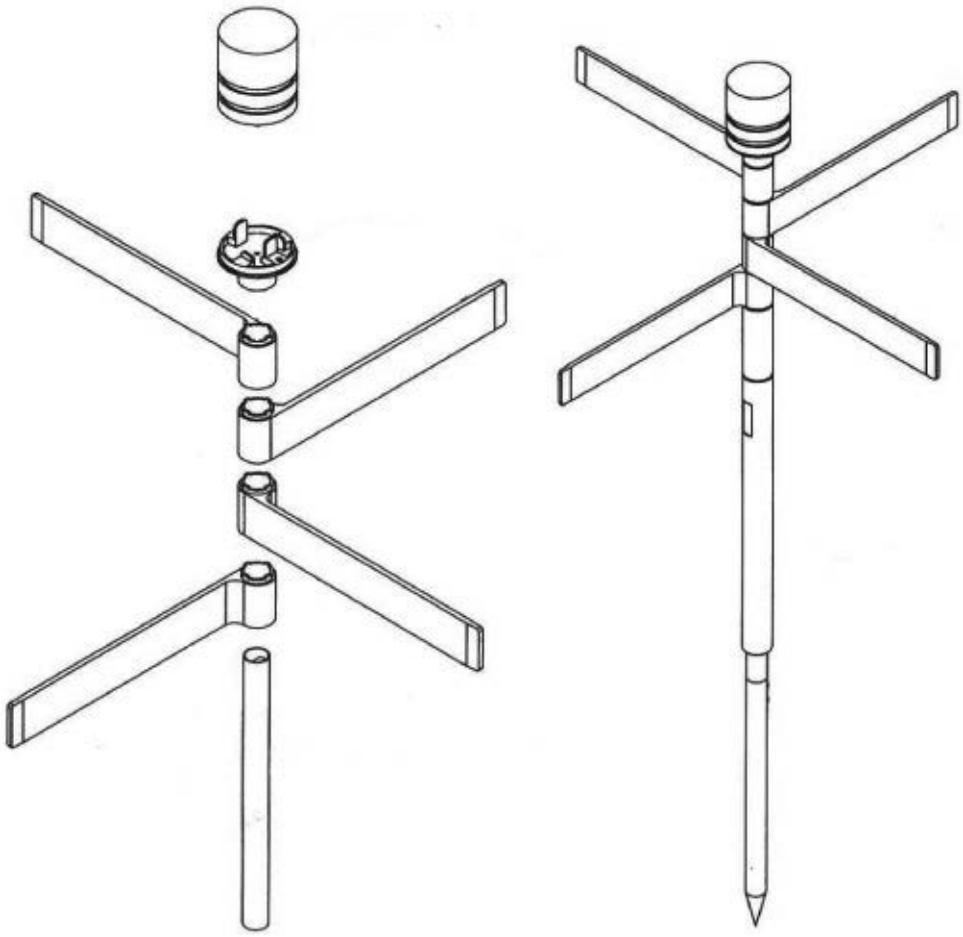
① 目印になる頂部、方向指示板が取り付けられる中間部、支柱部の 3 つの要素で構成し、配送・運搬時はコンパクトになるようにする。
② 設置場所に合わせて方向指示板の枚数やシステムユニットの取り付けを選択できる、フレキシブルな組み立ての仕組みを採用する。
③ 支柱部と中間部は、景観色の「焦げ茶」系の色彩とし、頂部は視認しやすいよう原則「白色」とする。
④ 色彩について、すでにルールがある場所は、そのルールに対応できる仕様とする。頂部、腕木（方向指示板）には、ルート色を表現できるようにする。支柱部は、より自然景観に添うように木の幹のような質感･手触りを付ける。

C.使用部材

本体（頂部、中間部、支柱部）と腕木の部材は、ウレタンウッド（擬木）を採用することとした。支柱部は強度を保つため鋼管を入れ、地中部は鋼管を使用する。ウレタンウッドの道標は、以下のとおりの特長がある。

① 天然木の温もり、木目、質感をリアルに再現できる。
② 耐久性がある（現在、浅間山、那須岳にて 2 シーズン目の実証実験中）。
③ 量産可能で安価（1 基 14 万円程度）である。
④ 木材と同様にクギ打ち、ネジ止め、接着が可能である。

⑤ 自由な塗装が可能。
⑥ 腐り、割れ、ささくれが発生しない。
⑦ 軽量（1基 10kg 程度）である。
⑧ パーツに分かれ、コンパクトな運搬ができる。



統一道標 整備の支援について

現在、群馬県環境森林部と京都府中丹広域振興局がそれぞれ中心となって、新しく整備を進めているトレイルがあり、そこに安藤財団が提唱する道標を設置する計画を進めている。群馬県が整備を進めている「ぐんま県境稜線トレイル（全長 100km）」では、今回 10km の整備区間に 11 基の道標が、また京都府の「大江山連峰トレイル（全長 84km）」では、16km

を整備し 10 基の道標が、登山道の分岐点や迷い易い所、山頂等ポイントとなる地点を中心に設置される予定である。

安藤財団は、NPO 法人日本ロングトレイル協会に加盟、または加盟予定の全国のトレイル運営団体を対象に、道標製作支援を求める団体を募り、安藤財団が提唱する道標を 10 基以上製作する場合の費用の一部助成について協会を通じて実施し、このプロジェクトを推進していく計画である。新たにトレイルを整備する場合や、朽ちた道標を取り除いて不揃いな道標を統一する場合に、このプロジェクトを活用していただき、迷いやすい地点での道標の設置を増やし、ハイカーや登山者が安心感を持って歩くことができるようになれば良いと思う。

安藤財団は、この統一道標の整備支援事業を通じて、微力ながら山岳遭難の原因のトップを占める「道迷い」防止に向けた安全対策事業に貢献していきたいと考えている。

昆虫が生息しやすい環境を整備

「みんなで作ろう！小諸昆虫 100 種大図鑑
小諸絶滅危惧種ビオトープ プロジェクト」

長野県小諸市には、多種多様な動植物が生息・生育しており、なかには絶滅危惧種もいる。そこで日清食品グループは、グループの CSR 活動「百福士プロジェクト」の第 19 弾として、安藤百福センターの敷地内にビオトープ*1 を造成することで、昆虫が棲みやすい環境を整える活動を 2017 年 11 月に開始した。このビオトープに来る昆虫の記録として、また、一般の方の生態系に対する関心を喚起するため、合計 100 種の昆虫の写真を集めたデジタル昆虫図鑑を 2018 年 5 月末から制作していく。

長野県内の生物多様性の現状

生物多様性とは、生物同士の繋がりのこと。すべての生物は直接的・間接的に支え合って生きている。食料や水、気候の安定をはじめ、私たちの暮らしは生物多様性の恩恵によって成り立っている。

長野県には、県内とその周辺地域にのみ生息、生育している固有種が数多く存在し、種や生態系レベルで高い多様性が見られる一方、「長野県版レッドリスト (動物編) 2015 年」(絶滅のおそれのある野生生物のリスト)では、絶滅危惧種 614 種を含む計 774 種のうち昆虫類が 586 種を占め、多くの昆虫の生息が脅かされている。

生物多様性の保全策

こうした背景から、生物多様性の保全を目的に、日清食品グループは長野県小諸市にある安藤百福センターの敷地内にビオトープを造り、小諸市に生息する絶滅危惧種をはじめとする昆虫が棲みやすい環境づくりをしている。

昆虫写真家で日本昆虫協会理事の海野和男氏監修のもと、2017 年 11 月 10 日から 3 日間、日清食品グループの社員有志 23 名と地元のボランティア 6 名の合計 29 名でビオトープ造成場所の草刈りや土地の整備をした。その後、クワガタやカブトムシが棲みやすいよう丸太の積み木作製と落ち葉掃き、カミキリムシの棲処づくり、池の土掘りなどを完了させた。

また、海野氏による小諸市の自然環境と絶滅の懸念がある蝶に関する講義も実施した。

2017 年 11 月の造成作業の様子

2018 年度の活動

2018 年度にも引き続きビオトープを造成していく。まず、5 月 12 日に開催されるツリーハウス・イベント「森の生きものがたり」の中で、グループ社員と一般参加者でビオトープに草花を植栽する。これ以外に、昆虫の住処となる「昆虫ハウス」づくりと、ビオトープでの昆虫撮影会も開催予定。3 つの企画は、監修である海野氏と造園家の河合嗣生氏を迎えて実施するもので、子どもを含めどなたでも楽しく草花や昆虫に接することができるプログラム設計をしている。また、安藤百福センター来館者にビオトープ周辺に来た昆虫の写真を撮影してもらう企画を 5 月末から開始し、集まった合計 100 種の昆虫写真によるデジタル昆虫図鑑を制作していく。

小諸市内に生息するチョウなどの昆虫をはじめとした絶滅危惧種の保護対策を一層推進するため、日清食品グループは、長野県、長野県小諸市、安藤百福センターと「生物多様性保全パートナーシップ協定*2」を 2018 年 5 月に締結する予定だ。生物多様性の保全をはじめ、地域社会への貢献、持続可能な社会の実現へ向けた体制構築に 4 者が連携して取り組んでいく。

2018 年 11 月にもビオトープの整備活動を実施する予定がある。今後も社員や一般の方

が参加できる企画を開催していくことで、生物への関心を喚起し、生物多様性の保全を図っていきたい。

*1 ドイツ語の「BIO」(生きもの)と「TOP」(場所)から成る合成語で、その中で地域の野生の生きものが生息、生育する空間。

*2 長野県内の自然環境や生物多様性の保全活動に、市民団体と企業・学校などが協働して取り組むことを約束したもの。

■関連情報

□ウェブサイト

・~みんなで作ろう！小諸昆虫 100 種図鑑～小諸絶滅危惧種ビオトープ プロジェクト
https://www.nissin.com/jp/about/csr/hyakufukushi/019_biotope/

・日清食品ホールディングス、長野県、長野県小諸市、安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター間による「生物多様性保全パートナーシップ協定」
https://www.nissin.com/jp/news/6955

・デジタル昆虫図鑑
http://www.momofukucenter.jp/biotope/

□日清食品グループが取り組む背景

日清食品グループは、社会貢献活動に情熱を注いだ創業者・安藤百福の志を継ぎ、50 年間に 100 の社会貢献を行う「百福士プロジェクト」を 2008 年から実施している。江戸時代、外交使節団の代表を「正使」といい、正使の下で働く人を「副使」と呼んだ故事にならい、安藤百福の志を継ぐ社員を「百福士」と名付けた。「百福士プロジェクト」は、「創造」「食」「地球」「健康」「子どもたち」の 5 つを活動テーマに掲げている。ビオトープ・プロジェクトはその第 19 弾で、「地球」をテーマにしたプロジェクトである。

日清食品ホールディングス㈱
広報部 CSR 推進室

事業報告

ロングトレイルのつくり方講座

ロングトレイルが注目され、各地でその整備や制作が行われると同時に、検討も進んでいる。そこで、ロングトレイルを構想段階から整備、さらには運用まで体系的に考察し、整備に携わる人材の育成を行う講座を開催した（計 3 回）。

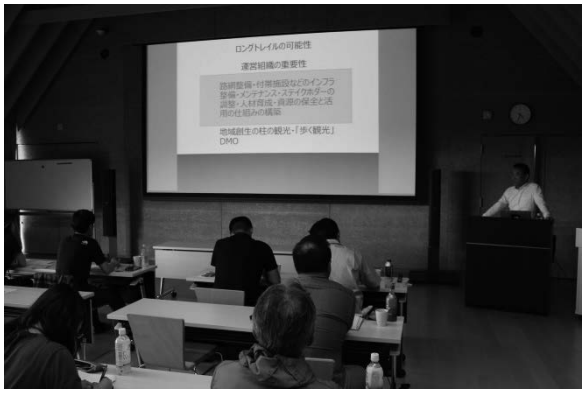
■各回共通

対　象：ロングトレイルを整備・制作したい自治体や団体、観光協会など
定　員：20 名
参加費：各 7,500 円（2 日間の講習代、宿泊代、食事代込み）
　　※第 3 回は 1,000 円（講習代のみ）
主　催：安藤百福センター
共　催：NPO 法人日本ロングトレイル協会
会　場：安藤百福センター

第 1 回「ロングトレイル概論」

日　程：2017 年 9 月 21 日（木）13 時～22 日（金）14 時 30 分
参加者：12 名
講　師：中村 達（安藤百福センター センター長／日本ロングトレイル協会 代表理事）
　　節田 重節（日本ロングトレイル協会 会長）
　　木村 宏（北海道大学 特任教授／日本ロングトレイル協会 常務理事）
　　村田 浩道（高島トレイルクラブ 代表理事／日本ロングトレイル協会 事務局長）

第 1 回は、ロングトレイルとは何か、なぜ注目を集めているのかを理解するとともに、魅力的なトレイルコースを設定する方法を学ぶ。
はじめに安藤百福センター センター長の中村達より、ロングトレイルの現況について、国内外のトレイルの紹介も含めて、2 時間半に及ぶ白熱の講義が展開された。



続いて、北海道大学特任教授の木村宏氏より「魅力あるトレイルとは」というテーマで話を伺った。信越トレイルやみちのく潮風トレイルの例などを基に、何がハイカーを惹き付けるのかを探った。

2 日目は、信越トレイルと高島トレイルをケーススタディとして、魅力的なトレイルコースの設定方法について検討した。いずれも先進的なトレイルであり、これからコース設定を考える上で多くの示唆があった。

最後に総括質疑の時間を設け、これまでの振り返りと質疑応答を行った。概論としては盛りだくさんの内容であり、参加者にとっては学びの多い時間となったようだ。

第 2 回「観光とロングトレイル」

日　程：2017 年 11 月 16 日（木）13 時～17 日（金）14 時 30 分

参加者：16 名

講　師：相原 稜（観光庁観光地域振興部観光資源課 係長）

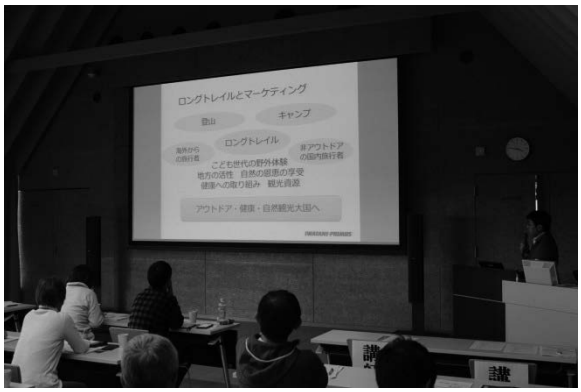
加茂 卓也（イワタニ・プリムス 取締役商品部長）

神長 幹雄（山と溪谷社 編集者）

手塚 友惠（全国山の日協議会 理事・事務局長）

米川 正利（八ヶ岳スーパートレイルクラブ 理事長）

第２回は、ロングトレイルが地域の観光にいかに寄与するかを学ぶとともに、トレイルの設定から開通までの流れを習得する。はじめに観光庁の相原稜氏より、国としての取り組みについて講義があった。



続いて、イワタニ・プリムスの加茂卓也氏より、産業界の取り組みについて、最近のトレンドを交えて説明があった。マーケティングの話もあり、示唆に富む内容となった。

さらに、山と溪谷社の神長幹雄氏より、アウトドア・トレンドとロングトレイルをテーマに話を伺った。メディア関係者から見たロングトレイルの可能性についても、多くの学びがあった。

初日の最後は、全国山の日協議会の手塚友惠氏より「登山とロングトレイル」をテーマにお話しいただいた。登山ブームがロングトレイルとどう繋がるか、希望の持てる内容となった。

2 日目は、八ヶ岳山麓スーパートレイルと浅間･八ヶ岳パノラマトレイルをケーススタディに、トレイルの設定から開通までの流れを見ていく。開通までには、地元の関係機関との調整、地権者との交渉、道標の設置など、クリアしなければならない課題が多いことが分かる。

最後に、これまでの振り返りと質疑応答を行った。ロングトレイルは観光面での期待が大きいが、整備して開通させるためにはクリアすべき課題も多いことが分かったのではないか。

第 3 回「海外のロングトレイル」

日　程：2018 年 2 月 25 日（日）9 時 30 分～12 時 30 分

参加者：31 名

講　師：岡野 隆宏（環境省自然環境計画課 保全再生調整官）

節田 重節（日本ロングトレイル協会 会長）

田川 宏規（広島湾岸トレイル協議会 会長）

村田 浩道（高島トレイルクラブ 代表理事／日本ロングトレイル協会 事務局長）

根津 貴央（アウトドアライター）

第 3 回は、海外の先進的な事例から、日本でトレイルを整備・運用していく際のヒントを探る（ロングトレイルシンポジウムの翌日開催）。

はじめに環境省の岡野隆宏氏より、国内における長距離自然歩道の整備・管理運営の状況について話があった。

続いて「海外のロングトレイル」をテーマにパネルディスカッションを行った。日本ロングトレイル協会の節田重節氏とアウトドアライターの根津貴央氏が海外事情を説明し、それに対して広島湾岸トレイルの田川宏規氏と高島トレイルの村田浩道氏がコメントする形で進行した。

フロアの参加者を交えたやり取りもあったが、2 時間では足りないほどの盛り上がりとなった。

2017 年度の講座はこれにて終了。次年度は、トレイルをいかに運営していくかという視点で、3 回の講座で学ぶ予定である。

2017 年度 ロングトレイルハイカー入門講座（共催事業）

ロングトレイルに興味がある人の最初の一歩として、歩き方や楽しみ方などを体系的に学べる連続講座を実施した（安藤百福センター共催事業）。机上講習と実習を組み合わせ、ロングトレイルについてより深く理解してもらえるよう、2 日間の構成とした。

第 1 回「事前準備と歩き方を知ろう」

日　程：2017 年 6 月 10 日（土）～11 日（日）

内　容：1 日目（机上）：ロングトレイルとは何か、計画、装備の基本、歩き方（ストックワーク含む）

2 日目（実習）：浅間･八ヶ岳パノラマトレイル「千曲川コース（約 15km）」

参加者：19 名

昨年度に引き続き、ロングトレイルについて基礎から学ぶ講座を開講した。まずは日本ロングトレイル協会会長の節田重節氏による、ロングトレイルについての講義。日本のロングトレイル・ブームに始まり、世界各地のロングトレイルの紹介など、内容は多岐にわたった。

続いて山口章氏による「ロングトレイルの歩き方」。前半は準備編として、ロングトレイルを歩く際に調べておくべきことや、持って行くべき物などを教わる。実際に講師が持ち物を見せながら解説したことで、分かりやすかったようだ。

後半は実践編として、ストックを使った歩き方を学ぶ。まずは階段の上り下りで使用してみる。講師からアドバイスを受け、慣れてきたところで敷地内の散策路を歩いた。15 分ほどではあったが、使ったことのない参加者も感覚をつかめたようだ。

夜は夕食と懇親会を兼ねて、ウェーバーを使ったビア缶チキンや、ダッチオーブンで作ったポークトマトシチューなどで乾杯し、交流を深めた。

2 日目は実習。浅間･八ヶ岳パノラマトレイルの千曲川コース（15km）を歩く。アップダウンの多いコースだが、天気に恵まれ足取りは軽い。

道端には、御牧ヶ原の名産、白土馬鈴薯（はくどばれいしょ）の花がちょうど咲いていた。このあたりの雨の少ない気候と強粘土質の土が、ジャガイモの旨みを引き出すという。

懐古園は、小諸城跡に明治時代に造られた公園。小諸城の特徴である、城下町より低い位置に城を築いた「穴城」は、日本唯一と言われている。
ここで昼食休憩。遠方からの参加者が多く、昼食後に園内を散策する姿も見られた。

このコースの最大の見どころは、氷集落にある風穴。特別に中に入らせてもらうと、「涼しい！」と歓声が上がる。天然の冷蔵庫を体験し、ゴールへと向かった。

第 2 回「天気と地図の読み方を学ぼう」

日　程：2017 年 7 月 22 日（土）～23 日（日）
内　容：1 日目（机上）：読図、コンパスワーク、気象
　　2 日目（実習）：車坂峠～高峰山～水ノ塔山～篭ノ登山～池の平（約 9km）
参加者：17 名

第 2 回のテーマは「天気と地図」。どちらのテーマとも興味を持つ参加者が多く、真剣に取り組む姿勢が見られた。今回のためにコンパスを購入したという参加者もおり、意欲が感じられる。

地図の読み方講座では、実際にコンパスを使用し、地図を基に目標物を探す。プレートコンパスを使うのは初めてという参加者もいたが、無事に目標物を見付けることができた。
天気の講座では、天気の仕組みに始まり、雲の特徴や季節ごとの山の天気の特徴などを教わった。スマートフォンで使える天気アプリの紹介もあり、早速、インストールする参加者もいた。

後半には、日本ロングトレイル協会代表理事の中村達氏の講義があり、第 1 回に続いてトレイルについての知識を深めた。

第 2 回の懇親会のメニューは、地元の豚を使ったスペアリブやジャークチキン、ジャンバラヤなど。参加者たちはよく飲み、夜遅くまで話し込んだ。

2 日目は車坂峠から水ノ塔山、篭ノ登山、池の平までの縦走に挑戦。晴れていれば 360 度のパノラマが楽しめるはずが、あいにくの天気で山は霧に包まれ、展望はおあずけ。

コンパスを使う実習はできなかったが、雨の中を歩くという、普段１人ではできない経験ができて良かった、という声もあった。

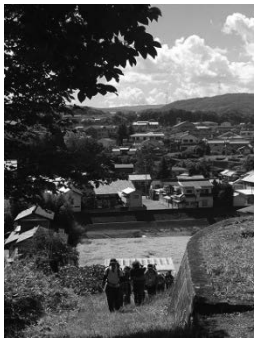
第３回「トラブル対処法を身に付けよう」

日　程：2017 年 9 月 9 日（土）～10 日（日）
内　容：1 日目（机上）：救急法、セルフレスキュー
　　2 日目（実習）：春日温泉～望月宿～安藤百福センター（約 20km）
参加者：10 名

第３回のテーマは「トラブル対処とファーストエイド」。参加者にこれまで経験したトラブルについて質問してみると、道迷いや滑落など、かなり経験していることが分かった。

他人事ではないぞ、と講義中こまめにメモを取り、講師の説明に聞き入る参加者たち。テーピングは時間の関係で学ぶことができず、残念だったという声が多かった。後半には、第 2 回同様、日本ロングトレイル協会の中村達代表理事より、国内や海外のトレイルの紹介があった。

懇親会は、前回までと趣向を変え、屋外で行った。杉の板を使ったプランクバーベキューで鶏肉を焼くと、しっとりと仕上がり、参加者からは感動の声が挙がった。
ほかにも自分で揚げる串カツやバーニャカウダなど、セルフサービスの料理を立食形式で楽しんだ。



2 日目は、浅間･八ヶ岳パノラマトレイルの蓼科コースに挑戦だ。約 20km のコースで、春日温泉から安藤百福センターまでの道のりを、歴史を繋ぎながら歩く。

かつての勅旨牧の 1 つだった望月。満月（望月）のころに朝廷に馬を献上する「駒牽の儀」において、優秀な馬を多く輩出したことからその名が付けられたという。そのため、マンホールには馬がかたどられている。

望月は石仏の里でもある。祠を含めると 3,000 体を超えると言われており、道のあちこちに道祖神や庚申塔などが立っている。「万治の石仏」と呼ばれる大日如来像は、同じ名前の下諏訪の石仏と比べると高さ 60cm ほどと小さく、可愛らしい。

きつかった！という声もあったが、そのぶん達成感はひとしお。天気に恵まれ、満開のそば畑やコスモスの花、黄金色に輝く稲穂など、里山の秋の景色を楽しむことができた。

第 4 回「ロングトレイルを縦走しよう」

日　程：2017 年 10 月 21 日（土）～22 日（日）

内　容：1 日目（実習）：センター～糠地～みはらし交流館（約 7km・テント泊、料理）

2 日目（実習）：みはらし交流館～深沢渓谷～高峰温泉～高峰高原ホテル（約 10km）

参加者：14 名

第 4 回はロングトレイルの縦走に挑戦！　早速テントを担いで出発だ。1 日目はみはらし交流館までの約 7km を歩く。台風が近づいており、雨風が予想されたが、幸い夜まで雨に降られずに済んだ。

1 日目の見どころは、押出集落のだんご石。周囲約 22m、高さ約 5m の巨石で、重量は 100 t 以上と言わる。1,625 年（寛永 2 年）の洪水「戌の満水」で流れ着いたものだそう。

みはらし交流館に到着後、それぞれ思い思いの場所にテントを張る。テント泊が初めてという参加者もおり、夜が待ち遠しい。

夕食は、ピザ釜で焼く手作りピザだ。思い思いのトッピングを載せ、オリジナルピザで楽しく乾杯。
ほかにもプランクで焼いたサーモンや、山形県の内陸風と庄内風の芋煮をそれぞれ食べ比べしながら歓談した。

前日の夜から雨が降っていたが、2 日目も決行。
アルミホイルでくるんだサンドイッチを牛乳パックに入れ、火をつけて温めるカートンドッグで朝食を済ませた。

雨が降り続く中、小諸市内で一番小さな集落や深沢ダムを通り、深沢川沿いに樹林帯を抜けていく。このあたりからは上信越高原国立公園にもなっており、大自然を感じながら歩く。

2 日目の目玉はねんぼう岩。直径約 9m、高さ約 30m の岩が眼前に現れると、参加者からは驚きの声が上がった。
前日に見ただんご岩は、この辺りから流されていったと言われており、ねんぼう岩のそばには、だんご岩がすっぽり入る大きさの穴があるという。

そこからはカラマツ林の登山道。途中に旧高峰温泉の跡地があり、往時の様子を物語っていた。雨のため行程を変更し、今回は高峰温泉まで。先ほど見聞きした旧高峰温泉の物語に思いを馳せながら体を温め、解散となった。

第 5 回「雪のトレイルを歩こう」

日　程：2018 年 2 月 17 日（土）～18 日（日）
内　容：1 日目（実習）：アサマ 2000 ～水ノ塔山～高峰温泉～アサマ 2000（約 4km）
　　2 日目（実習）：アサマ 2000 ～高峰温泉～高峰山～車坂峠～車坂山～アサマ 2000（約 4.5km）
参加者：14 名

1 年間続いた講座も、今回が最終回。テーマは「雪のトレイルを歩こう」、スノーシューだ。1 日目は水ノ塔山を目指す。あいにく小雪が舞っていたが、スノーシューを装着して出発！　歩き始めると、降ったばかりの雪がふかふかと柔らかい。自分のスノーシューに躓きながらも、次第に慣れていく。

山頂までは 2 時間ほどの行程だ。晴れていれば見えたはずの山々に思いを馳せながら、昼食休憩をとった。
スノーシューの楽しさは、なんといっても下り道！
最初は恐る恐るだった参加者も、終いには足跡 1 つない斜面を勢いよく駆け下り、下山した。

夜は地元の食材で乾杯。ワインの搾りかすで漬けたチーズや、信州白鶏の鶏胸ハム、小諸商工会議所考案の「こもろんみそ」を付けだれにして食べる水炊き鍋などで親交を深めた。

2 日目は高峰山・車坂山スノーシュー・トレッキング。
1 日目よりも軽い足取りで、高峰山へ向かう。
快晴のなか、かすかに見えた富士山に元気をもらい、2 時間ほどかけて山頂到着。
高峰山の山頂にある高峰神社でお参りを済ませ、少し戻った所で昼食休憩とした。

道のあちらこちらには、きれいな風紋や雪庇ができていた。ときおり足を止めては、自然が作り出す芸術作品を目に焼き付ける。

車坂峠まで下りてくると、登山口にある鳥居が足元に顔をのぞかせていた。改めて雪の深さを感じながら、車坂山へと向かった。

車坂山からの下りは、滑り台のように滑って下る。ふかふかの新雪で思ったように滑らず、雪まみれになったのを払い落とし、樹林帯へ入っていった。

ここから先は自由に歩いていいですよ、との講師の声に、思い思いに足を運ぶ参加者たち。一面の新雪に我先にとトレースを付けて歩いていく。思い切って走り出す者、勢い余って転ぶ者。全身で新雪を満喫しながらの下山となった。

これにて、2017 年度、5 回にわたったトレイル講座はすべて終了した。好評のため、引き続き次年度も開催する。

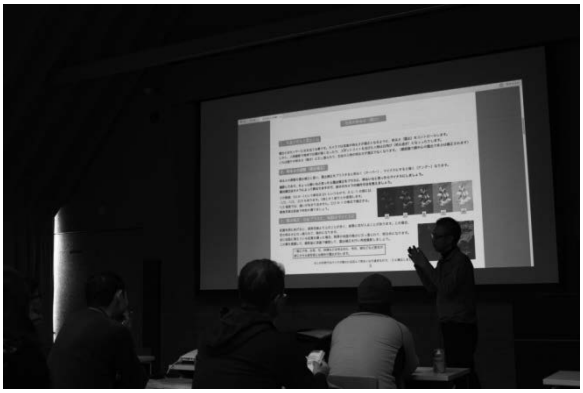
その道のプロが教える「大人のトレイル歩き旅講座」

ロングトレイルで活動するガイドやハイカーを対象として、幅広い楽しみ方が学べるトレイル版カルチャー・スクールを開催した。2017 年度のテーマは、写真、自然、料理の 3 つ。それぞれ地元で活躍するプロフェッショナルにご協力いただき、新企画としてスタートした。

主催：安藤百福センター
後援：NPO 法人日本ロングトレイル協会、小諸市、（一財）全国山の日協議会

■第 1 回「実践！相手に伝わる風景撮影術」

日　程：2017 年 2 月 3 日（土）～4 日（日）
講　師：山本 啓一（一般社団法人日本写真講師協会認定講師、公益社団法人日本写真協会会員、フォトマスター検定エキスパート）
参加者：17 名（定員 20 名）



序盤は講師の撮影した美しい風景写真を見る。「自分たちもこういったインパクトのある写真を撮ってみたい」と、撮影のモチベーションが高まる。相手に伝わるためには、どのようなことを意識した方がよいのか、丁寧に解説していく。

レクチャーの後は実践。浅間･八ヶ岳パノラマトレイルの布引観音コースを歩く。キンとした冬の空気が心地よい。歩きながら思い思いの場所で撮影を行い、講師にアドバイスを求める姿も見られた。

センターに戻り、参加者がトレイルで撮影した写真を１枚ずつ投影。講師から良い点、改善点などのコメントをもらう。翌日のフォトコンテストに向けて参考にする。

2 日目は、近くの鴇久保集落やセンターの散策路を歩いた。ビオトープ、神社、アート作品など、テーマを変えて撮影。空気が澄み渡り、遠くの山並みから足元の自然まで輝いて見えた。

フォトコンテストを行うため、各自最高の 1 枚を選んでプリントアウト。写真の意図が最も伝わった優秀者を決め、伝わるために意識することを全員で再確認。これからの風景撮影が楽しみになる予感とともに、講座は幕を閉じた。

【参加者撮影例】

■第 2 回「自然の見かたが変わるネイチャートレッキング」

日　程：2018 年 3 月 10 日（土）～11 日（日）

講　師：杉山隆（OctoberDeer 代表、信州登山案内人）

参加者：18 名（定員 20 名）

「自然の見かたを変える」をテーマにレクチャー開始。アイスブレイクで緊張をほぐした後は、哺乳類の基礎知識について、クイズを交えながら学ぶ。

フィールドワークで森の中へ。特にフィールドサインを意識しながら歩き、野生動物の生活スタイルや、生き残るための生存戦略を読み解いていく。身近な自然に、これほどのドラマがあるのかと感心。

センターに戻り、事前に仕掛けておいたセンサーカメラを確認。そこには動物の姿が。タヌキやハクビシンのようだ。

10 種類近くの動物の骨と皮。雨や寒さから身を守るため、獲物を捕らえるため、木の実を食べるためなど、生きていくために必要な構造になっていることがよく分かった。

2 日目は、センターの散策路でフィールドワーク。普段なにげなく眺めているケヤキも、よく見ると動物が木登りした跡を発見できる。フィールドサインのポイントを押さえておくと、動物の生態や自然の奥深さを知ることに繋がると感じた。

最後は自分が不思議に思った自然現象（例えば木の形や、生き物の痕跡など）について、各自で仮説を立て、なぜそうなったのかを推理。自然の見かたを変えるには、目の前の自然について疑問を持つことが大事だというアドバイスが、参加者の心に響いたようだ。森の生き物をとことん感じる 2 日間だった。

■第 3 回「シェフから学ぶソトゴハン」

日　程：2018 年 3 月 17 日（土）～18 日（日）

講　師：鴨川知征（イタリア料理シェフ、浅間兄弟代表）

参加者：19 名（定員 20 名）

よくあるアウトドアの達人が行う講座ではなく、「食のプロ」を招いたトレイル料理講座を開催。軽量化やパッキング方法も大事だが、いかにおいしいごはんを食べるかを意識した、シェフならではの工夫が盛り込まれていた。

ひと通りの考え方を学んだ後は実践。各自でワンバーナー料理にチャレンジした。パスタのゆで汁を捨てない工夫や、応用の利く食材の選び方にも、プロのこだわりが感じられる。

【料理体験】

・早ゆでマカロニ　鮭とば　干し椎茸のクリームソース　大人風（左）

・オリジナル・トレイル・ミックスバー（中）

・イタリアン基本レシピのソフリットとアーリオオーリオ（右）

夕食では、仕込んだ基本レシピを活用して、パスタやリゾットを作った。ＢＢＱ料理も加わり、参加者同士のコミュニケーションを図る時間となった。

朝食はクイック茶粥を作った。軽くて傷みにくい食材をフル活用。しかもさっと作れるので、家ごはんでも試してみたい、という声も。

小春日和の下、千曲川コースの一部をアレンジして懐古園へ向かう。風穴や養蚕の古民家、浅間山の噴火跡などの自然や歴史を感じながら、ランチを楽しみにぶらぶら歩く。

懐古園に到着し、最後のワンバーナー料理に挑戦した。信州のそば粉を活用したそばがきに、用意してきたミートソースを載せた、お手軽かつ栄養豊富な一品。トレイルを歩く楽しみとして、やはりおいしいごはんは欠かせないものだ、と再確認した講座となった。

浅間･八ヶ岳パノラマトレイル
千曲川コースオープニングイベント

みんなで初夏のトレイルを歩こう！

浅間･八ヶ岳パノラマトレイルで 5 コース目となる「千曲川コース（約 15km）」が正式に開通した。千曲川流域のダイナミックな地形がたっぷりと味わえ、適度なアップダウンも楽しめるコースだ。オープンを記念して、地元の方 17 名と一緒に初夏のトレイルを歩いた。

日　程：2017 年 6 月 3 日（土）8:45～15:00
行　程：懐古園出発→小山敬三美術館→大久保→氷→安藤百福センター→鴇久保→御牧ヶ原台地→干間無池→岩根の断崖→小諸大橋記念公園（昼食）→久保→戻り橋→懐古園→小諸駅解散
参加者：17 名、スタッフ 2 名
参加費：500 円（マップ代、保険代含）

■活動の様子

穴城として有名な懐古園からスタート

新緑の森を抜けて千曲川へ

御牧ヶ原台地を望む田園地帯

天然の冷蔵庫「風穴」で冷気を体感

多様な生き物が生息する鴇久保ビオトープ

400 ものため池が点在する御牧ヶ原

今は使われていない崖沿いの道

トレイル脇にそびえ立つ岩根の断崖

快晴で浅間連峰も楽しめた

最後の上りを頑張り、懐古園でゴール

山の日記念 登山イベント

みんなでダイヤモンド浅間を見に行こう！

8 月 11 日の「山の日」に、地元の山に親しみ、山への感謝の機会をつくろうと、「ダイヤモンド浅間」を見に行くイベントを企画。浅間山の山頂と朝日が重なり、ダイヤモンドのように輝く神秘的な現象をひと目見ようと、地元を中心に多くの申し込みをいただいた（山の日以外にも 1 日設定：両日で 72 名）。残念ながら両日ともに雨のため中止と判断したが、イベントに対する期待値の高さに驚く結果となった。

■企画内容

日　程：2017 年 8 月 11 日（金・祝）、8 月 26 日（土）

行　程：高峰高原ビジターセンター→槍ヶ鞘/トーミの頭→高峰高原ビジターセンター

申込数：第 1 回 36 名、第 2 回 36 名

参加費：500 円（保険代込み）

■ダイヤモンド浅間の絶景（イベントとは別日の 8 月 27 日に撮影）

みんなでパール浅間を見に行こう！

浅間山の新たな魅力を発掘するとともに、地元の山に親しみ、山への感謝の機会をつくろうと、8 月の「ダイヤモンド浅間」に続き「パール浅間」を見に行くイベントを企画した。浅間山の山頂部に満月前後の月が懸かり、パールのように淡く輝く神秘的な現象は、様々な条件が重ならないと見られず、天気が良くても年に 1～2 日程度しかない。この奇跡の絶景をひと目見ようと、地元を中心とした 22 名の参加者とともに歩いた。

日　程：2017 年 11 月 4 日（土）14 時 30 分 ～ 19 時 15 分
行　程：高峰高原ビジターセンター→【表コース】→槍ヶ鞘（夕焼け）→トーミの頭→【中コース】→高峰高原ビジターセンター
参加者：22 名、ガイド・スタッフ 5 名
参加費：500 円（保険代込み）

■活動の様子

集合時はガスと雪混じりの強風が吹きすさみ、出発を見合わせる状況だったが、風が弱まるのを見計らい出発した。天候はこれから回復傾向にあるものの、果たしてパール浅間は見られるのか。

浅間山が姿を現す槍ヶ鞘に到着。予定では夕焼けに染まる紅浅間（べにあさま）を拝めるはずだったが、いまだ厚い雲の中……。月の出まで後 1 時間しかなく、参加者からは不安そうな空気が流れている。

「あっ、後ろを見て！」。槍ヶ鞘からトーミの頭へ向かう道中、振り返ると小諸や佐久平の明かりが輝いていた。だんだんとガスが抜けてきたようだ。しかも雨上がりの澄んだ空気なので、一層輝いて見える。パール浅間の期待感も一気に高まった。

トーミの頭に到着すると、薄暗いなか浅間山の雄姿が眼前に広がっていた。ところが、月の出の直前になって山頂付近が雲に隠れてしまった。一瞬だけでも輝くパールの姿が現れるよう全員で祈るが、時間は無情にも過ぎていく。もはやこれまでか。

すると、数分後に雲が流れ去り、浅間山越しに光り輝く満月が現れた。ぼんやりどころか強い輝きを放ち、まばゆいばかりだ。少しずつ昇るパール浅間の奇跡の光景を逃すまいと、夢中でシャッターを切った。

ドラマチックな展開となったツアーに、皆さん満足していたようだ。やはり本物の自然はキレイなんだと改めて感じ、帰途についた。天候次第の企画だが、今後も継続できたら、と思っている。

第 10 回 橋谷晃さんと歩くトレッキング講座

自然の美しさ、雄大さ、繊細さに触れるガイドウォークを行い、ただ歩くだけではないトレッキングの魅力を伝える体験講座を開催した。今回も、幅広い世代に人気のある山岳ガイド・橋谷晃氏にご協力いただき、トレッキングの楽しみ方を知ることを目的に実施した。

日　程　：2018 年 1 月 20 日（土）9 時 ～ 21 日（日）16 時
内　容　：1 月 20 日（土）　湯ノ丸山スノーシュー・トレッキング
　　1 月 21 日（日）　篭ノ登山・水ノ塔山縦走スノーシュー・トレッキング
人　数　：参加者 9 名（男性 2 名、女性 7 名）、
　　講師 1 名、事務局 1 名、サポートスタッフ 1 名（木風舎）
講　師　：橋谷 晃（ネイチュアリングスクール木風舎代表）

■活動レポート

参加者の半数ほどがスノーシュー初体験だという。この日は快晴。展望に期待を込めて歩き始めると、バリバリと雪の表面の割れる音がした。数日前に降った雨の影響で、いったん溶けた雪が層になって固まるモナカ雪になっていたのだ。

少し歩くと、この日の目標である湯ノ丸山が眼前に姿を現した。雪の上には小動物の足跡。講師が、キツネとウサギの足跡だと教えてくれた。トレースを少し逸れると膝まで埋まる。かなりの積雪だ。青空にザクザク、バリバリと歩を進める音が響く。

2 時間ほど登ると頂上だ。講師に山の名前を聞きながら、大展望を満喫した。山頂から少し降りた所で昼食休憩。帰りはヒップソリで滑れそうな所を探してみるものの、思ったほど進まず、雪を踏みしめて下山した。

夜は芋煮、ねぎ塩豚鍋と 2 種類の鍋を作り、乾杯した。講師のお話を聞いたり、参加者同士で山の情報交換や写真を見せ合ったりと、楽しいひとときはあっという間に過ぎていく。締めの雑炊、うどんまでしっかり食べ、翌日に備えた。

2 日目も快晴となった。まずは池の平湿原に向けて樹林を歩く。スノーシューでの歩き方に慣れてきたのか、参加者の足取りは軽い。この日もカモシカなど動物の足跡に足を止め、講師の解説に耳を傾ける。池の平湿原から篭ノ登山への登山道に入ると、一気に登りが急になった。

1 時間ほどの登りを経て、山頂に到着。「篭ノ登山は日本列島の幅が体感できる山」と講師。遠くに富士山の姿も浮かび上がり、360 度のパノラマに参加者は時を忘れて見入っていた。この時期にしては珍しく風が弱かったので、ここで昼食とした。

昼食の後は水ノ塔山に向けて出発。アップダウンの多い稜線は、所々雪が風で飛ばされ、岩が露出している箇所もある。スノーシューで踏まないように気を付けながら、1 時間ほどで水ノ塔山に到着。そこから先は冬しか歩けないコースもあり、キャベツ畑で有名な嬬恋村方面の眺めを楽しみながら下山した。

振り返ると、歩いてきた稜線がよく見えた。下山後は、標高 2000mの高峰温泉で入浴タイム！　温泉にゆっくり浸かって疲れを癒したり、名物のくるみおはぎでお腹を満たしたりと、過ごし方はそれぞれ。冷えた体が温まったところで、雪上車に乗って帰路につく。屋根上のオープンデッキは満員で、天気と眺めを存分に楽しんだ。

今回、2 日間とも天候に恵まれ、雪山の魅力に触れるいい経験となった。来年度の企画を望む声もあり、引き続き世代や性別を問わず楽しめるような企画を行っていきたい。

自然ガイドステージⅠ「安全管理技術研修」

公益社団法人日本山岳ガイド協会　試験・研修委員会

１．実施報告と結果

2017 年度　自然ガイド・スキー指導者のための安全管理技術研修報告書

開催日　：2017 年 12 月 7 日（木）～10 日（日）
開催場所：長野県小諸市　安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
参加者　：8 名
　　：公益財団法人安藤スポーツ･食文化振興財団助成事業
参加費　：42,000 円
担当講師：平木 順（全日程）、　畠山 浩一（全日程）
結果　　：自然ガイドⅠ：8 名とも合格

２．講義および実技内容

○　12 月 7 日（木）

9 時 20 分　開講式　オリエンテーション

9 時 30 分～11 時 00 分

日本山岳ガイド協会（以下、JMGA）の資格制度について本研修会の位置付けおよび自然ガイドの業務　畠山

11 時 00 分～12 時 00 分

フィールドにおける安全管理、安全管理の基本認識　平木

13 時 00 分～17 時 00 分

自然界における危険の認識と評価、危急時の初期対応　平木
危険の予知と認知、リスクアセスメントの方法論、
KYT トレーニング

18 時 00 分～20 時 30 分

安全管理　平木

19 時 30 分～21 時 00 分

ロープ、ハーネス、カラビナ、スリングの基本的な知識、まとめ方
自然ガイドが覚えていたい基本的なロープの結び方、固定法
畠山・平木

○　12 月 8 日（金）

8 時 30 分～11 時 05 分

地図とコンパスの使い方　畠山

11 時 10 分～12 時 00 分

山の気象と天気　畠山

13 時 00 分～17 時 00 分

横方向のロープの固定　畠山・平木

ムンターヒッチを利用した簡単な顧客ビレイ技術、ツエルト設営、

搬送・梱包技術、足首捻挫のテーピング

19 時 00 分～20 時 00 分

危急時対応技術　気象遭難、運動生理学、法的責任　平木

20 時 10 分～21 時 00 分

ルートガイディングのプランニング、明日の実習ルートの計画

畠山・平木

○　12 月 9 日（土）

8 時 00 分～15 時 00 分

フィールド実習　畠山・平木

ルートガイディングの実践　浅間･八ヶ岳パノラマトレイルを使って

15 時 10 分～17 時 00 分

応急手当の基礎知識　包帯、骨折捻挫の固定　平木

○　12 月 10 日（日）

8 時 30 分～12 時 00 分

危急時対応技術　応急処置シミュレーション・トレーニング

平木・畠山

13 時 00 分～14 時 00 分

自然解説の基礎知識　畠山

14 時 30 分～15 時 20 分

研修確認試験

16 時 00 分　閉講式　　解散

講師　試験採点後、備品事務局に発送後撤収

３．担当講師所感

<講師報告１>　　担当者　畠山　浩一

講習内容　　講義（自然ガイドの業務･地図と地形、山の気象、自然解説の基礎知識など）

１日目：(講義)自然ガイドの業務 、(実技)ロープの結び方

2 日目:(講義)地図と地形、山の気象、(実技) ロープの固定と通過のさせ方、ムンターヒッチを使った引上げと引き降ろし、ロアーダウン、ツエルト設営

3 日目:(実技)第 1 班担当、ルートガイディング、自然解説技術、安全管理技術

4 日目:(講義)自然解説の基礎知識、(実技) 応急手当シミュレーション・トレーニング

☆感想　参加者皆さんは前向きに勉強しようという姿勢で臨まれている印象だった。8 名での進行は、参加者全員の顔や声が良く分かり、グループ分けしたときも 4 名と理想的な人数で、伝える側としてはキメ細かく対応できた。

この研修を行うには、百福センターは施設や周囲の環境も恵まれていて、進行が大変スムーズで、有機的な研修ができると感じている。

☆理解度・習得度　教本に沿っての講義の内容は研修期間中良く勉強され、理解を進めている様子だった。ロープ技術などは、普段使用していない技術がほとんどだったようで、期間中だけではとても習得は難しかった。救急法なども含む危急時対応技術などと並行して、今後繰り返し訓練が必要であることを伝えた。

☆課題　自然ガイドⅠの性格上、装備品などは登山ガイドに比べるとかなり簡略化されているが、実際にガイドを行うフィールドや、顧客の事故などの対応については大きな差はないところもあり、もう少し指定装備を増やすべきかもしれない。これについては、公開試験の実技検定と同時に検討したい。研修の主たる目的が「安全管理技術」であるが、救急法の細かな手技については、初心者同然の方もいて、事前の参加資格に、日赤や消防の講習などを求めることができないか検討したい。

☆改善策　装備表などは、自然ガイド検定と同一の水準としたい。

☆今後の要望　基盤となる地域にもよるが、参加者の中には、自然学校などで雪上のフィールドで活動されている方も多いようなので、希望者には雪上のプログラムも用意し、ステージⅡの資格まで取得できるような研修も検討できないものか。

<講師報告２>　　担当者　平木　順

講習内容　　講義（安全管理技術・危急時対応技術・山岳事故の分析・法的責任など）

1 日目：(講義)安全管理、危急時の初期対応、危険の予知と認知、リスクアセスメント、KYT、心理学、(実技)ロープの結び方

2 日目：(講義)気象遭難、運動生理学、法的責任、(実技)ロープの固定と通過のさせ方、ムンターヒッチを使った引上げと引き降ろしとロアーダウン、ツエルト設営、ザック搬送、ザック担架、足首捻挫のテーピング、体位変換

3 日目：(実技)第 2 班担当、ルートガイディング、自然解説技術、安全対策技術、包帯、骨折・捻挫の固定、体位変換

4 日目：(実技)応急手当のシミュレーション・トレーニング

☆感想　　現在、自然ガイドとして活躍中の方が多く、解説技術についてはそれなりのものを感じた。一方、地図読みや気象、安全管理技術については、日常使わないものが多く、今回の研修で学べるものが多かったものと発言されており、実際に講師としてもそう感じた。自分のガイディング・スタイルで使えるものは学び取ろうという態度で受講されていたので、熱心さを感じた。

☆理解度・習得度　安全管理技術については、これから何度も繰り返し練習を行うことが必要であることは、今回の参加者に限らず同様のことが言える。その上で教本やマニュアルが充実してきたので、帰って復習を行うことも十分にできると感じた。危急時対応技術については天候や細かい設定を変えて、同じ傷病に対応できるように、何度も練習する必要性を感じる。これはすでに資格取得した JMGA のガイドも同様である。

☆課題　　登山ガイドとはガイディング・スタイルの違う、自然ガイドの安全管理に対する方法論をもう少し見直すべきではないかと感じた。特にロープを使う安全管理については、自然ガイドのフィールドにどのようなニーズがあるのか、もう少し考えても良いかもしれない。また、危急時対応技術においても、自分のフィールドで起こり得る可能性を追求し、それに対応できる装備を整えておくことをアドバイスした。

☆改善策　　骨折・捻挫等の対応について、ストックなど手持ちの装備でできる方法も教本に記載すると良いと思う。また、ロープワークについても自然ガイドのアクティビティで、安全管理に必要な結び方を日常使用で慣れる

ことができるようなものを、教本で紹介するのも良いと思う。

☆今後の要望　自然ガイドステージⅡの資格を今回のように講習会で取得できるように望みたい。現在、JMGA の自然ガイドステージⅡ資格を取得する者が少ないのが現状であり、もう少し取得しやすく、現実に沿った制度にする必要性を感じる。

事務局スタッフ近況

■安藤 伸彌（あんどう のぶや）

この春から、子どもが「森のようちえん」に通い始めました。園舎がないので、雨の日も雪の日も外で過ごしますが、みんな水たまりや泥んこでも臆することなく遊びます（教育委員などが視察に来ると、結構引くらしい）。我が子はまだ親離れができず、登園のたびに泣いているものの、上の子たちに刺激を受けてか、少しずつ自分でできることも増えており、日々成長を実感しています。それに比べると、自分の低迷ぶりがなんと嘆かわしいことか……。

■小島 真一（こじま しんいち）

安藤百福センターができて８年､私が小諸に移住してからも８年、このたび一念発起して夢のマイホームを建てることになりました。土地探しに苦労しましたが、地元の工務店さんともご縁があり、この夏完成の予定です。一番の変化は、全く興味がなかった「家相（家の風水みたいなもの）」の世界に足を踏み入れたこと。家相を最重視する妻に対し､「時間の無駄」､「全くの迷信」､「鬼門？　鬼はあなたでしょ」という不用意な発言によって、危急存亡の日々を過ごしてきました。きっと新生活はハッピーに違いない！

■横堀 咲紀（よこぼり さき）

先日、刀剣鑑賞会に参加し、初めて生の日本刀に触れる機会に恵まれました。佐野美術館で展示されていた長谷部国信作の「からかしわ」。大胆な皆焼にひと目惚れしたものの、美術館は撮影禁止、図録の写真はいまいち。そんなわけで、自分の手に持ってみた「からかしわ」の重み、鉄の匂い、動かすたびに表情を変える刃紋、ひとつひとつに、「からかしわ」の来し方行く末を思いました。写真はそれと関係ありませんが、バーベキュー検定中級を受験したときのものです。

巻末資料

新聞掲載記事（一部）

インバウンド取り込みへヒント

日本ロングトレイル協会
第5回ロングトレイルシンポジウム

自然＋文化で独自性を
訪日外国人の発信は重要

特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会（JLTA、節田重節会長）は2月24日、安藤百福センター（長野県）で「第5回ロングトレイルシンポジウム」を開催した。今回は〝ロングトレイルとインバウンド〟をテーマに、特別講演やパネルディスカッションが行われた。訪日外国人が増加し、団体旅行（パッケージツアー）から個人旅行へ動態変化見られる中、こうした流れをロングトレイルにどう取り込むか。日本のロングトレイルの再評価も含めて、そのヒントが示された。

今後の成長・発展へのヒントが示された

WTNガレオ・セインツ会長

今回のシンポジウムには、100人を超える関係者が参加し、テーマへの関心の高さをうかがわせた。参加者は、ワールドトレイルズネットワーク（WTN）会長のガレオ・セインツ氏、日本オリンピック委員会名誉委員の水野正人氏（ミズノ相談役会長）らの特別講演、現場に携わるパネリストによるパネルディスカッションを熱心に聴講した。

JLTA名誉会長である安藤宏基氏（公財安藤スポーツ・食文化振興財団理事長、日清食品ホールディングス社長・CEO）は冒頭のあいさつで、「ロングトレイルは、自然・文化・歴史などを感じられることから人気が出てきた。日本を再発見するということ。このことは、インバウンドで日本の魅力を知ってもらうことにも役立つ」と、インバウンドの促進と取り込みに期待感を示した。

特別講演ではまず、WTNのガレオ会長がロングトレイルの重要性について話した。ガレオ会長は、ロングトレイルの〝6つの教え〟〝利益〟〝課題〟などを説明。「ロングトレイルで重要なことは、よりよい人間になるということ。〝6つの教え〟が人間に変化をもたらせる。人間が変容する」と話した。

さらに、トレイルによってもたらされる利益について、〝地域への経済効果〟や〝健康的なライフスタイル〟と共に、「災害インフラとしての利益も大きい。都市計画上の回復策としても有効」と指摘。参加者からの質問に、「地元の人に対しては、単にはなく、様々な利益を総合的に伝えることが重要」をアドバイスした。

トレイルの課題としては、〝維持管理が十分でない〟〝来訪者が過剰なトレイルがある〟〝トレイルへの再投資が不十分〟――などを挙げ、ロングトレイルの課題として「距離が長いことから管理に関わる人が多く、調整しずらい」ことや、来訪者数に比例した資金が不足している現状を示唆。その上で、「質の良いトレイルが〝6つの教え〟を伝えられる」と課題の解消を訴えた。

またガレオ会長は、「日本には素晴らしいロングトレイルが多いが、国際的ロングトレイルの恩恵を受けていない。日本では次世代のトレイルリーダーを育成し、国際ネットワークにつながること、世界のトレイルマップに日本のトレイルを入れる活動が必要」と話した。

シンポジウムの後半は、「ロングトレイルにおけるインバウンドへの課題」と題したシンポジウム。JLTA代表理事・中村達氏をコーディネーターに、ルーカスB.B（PAPERSKY編集長）、近藤謙司（国際山岳ガイド）、高野賢一（信越トレイルクラブ事務局長）、節田重節の各氏が話を展開した。

日本のロングトレイルを数多く歩き世界に発信しているルーカス氏は「街道を歩くのが好き。街道は昔の人が歩いた道＝トレイルであり、歴史を学び人々と触れ合える。今、本街路は外国人でいっぱいだが、ほかのトレイルも上手く伝えれば人は増える」と指摘。

高野氏は「日本人の英語では魅力が伝わらない。外国人は大勢来ていて、その人たちが発信してくれることが大きい」と、インバウンドの効果・重要性を話している。

パネリスト各氏が共通したのは、日本のトレイルが「自然の方へ行くのか、文化の方へ行くのか」という方向性。様々な見方が示されたが、「街道は日本文化を体験できる舞台場。文化と自然をうまくミックスすれば、外国に無い日本独自のロングトレイルになる」（ルーカス氏）との方向で一致した。加えて、「ソフト、アクティビティを充実させたい。例えば、日本の雪は世界でも有名で、この魅力を世界にも日本人にも知らせることが重要」（近藤氏）との指摘も共感を呼んだ。

水野正人氏・特別講演
五輪レガシーへの役割大
国内ツーリズムで生きる

今回のシンポジウム「インバウンドとロングトレイルの魅力」と題して特別講演を行った。この中で水野氏は、無形のレガシーとして観光ツーリズムを挙げ、「ロングトレイルと通じるものがあり、重要な役割を担う」と指摘した。

ロングトレイルの魅力を示す水野氏

「オリンピックレガシー」では、水野正人氏が

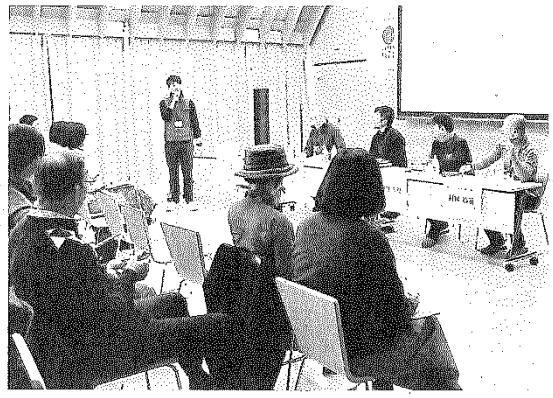
東京オリ・パラで訪日外国人の増加が予測され、そこへの対応策の一つとしてロングトレイルの重要性が増している。水野氏はそれだけではなく、「ロングトレイルを歩くだけで災害に強い人を作ることができる。ロングトレイルには様々なエレメントがあり、一つを改善し、質を高めていけば、もっとロングトレイルが普及する」と期待を示した。

WTN・ガレオ会長
「次世代トレイルリーダーの育成、国際ネットワークへのつながり重要」

2018年3月1日　スポーツ産業新報

資源生かし 地域元気に

ロングトレイル どうつくる



講演や公開討論で「ロングトレイル」について学んだ参加者ら

小諸で講座最終回

専門家が講演や討論

自然を楽しみながら長距離を歩く「ロングトレイル」について学ぶ「ロングトレイルのつくり方講座」が25日、小諸市の安藤百福記念自然体験活動指導者養成センターで開かれた。ロングトレイルを通じた地域活性化と人材育成を進める狙いで、同センターが主催。専門家による講演や公開討論があり、県内外の約50人が参加した。

講演では、環境省自然環境計画課の岡野隆宏・保全再生調整官がロングトレイルの課題を説明。「地域の認知度が低いと維持管理がおろそかになりがちで、歩道が荒廃し利用者も減る」と指摘した。

公開討論には、県外のロングトレイル運営者ら4人が参加。パネリストの1人は、生活道路をロングトレイルとして利用しているネパールを紹介し、「地元の人と交流することがハイカーにとって魅力となっている」と述べた。

同センターに事務局があるNPO法人日本ロングトレイル協会加盟の国内のロングトレイルは全国に22カ所。同センターを起点とする「浅間・八ケ岳パノラマトレイル」は浅間連峰や八ケ岳連峰の眺望を楽しめる4～16キロの5コースがある。本年度の講座は全3回で、この日が最終回だった。

2018年2月26日　信濃毎日新聞

ビオトープ造成開始

安藤百福センター「昆虫図鑑」計画も

小諸

ビオトープ造成のため草を刈る日清食品グループの社員ら

小諸市の安藤百福記念自然体験活動指導者養成センターの敷地で10日、ビオトープ（生物の生息空間）の造成が始まった。日清食品グループの社員有志や地元ボランティアら約30人が3日間の日程で参加。造成後、訪れた人に昆虫の写真を撮影してもらい「デジタル昆虫図鑑」を作る計画だ。

センターでは、即席ラーメンの生みの親で日清食品創業者の故・安藤百福氏が掲げた「食とスポーツは健康を支える両輪」との理念に基づき、自然体験活動の指導者の育成などが行われている。ビオトープ造成は日清食品グループの社会貢献活動として企画した。

造成地は、標高約700㍍に位置するセンター北側の約1500平方㍍。チョウが好む植物を植えるほか、湿地帯を造ってトンボを呼び寄せたり、落ち葉を敷いて甲虫類の居場所を整えたりする。小諸市にアトリエを構える昆虫写真家の海野和男さん（70）＝東京＝が監修する。

参加者はこの日、海野さんやビオトープの企画設計を担う造園家の河合嗣生さん（58）＝京都市＝らの案内で敷地内を観察。「しぶといね」などと話しながらニセアカシアなどを取り除いた。

来年5月には植栽を行う予定。ビオトープが形になったところで昆虫図鑑の作成を始め、来場者が撮影した昆虫の写真を事務局に送ってもらい、計100種の掲載を目指す。

2017年11月11日　信濃毎日新聞

小諸に「昆虫たちの楽園」

日清食品グループ ビオトープづくり

絶滅危惧種のチョウなどが生息するビオトープづくりをめざし、小諸市の安藤百福センター＝写＝で10日、造成作業が始まった。作業には地元住民らも加わり、来年5月に開園の予定。来園者に100種の昆虫を撮影してもらい、デジタル昆虫図鑑を作成することも計画している。

斜面のつる草などを取り除く参加者たち＝小諸市大久保

日清食品グループが2008年から取り組むCSRプロジェクトの一環。同市の自然環境を生かし、生態系の保存と生物多様性の向上をめざす。

今回の作業にはグループの社員や住民計約30人が参加。専門家の指導を受けながら、2泊3日の日程で約1500平方㍍の用地の草刈りや整地をする。来年春には地域の草花を植えるなどして、チョウやトンボ、カブトムシなど「昆虫たちの楽園」をつくる。

同センターによると、県内には国内最多の149種類のチョウが生息し、同市内では115種類が確認されている。一方で開発が進み、絶滅が危惧される昆虫も増えているという。

プロジェクトを監修する昆虫写真家の海野和男さん(70)は「この地域でいかに多様な昆虫が生きているかを、一人でも多くの人に知ってほしい。絶滅危惧種のヒメシロチョウやミヤマシジミなどが飛び交う光景を期待しています」と話している。

（土屋弘）

安藤百福センター

日清食品の創業者でインスタントラーメンを発明した故安藤百福氏が創設した安藤スポーツ・食文化振興財団が、2010年に自然体験活動の普及を目的に設立した。浅間山を望む5万2500平方㍍の広大な敷地内には研修所や野外学習施設があり、指導者研修や講演、体験イベントなどを開催している。

2017年11月11日　朝日新聞

安藤百福センター 運営組織

顧問

荒牧　重雄	東京大学名誉教授、火山学者
安藤　昭一	千葉大学 シニアフェロー
荻原　健司	スキーノルディック複合五輪金メダリスト、北野建設株式会社スキー部 GM
林　　貞行	元外務事務次官、元駐英特命全権大使
丸山　庄司	元全日本スキー連盟 専務理事

運営委員会

委員長	安藤　宏基	公益財団法人安藤スポーツ･食文化振興財団 理事長 日清食品ホールディングス株式会社 代表取締役社長・CEO
副委員長	安藤　徳隆	公益財団法人安藤スポーツ･食文化振興財団 副理事長 日清食品ホールディングス株式会社 代表取締役副社長・COO
委員	飯田　　稔	仙台大学 上級研究アドバイザー
	小泉　俊博	小諸市長
	中村　　達	アウトドアジャーナリスト・プロデューサー 特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会 代表理事 安藤百福センター センター長
	水野　正人	ミズノ株式会社 相談役会長

諮問委員会

委員長	節田　重節	特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会 会長
委員	磯野　剛太	公益社団法人日本山岳ガイド協会 理事長 一般財団法人全国山の日協議会 理事長
	神長　幹雄	株式会社山と溪谷社 編集者
	木村　　宏	北海道大学 特任教授 特定非営利活動法人信越トレイルクラブ 理事
	橋谷　　晃	木風舎 代表
	山田　俊行	トヨタ白川郷自然學校 學校長

（50 音順、2018 年 8 月現在）

2017 年度 安藤百福センター実施事業

■主催	
6/3	トレイル新コース開通イベント「初夏のトレイルを歩こう！」
8/11	ダイヤモンド浅間を見に行こう！（悪天候のため中止）
8/26	ダイヤモンド浅間を見に行こう！（悪天候のため中止）
9/21～22	トレイルのつくり方講座
11/4	パール浅間を見に行こう！
11/16～17	第 2 回ロングトレイルのつくり方講座
1/20～21	第 10 回橋谷晃さんと歩くトレッキング講座
2/3～4	第 1 回大人のトレイル歩き旅講座
2/25	第 3 回ロングトレイルのつくり方講座
3/10～11	第 2 回大人のトレイル歩き旅講座
3/17～18	第 3 回大人のトレイル歩き旅講座
■共催	
	特定非営利活動法人アウトドアライフデザイン開発機構
6/10～11	第 1 回ロングトレイルハイカー入門講座
7/22～23	第 2 回ロングトレイルハイカー入門講座
9/9～10	第 3 回ロングトレイルハイカー入門講座
10/21～22	第 4 回ロングトレイルハイカー入門講座
2/17～18	第 5 回ロングトレイルハイカー入門講座
2/25	特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会 第 5 回ロングトレイルシンポジウム
12/7～10	公益社団法人日本山岳ガイド協会 自然ガイドのための安全管理技術研修会
2/17～18	公益社団法人日本山岳会 第 7 回登山教室指導者養成講習会

2017 年度 研修利用状況表

月	日	団体名	事業名
4	1～3	東京農工大学環境教育研究室	環境教育ゼミ合宿
	19	NPO 法人浅間山麓国際自然学校	普通救命講習
	21～22	安藤百福センター	諮問委員会
	25～26	（一財）ウィルダネスメディカルアソシエイツジャパン	野外・災害救急法 WFA ベーシックレベル 2 日間
	26～28	日清食品ホールディングス（株）	社員研修
	29～30	長野県シェアリングネイチャー協会	ネイチャーゲームリーダー養成講座
5	1	清泉女学院大学	清泉セミナー
	8～9	（一社）嬬恋軽井沢自然倶楽部	NEAL リーダー養成講座
	9～10	（株）丸山珈琲	社員研修
	26～27	NPO 法人日本ロングトレイル協会	理事会・総会
	27～28	（公財）植村冒険館	植村冒険館アドベンチャー講座
	31～6/1	森環境教育事務所	NEAL リーダー養成講座
6	3	安藤百福センター	みんなで初夏のトレイルを歩こう！
	10～11	NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構	第 1 回ロングトレイルハイカー入門講座
	12～14	森環境教育事務所	NEAL インストラクター養成講座
	18	アロマ・フィエスタ	森と人と香りを繋ぐ研修会
	25	NPO 法人やまぼうし自然学校	アウトドアゲーム講習会
7	4	小諸市役所	小諸市アグリカフェ
	9	日本ボーイスカウト長野県連盟東信地区	ボーイスカウト講習会　長野第 253 期
	15	日清食品（株）長野営業所	おいしい食育スクール＆親子ハイキング
	22～23	安藤百福センター	会議
	22～23	NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構	第 2 回ロングトレイルハイカー入門講座
	24～25	日清食品ホールディングス（株）	社員研修
	25	信州外あそびネットワーク	指導教材制作検討会議
8	2～4	清泉女学院短期大学	保育特別講座 I （NEAL リーダー）
	17～18	長野県庁職員キャリア開発センター	政策研究合宿

8	20	NPO 法人信州アウトドアプロジェクト	ASE 研修
	20～22	東京農工大学	教職合宿
	24～26	日清食品ホールディングス（株）	あやしいオヤジを正しいオヤジに変える！プロジェクト
9	4～5	（公社）日本山岳ガイド協会	危急時対応技術講習会
	6～7	（株）バリューブックス	年間行動計画決定会議
	9～10	安藤百福センター	運営会議
	9～10	NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構	第 3 回ロングトレイルハイカー入門講座
	10～12	筑波大学山岳科学学位プログラム	山岳科学フィールド実習 A
	21～22	安藤百福センター	第 1 回ロングトレイルのつくり方講座
	22～23	安藤百福センター	諮問委員会
	27	国立赤城青少年交流の家	会議
10	6～8	日本ボーイスカウト長野県連盟	団運営研修
	11～13	森環境教育事務所	NEAL リーダー養成講座
	17～19	日清食品ホールディングス（株）	社員研修
	21～22	NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構	第 4 回ロングトレイルハイカー入門講座
	23～25	森環境教育事務所	NEAL インストラクター養成講座
	27	NPO 法人浅間山麓国際自然学校	プログラム開発研修
	31～11/1	（公社）日本環境教育フォーラム	東京シニア自然大学
11	4	安藤百福センター	みんなでパール浅間を見に行こう！
	6～7	（公社）日本山岳ガイド協会	自然ガイドのためのロープアクティビティ
	10～12	日清食品ホールディングス（株）	百福士プロジェクト
	14～15	小諸市役所	職員研修
	16～17	安藤百福センター	第 2 回ロングトレイルのつくり方講座
	18	（株）アバンティ	Bio マルシェ
	20～21	（公社）日本山岳ガイド協会	危急時対応技術講習会
	25～26	信州外あそびネットワーク	自然体験活動指導者養成講座
	30～12/1	NPO 法人蓼科・八ヶ岳国際自然学校	自然体験活動指導者研修会
12	2～5	（公社）日本山岳ガイド協会	ファーストエイド講習会

12	7～10	（公社）日本山岳ガイド協会	自然ガイドのための安全管理技術研修
	11～13	信州外あそびネットワーク	NEAL インストラクター養成講座
	14～17	NPO 法人国際自然大学校	スキートレーニング
	17～18	NPO 法人やまぼうし自然学校	2017 長野評価会
1	9～10	信州外あそびネットワーク	本部事務局会議
	9～10	安藤百福センター	運営会議
	18～19	長野県農政部農村振興課	農業次世代リーダー研修
	20～21	安藤百福センター	第 10 回橋谷晃さんと歩くトレッキング講座
2	3～4	安藤百福センター	第 1 回大人のトレイル歩き旅講座
	7～9	日清食品ホールディングス（株）	インターンシップ研修
	11	氷風穴の里保存会	植物講演会
	17～18	（公社）日本山岳会	第 7 回登山教室指導者養成講習会
	17～18	NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構	第 5 回ロングトレイルハイカー入門講座
	19～20	信州外あそびネットワーク	信州外あそびミーティング 2017
	23～25	NPO 法人日本ロングトレイル協会	第 5 回ロングトレイルシンポジウム
	25	安藤百福センター	第 3 回ロングトレイルのつくり方講座
3	6～7	（有）きたもっく	社員研修
	9	NPO 法人浅間山麓国際自然学校	プログラム事前講習会
	10～11	安藤百福センター	第 2 回大人のトレイル歩き旅講座
	17～18	安藤百福センター	第 3 回大人のトレイル歩き旅講座

編集後記

オープンして8年目、アウトドア団体との繋がりはもちろんのこと、地域との関係性もだいぶ濃くなってきました。編集担当2年目の今回も、執筆者・関係者のおかげで無事に発行することができました。厚く御礼申し上げます。◆2017年度最大のトピックは、日本の北端から南端まで1本の道で繋ぐ「JAPAN TRAIL」構想が発表されたことでしょう。総距離1万km以上の壮大なプロジェクトに、胸が高鳴ります。◆新企画として、写真や料理などトレイルでの楽しみ方を学ぶ講座を開催しました。その道のプロが、自分なりに遊び方をアレンジしてくれるところが面白く、ほかのトレイル講座と同様に、女性の割合が多かったのが印象的でした。◆ダイヤモンド浅間は、予定していた2回とも雨で中止に。一方、パール浅間は月の出直後に雲が取れ、劇的な光景を見ることができました。これで雨男返上です。◆表紙は浅間･八ヶ岳パノラマトレイルの浅間コース（準備中）にある「ねんぼう岩」です。高さおよそ80mの岩の上には、弁慶の金の茶釜が隠してあるという伝説も。◆トレイルを歩く機会に比例して、地域の歴史や自然への理解が深まってきたなぁ、と感じています。すっかりカントリーおじさんです。（K）

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
2017 年度 事業報告書

発行日：2018 年 8 月 31 日
発行人：安藤　宏基
編集人：中村　達

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
〒384-0071　長野県小諸市大久保 1100
Tel　：0267-24-0825
Fax　：0267-24-0918
URL：http://momofukucenter.jp/
E-Mail：info-center@momofukucenter.jp